

ΨXL «XZ ΓXY P TIX PX
式書科教

書修自語華

授教校學門專濟經北台

著 一 順 坂 香



行發堂三

台
北

式書科教

華語自修書

香 坂 順 一 著

黃清
一 取

四



台 灣 掬 水 軒 發 行

例言

一、本書は教科書式華語自修書の最終巻にして文言文(時文)と、小説・小品文・隨筆・論文・童話よりなる。

二、文言文(時文)と雖も、現今に在りては、白話の影響を受け、半白半文の状態に在れば、白話文の知識なくしては文言文の讀解不可能なるを知るを得べし。此の意味に於いて、本書にも白話文數篇を取り入れたり。

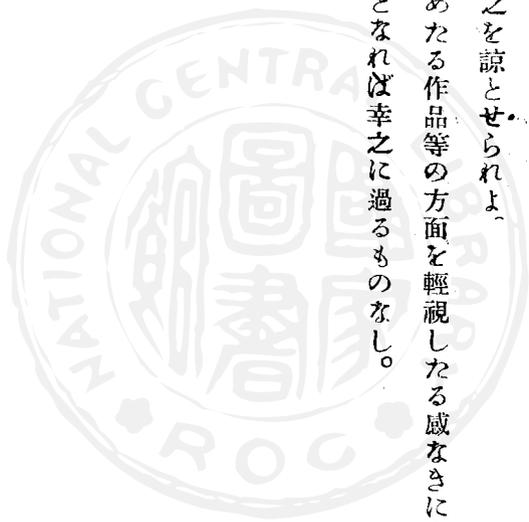
三、本書に收めたる作品は現代のものに限れり、これ讀者の要求方面と程度の餘りに高からざるを考慮したるに外ならず。最初の意圖として、現代有名作家の作品を一應網羅せんとしたるも、頁數の關係にて斷念する已むなきに至れるは著者の遺憾とする所なり。

四、本書は第一卷よりの讀者に非らざる者にも、容易に理解し得る様、註釋は重複を顧みず詳細を期したり。



五、本書に收めたる作品中には、其作品の一部のみ採録せしものあり、著者に於いて前後の關係の明白なる様意を配りたるも、或は十分ならざるを恐る。讀者本書の語學的なる點より之を諒とせられよ。

六、從來、本書に收めたる作品等の方面を輕視したる感なきにあらず、本書が幾分なりとも斯界の刺戟となれば幸之に過るものなし。



第四卷 目次

第一課	讀書必要明白牠的意思(白話文)	一
第二課	前題(文言文)	四
第三課	田橫(白話文)	八
第四課	前題(文言文)	一
第五課	社會服務團宣言(白話文)	一三
第六課	前題(文言文)	一五
第七課	報告鄉村的一封信(白話文)	一八
第八課	前題(文言文)	二一
第九課	約作伴赴校	二三
第十課	託帶信	二六
第十一課	報告棉價	三〇
第十二課	索貨樣	三二
第十三課	託代購某銀行股票	三五

第十四課	消遣	三七
第十五課	最苦	四一
第十六課	天資和努力	四五
第十七課	新生活(胡適)	五〇
第十八課	山中雜記(謝泳心)	五八
第十九課	寄包裏(老向)	六八
第二十課	天 窓(茅盾)	七五
第二十一課	態的母鷄(童話)	八〇
第二十二課	比 較(豐子愷)	八六
第二十三課	村兒輟學記(老向)	九五
第二十四課	北伐途次(郭沫若)	一〇六
第二十五課	駱駝祥子(老舍)	一一〇
第二十六課	喫 茶(周作人)	一二九
第二十七課	說肥瘦長短之類(郁達夫)	一三六
第二十八課	孔乙己(魯迅)	一四三

第一課 讀書必要明白牠的意思（白話文）

黃清
一版

這是國父孫中山先生少年時代的故事。

在孫先生的少年時代，中國還沒有學校，只有學塾，孫先生就在翠亨村的學塾裏讀書。

學塾裏沒有星期，也沒有紀念日。每天早上，孫先生拿了書包走進去，讀幾句三字經，寫幾個方字；回家吃了午飯，再拿書包走進去，還是讀幾句三字經，寫幾個方字。今天這樣，明天也是這樣，沒有體育音樂，也沒有美術和勞作。盡去儘是讀，儘是坐。

讀三字經的方法，是塾師唱一句，學生跟着念一句，塾師不講，學生也不問；只是糊糊塗塗，無意識的讀着。孫先生覺悟到這一種讀書的方法是不合理的，有一天，他站起來反對道：「老師，我一些不懂！儘是這樣唱，有甚麼意思呢？我讀它做甚麼呢？」

塾師愕然站起來，取了戒尺，在手中掂量，厲聲喝道：「甚麼！你背叛經訓嗎？」

「不、老師，我並不反對經訓。到這裏來，是要老師教我的。我一些不明白書中的意思，可否請老師講給我聽？」

塾師無言可答了。

以後、孫先生在塾中，不論讀甚麼書，總說：「這本書裏，一定有道理的，我要找它出來！」

〔註釋〕

必要……必づ……せねばならぬ。

沒有星期——日曜日がない。

書包——本づゝみ。

方字——四角な字。漢字は形が四角でありますから斯く言

ひます。「方塊字」とも言つてみます。

儘是讀——ただ一途に讀むだけ。

跟着——ついて。

不講——譏議をしない。

糊糊塗塗——何が何だか分からずに。

覺悟——悟る。

一些不懂——少しも分からない。

愕然——驚きたる様。

戒尺——先生などが學生を教へるときに使用する竹の

板。

掂量——手にて重さをはかる。茲では「手に取り上げ打た

んとする」こと。

可否……すべきや否や。……しては如何でせうか……して

は良いでせうか悪いでせうか。

三字經——宋の王應麟の作にて三字を以つて一區切とな

つてゐる教訓歌で「人之初・性本善」に始まる。

讀書には必ず其意味を知らねばならぬ

これは國父孫中山先生の少年時代の話であります。

孫先生の少年時代には、中國にはまだ學校がなく、たとて學塾があるのみでした。孫先生は翠亭村の學塾で學問をして居りました。

學塾には日曜もなければ紀念日もありません。毎日朝早く孫先生はカバンをもつて出て行き、幾句かの三字經を讀み、幾つかの四角な文字を書き、家に歸へつて晝食をとると、又カバンをもつて入つて行き、尙ほ三字經の幾句かを讀み漢字を幾つか書くだけで、今日もこの様明日もこの様、體育や音樂もなく、美術や手工もなく、入るとたとて讀經ばかり、靜坐ばかりでした。

三字經を讀む方法は、塾師が一句唱へると學生はついで一句讀み、塾師は講義せず、學生も問ひません、たと何が何だか分からずに無意識に讀んで居るのみです。孫先生はこの種の讀書方法は不合理なるものであると悟り、或る日、彼は起ち上つて反對して言ひました。「先生、私は少しも分かりません、この様に唱へてばかり居て、何の意味がありませんか、私が其を讀んでどうするのですか」と。

塾師は愕然として起ち上り鞭を取り手中にもつて聲を勵まして怒鳴りました。「何だと、お前は經訓に反對するのか」。

「いえ、先生、私は決して經訓に反對しません、こゝに來たのは、先生が私を御教へ下さる様にと思

つたからです。私は少しも体の中の意義が分かりません。私が先生に講義して下さる様御願してはいけませんか。」

塾師は答へる言葉がなかつた。

以後、孫先生は塾中に在つては、何の本を讀んでも常に「此の本の中には、きつと道理があるに違ない。私は其を見つけ出さねばならぬ」と言つた。

第二課 前題（文言文）

此爲國父孫中山先生少時之故事。

孫先生少時，中國尙無學校，僅有私塾，孫先生卽讀書於翠亨村之私塾中。

私塾無星期，亦無紀念日。每日早晨，孫先生攜書囊入塾，讀三字經若干句，書若干字；歸家飯畢，復取書囊入塾，仍讀三字經若干句，書若干字。今日如是，明日復如是，既無體育與音樂，亦無美術與勞作；既入塾一味讀書，一味靜坐而已。

至三字經之讀法，乃塾師高唱，學生隨而和之；塾師不講解，學生亦不

問；僅作無意識之誦讀。孫先生覺悟此種讀書方法之不合理、一日、起立作責問曰：「師乎、書中所云、余毫無所知、如是昌讀、究有可益？余果何爲而讀之也？」

塾師愕然起立、手持戒尺作欲扑狀、厲聲呼曰：「惡！爾將背叛經訓乎？」

「否、先生、余不反對經訓。余來塾、本欲受先生之教。但余不明書中之理、請先生爲余講解之、可乎？」

塾師不能對。

自後孫先生在塾、無論讀何書、必曰：「書中必有理、余必探得之！」

〔註釋〕

早晨●早朝。

書篋―書物入れの「書包」と同じです。

飯畢―飯が終る。「畢」は「完畢」「完了」の意です。

既…亦…既に…も亦、…も…であり…も…である。「又…

又…」に同じです。

一味―只管ら、一途に。

而已―…のみ。「一味…而已」とつゞきます。

至…―…に至つては。「至於…」に同じです。

隨而和之―隨つて之に和す。

誦讀―聲を出して讀む。

講解―講義する。

作責問―責問をなす、詰問する。

師乎―先生よ。「乎」は呼びかけの助詞です。

究有何益—結局何の益があるか。「究」は「究竟」の意です。

何爲而讀之—何のために之を讀むのか。

作欸拈狀—欸とんとする様をなす。「拈」は「揆」「打」に同じです。「做了要打的樣子」と白話譯出來ます。

惡—何、賓斥を表はず嘆詞です。
爾—お前。第二人称の代名詞です。
爲余講解之—私に之を講義して下さい。「爲」は白話の「給」に相當します。

〔訓讀〕

讀書へ必ず其意思ヲ明白ニスルヲ要ス。

此へ國父孫中山先生ノ少時ノ故事デアル。

孫先生ノ少時ニハ、中國へ尙ホ學校ナク、僅カニ私塾有ルノミ。孫先生へ即チ翠亨村ノ私塾中ニ於イテ讀書セリ。

私塾ニハ星期ナク、紀念日モ亦ナシ。毎日早晨孫先生ハ書囊ヲ携ヘテ塾ニ入り、三字經若干句ヲ讀ミ、若干字ヲ書ク、家ニ歸ヘリテ飯畢ルヤ、復タ書囊ヲ取リテ塾ニ入り、仍ホ三字經若干句ヲ讀ミ、若干字ヲ書ク。今日是ノ如ク、明日復タ是ノ如シ、既ニ體育ト音楽ナク、美術ト勞作モ亦ナシ。既ニ塾ニ入レバ一味ニ讀書シ、一味ニ靜坐スル而已。

三字經ノ讀法ニ至リテハ、乃チ塾師高唱スレバ、學生隨ヒテ之ニ和シ、塾師講解セズ學生亦問ヘズ、僅カニ無意識ノ誦讀ヲ作スノミ。孫先生ハ此ノ種ノ讀書方法ノ不合理ヲ覺悟リ、一日、起立シテ責問ヲ

作^ナシテ曰ク「師乎、書中ノ云フ所、余ハ喜モ知ル所ナシ」是ノ如ク唱讀スルニ、究リ何ノ益有ランヤ
余、果シテ何ノ爲ニ之ヲ讀ムヤ」ト。

塾師愕然トシテ起立シ、手ニ戒尺ヲ持チ、拊^ヒント欲スルノ狀ヲ作シ、聲ヲ厲マシ呼ビテ曰ク「惡！
爾、經訓ニ背叛セントスルカ」ト。

「否、先生、余ハ經訓ニ反對セズ。余塾ニ來ルヘ本ト先生ノ教ヲ受ケント欲スルナリ。但シ、余ハ書
中ノ理ヲ明ニセズ、請フ、先生、余ノ爲ニ之ヲ講解サレンコトヲ、可ナル乎。」

塾師對ヘル能ハズ。

自後、孫先生ハ塾ニ在リテ、何書ヲ讀ムヲ論ズルナク、必ズ曰ク「書中必ズ理有ラン、余必ズ之ヲ探リ
得ン」ト。

〔文法〕

○「而已」は白話の「就是了」「罷了」に相當する同であります。次の如く相調しても使用されます。

不過……而已	} ……にすぎない、…のみ。
僅（只）……而已	
惟……而已	
惟僅……而已	

第三課 田 橫（白話文）

漢高帝劉邦統一天下的時候，山東地方有三個田姓的齊國，都給他滅掉了。田橫也是他們的同族，不能在山東地方存身，便到海島中去稱王。因此現在還留下了田橫島的名稱。

田橫到了島上，手下尚有義士五百人，本想慢慢部署，恢復齊國。無奈這時候，漢高帝勢力強大，田橫萬不能抵抗。漢高帝也向來佩服他是個第一流好漢，便派人去招呼田橫，請他到洛陽來。

田橫爲了漢高帝一再招請，勉強動身上道。但是到了半路。他總覺得就此投降，不免失去了人格，便立刻自刎而死。高帝知道了，流涕痛哭不止。一面禮葬田橫；一面再派人到島上去招呼那五百位義士。那裏知道這五百義士，聽得田橫的凶信，早已一齊自殺。

田橫和那四百位義士的意思，就是寧做斷頭漢，不做屈膝人。

〔註釋〕

存身——身をかく、身を容れる。

滅掉——滅びなくなる。

海島——島。

留下―留める、殘す。

部署―手配する、手くばりする。

無奈―いかんせん。

萬不能―…萬々…する能はず、萬々…出来ぬ。

向來―從來、これまで。

佩服―感心する。

招呼―招く、挨拶をする。

爲了―…のために。

一再―一度ならず、再三再四。

勉強―無理をして、我慢して。

勤身上道―出發して旅路につく。

田 横

漢の高帝劉邦が天下を統一した時、山東地方に三つの伯と言ふ姓の齊國がありました。皆劉邦に滅亡させられて了ひました。田横も彼等の同族で、山東地方に身を容れることが出来ぬので島に行つて王を稱してゐました。これがため、今でも尙ほ田横島の名稱が残つてゐるのです。

田横は島上に行き、手下に尙ほ義士五百人が居るので本來は悠くり手筈を整へて齊國を恢復せんとしました。が、いかんせんこの時は漢の高帝は勢力強大にして、田横は萬々抵抗は出来ませんでした。莫ひ

就此―これからすぐ、このまゝ。

不免―…を免れず、どうしても…となる。

自刎而死―自ら刎ねて死んだ。

流涕―涙を流す。

痛哭不止―痛哭して止まない。

一面―…一面…し、…し乍ら…する。

禮葬―敬意を表し葬ふ。

那裏知道―豈料らんや。

寧做―寧ろ…になるとも…。

斷頭漢―頭を切られたる男、首を刎ねる者。

爾陵人―膝を屈する者、人に降服する者。

高帝も従來彼を第一流の好漢であると感心してゐましたので、そこで人を派して田横を呼び、洛陽へ來る様に望みました。

田横は一度ならず漢の高帝が招請するので、我慢して出發旅途につきましました。だが、途中まで來ると、彼はどうも、このまゝ投降するのは人格を損すると考へて、そこで直ちに自ら刎して死んで了ひました。高帝は知つて、涙を流し痛哭して已みませんでした。田横を禮を以つて葬る一方、更に人を派してかの五百人の義士を招きました。所が料らずも、この五百人の義士は田横の死んだ知らせをき、早くも皆已に自殺して了ひました。

田横とかの五百人の義士の氣持は即ち「頭を刎ねるも、人に膝を屈せず」と言ふものであります。

〔文法〕

○山東地方有三個田姓の齊國、「都給他滅掉了」の括弧中は被動を表はして居るのですが、動作をうける主體がはつきりしません。それは意義上「三個田姓の齊國」であります。此の語は已に「山東地方有……」の主語になつてゐるのですから、結局被動の主體は省略せられてゐることになります。この種の省略は中國語に於いては習慣的なものでありまして、意義上明白なる場合には往々省略するの一原則に従つてゐるのであります。故に我々が譯讀する場合には、「此の意義上の明白から來る省略」に細心の注意を拂はねばなりません。

第四課 前

題 (文言文)

漢高帝劉邦統一天下之際、山東有田姓之齊國三、皆爲所滅。田橫爲齊之同族、不能安居山東、卽至海島爲王。——今猶留田橫島之名焉。

田橫至島、其部下有義士五百人、本擬徐圖恢復齊國。奈其時漢高帝勢力強大、田橫萬不能抗。漢高帝亦素服其爲人、使人招之至洛陽。

田橫因漢高帝一再招請、勉強上道。及中途、忽念卽此投順、未免有損人格、遂自刎死。高帝聞之、痛哭不已、命人禮葬田橫、且復遣使至島、招降餘人。孰知此五百義士、聞田橫之死、皆自殺矣。

田橫與其五百義士之意、以爲「寧爲斷頭漢、不爲屈膝人、」故自殺也。

(註釋)

際—の際。白話の「時候」です。

爲所滅—滅ぼされた。「爲…所…」は被動を表はすので

すが被動を及ぼす主體が省略せられると「爲所…」となります。

焉—白話の「了」「的」に相當する句末助詞。

本擬—「本來…せんとす」「本想」「本來想要」の白話になります。

奈—いかんせん。「無奈何」の略です。

使…をして…せしむ。

即此投順すぐこのまゝ降投す。

未だ……未だ……を免れず。どうしても……になる。

有損人格―人格を損ねる點あり。

〔翻譯〕

漢ノ高帝劉邦ガ天下ヲ統一セル際、山東ニ田姓ノ齊國ニアリタルモ、皆滅サル。田横ハ齊ノ同族ナリ。山東ニ安居スル能ヘズシテ、即チ海島ニ至リテ王ト爲ル。今モ猶ホ田横島ノ名ヲ留ムルナリ。

田横島ニ至ルニ、其部下ニ義士五百人有り、本ト徐ロニ齊國ヲ恢復スルヲ圖ラント擬ス。奈セシ其時漢ノ高帝ノ勢力強大ニシテ、田横ハ萬々抗スル能ヘズ。漢ノ高帝モ亦素ヨリ其ノ人ト爲リニ服シ、人ヲシテ、之ヲ招キ洛陽ニ至ラシム。

田横ハ漢ノ高帝一再招請スルニ因リ、勉強テ道ニ上レリ。中途ニ及び、忽、即チ此ニテ投順スルヘ、未ダ人格ヲ損スル有ルヲ免レザルト念ジ、遂ニ自ラ刎死セリ。高帝ヲ聞キテ、痛哭已マズ、人ニ命ジテ田横ヲ禮葬セシメ、且ツ復タ、使ヲ遣シテ島ニ至ラシメ餘人ヲ招降セシム。孰ゾ知ラン、此ノ五百ノ義士ハ田横ノ死ヲ聞キ、皆自殺セリ。

田横ト其五百ノ義士ノ意ハ「寧ロ斷頭ノ漢トナルモ、膝ヲ屈スルノ人ニ爲ラズ」ト以爲ヒ、故ニ自殺セルナリ。

孰知―孰ぞ知らん。豈料らんや。
以爲……と思ふ。

第五課 社會服務團宣言（白話文）

蜜蜂，能殼共同去採花釀蜜；螞蟻。能殼共同去扛擡食物，藏到洞裏。這種爲羣衆服務的精神，是值得我們佩服的。

我們的力量，原像蜂·蟻一般的微小；但我們也有蜂蟻一般的精神，組織了這小小的團體，要替社會幹一些事情。現在，我們先從公衆衛生運動着手：第一是滅蠅，蒼蠅是傳染病的媒介，我們必得首先撲滅它；其次是掃除道路，我們掃帚是拿得動的，當然不生問題；此外一切有益於社會的運動，只要我們的能力幹得到，我們都努力去幹！

最後，我們希望這種容易幹的工作，由我們一個小學，漸漸擴充到別的小學，由小學擴充到中學大學；再由學校擴充到社會全體，使全社會的人各盡能力去幹一種工作；正如孫中山先生說的「聰明才力小者，當人其能力以服十百人之務；聰明才力大者，當盡其能力而服千萬人之務。」那麼他們的力量比我們大，當然比我們所幹的更爲有價值，豈不是我們這小的團體，能殼引起社會的注意，收到遠大的效果嗎？我們先幹起來！

〔註釋〕

扛擡―かつぐ「扛」も「擡」も「かつぐ」の意です。

「擡」は「抬」をも書かれます。

藏到―…に藏ひ込む。「到」は次の「洞裡」まで「もつて」行つての意です。

服務―奉仕する。

值得―…に値する。

原像―…もともと…の如し。

先從―着手―先づ…から着手する。

必得―必づ…せねばならない。

首先―眞先に、手始めに。

掃帚―箒。

〔譯文〕

社會服務團宣言

蜜蜂は共同して花を採り蜜を醸造することが出来る。蟻は共同して食物をかつき、穴に運んで藏ふことが出来る。この種の群衆に服務するの精神は、我々の感服するに値するものである。

我々の力は元來蜂蟻の如く微小である。だが我々にも蜂蟻同様な精神があつて、この小さな團體を

拿得動―手に取り動かすことが出来る。「得動」は其動作を「なし得る」の意を表はします。

走不動―歩き得ない。「歩く」なる動作をやれない。

搬不動―運べない。「運ぶ」なる動作をやれない。

幹得到―なすことが出来る。「到」は「幹」なる動作が

十分に行き着くことを意味します。

努力去幹―努力してやる。「去」は「而」に同じです。

盡其能力以―其能力を盡しそして…。

比―更爲―よりも更に…である。「更爲」は「更是」とするも同じです。

豈不是―嗎―何と…ではないか。眞實に…であります。

先幹起來―先づやり始める。

組織して社會のために些か仕事をなさんとしてゐる。今我々は先づ公衆衛生運動から着手し、第一には蠅を滅する。蠅は傳染病の媒介である、我々は必ず最先に蠅を撲滅せねばならぬ。其次は道路を掃除する。我々は、箒は手に執ることが出来る故、當然問題を發生せぬ。此の外一切の社會に益ある運動は、たゞ我々の能力でなしに至りさへすれば、我々は皆努力してなさねばならぬ。

最後に我々は、此の種の容易になせる仕事が、我々一個の小學から、漸次別の小學に擴まつて行き、小學から中學大學へ、更に學校から社會全體に擴まり、全社會の人をして、各々能力を盡して一種の工作をなさしめ、丁度孫中山先生の「聰明才力小なる者はまさに其能力を盡して十、百の務に服すべし。聰明才力大なる者は、まさに其能力を盡して千萬人の務に服すべし」の如くなるを希望する。かくすれば、彼等の力は我々の力より大であるから、當然我々のなすものよりも更に價値があり、我々のこの小さな團體は社●の注意を引き起し、遠大なる効果を收め得るではないか。我々は先づなし始めん。

第六課 前

題 (文言文)

蜂、能共同採花釀蜜；蟻、能共同搬運食物，藏於穴中。此種爲羣衆服務之精神，頗足爲吾人所欽佩也。

吾人之力量，本如蜂蟻之微小，但吾人亦有與蜂蟻相若之精神，組織此小團體，謀爲社會服務。今日者吾人將先由公衆衛生入手。第一爲滅蠅：

蠅爲傳染病之媒介，吾人必首先撲滅之。其次爲掃除道路，吾人均能持帚，自不成問題。此外凡屬有益社會之運動，僅須吾人力所能及，吾人必皆努力爲之！

最後，吾人希望此種易爲之工作，由我輩所入之一小學，漸漸擴充至其他小學；由小學擴充至中學大學；再由學校擴充至社會全體，使全社會之人各盡所能，努力工作。一如孫中山先生所云：「聰明才力小者，當盡其能力以服十百人之務；聰明才力大者，當盡其能力而服千萬人之務。」若是，則其力量較大者，自較我輩所爲尤有價值；豈非吾人之小小團體，能引起社會之注意，而收遠大之效果乎？吾人願爲其先驅！

〔註釋〕

頗足爲——頗る十分である。

相若——相似たる。

謀爲社會服務——社會に服務せんます。「謀」は「圖」に

同じです。

今日者——今日は、今日。

入手——着手する。

第一爲——第一は……である。

均能持帚——皆帚を持つことが出来る。

凡屬——凡そ……。

僅須——僅かに……を要するのみ。白話の「只要」に相當し

ます。

努力爲之——努力して之をなす。

易爲——なすのは容易である。

一如一に…の如し、丁度…の如し。

若是「こ」ならは。「若」は「如」に同じです。

較大「や」大なる、比較的「大」なる。

自一當然。

較「…」よりも、…に比較して。

豈非「…乎」豈…に非らざるか。「豈不…嗎」に相當しま

す。

訓讀

蜂へ共同シテ花ヲ採リ蜜ヲ釀シ能フ、蟻へ共同シテ食物ヲ搬入シ穴中ニ藏フ能フ。此ノ種ノ群衆ノタ
メニ服務スルノ精神へ、頗ル吾人ニ欽佩セラルニ足ルナリ。

吾人ノ力量へ原蜂・蟻ノ如ク微小ナリ、但シ吾人モ亦蜂・蟻ト相若ルノ精神アリ、此ノ小々ナル團體
ヲ組織シ社會ニ服務センコトヲ謀ル。今日者、吾人ハ將ニ先ズ公衆衛生ヨリ入手ス。第一へ滅蠅ナリ、
蠅ハ傳染病ノ媒介ナリ、吾人ハ必ズ、首先ニ●ヲ撲滅ス。其次ハ道路ヲ掃除スルナリ、吾人ハ均シク掃
ヲ持スル能フレバ、自ラ問題ニ成ラズ。此ノ外、凡ソ社會ニ有益ナルノ運動へ、僅カニ吾人ノ力ノ能フ
及ブ所ヲ須スルノミニシテ、吾人ハ必ズ皆努力シテ之ヲ爲サン。

最後ニ吾人ハ、此ノ種ノ爲シ易キノ工作へ我輩入レル所ノ一小學ヨリ、漸々擴充シテ其他ノ小學ニ至
リ、小學ヨリ擴充シテ中學大學ニ至リ、再ニ、學校ヨリ擴充シテ社會全體ニ至リ、全社會ノ人ヲシテ各々
能フ所ヲ盡シテ努力工作セシメ、一ニ孫中山先生ノ云フ所ノ如ク「聰明才力小ナル者ハ、當ニ其能力ヲ
盡シ、以テ十百人ノ務ニ服スベシ、聰明才力大ナル者ハ當ニ其能力ヲ盡シテ千萬人ノ務ニ服スベシ」ナ

ルヲ希望ス。是ノ若クナレバ、其力較大ナル者ハ、自ラ我輩ノ能フル所ニ較ベ尤モ價値アリ、豈ニ吾人ノ小々ナル團體ハ社會ノ注意ヲ引起シ、而シテ、遠大ナル效果ヲ收ムルニ非ラザル乎。吾人ハ願ヘクハ其ノ先驅トナラン。

〔文法〕

本文には比較を表はす文言文の介詞があります。即ち「較」でありませんが、此は白話の「比」と同じです。文言文の比較句の例を次に若干掲げて置きます。

近日京中肉價較諸往年増一倍

(近日京中の肉の値段は往年よりも一倍増した)

上等人之飲食較平民爲佳

(上流の人の飲食は一般民衆よりも良い)

第七課

報告鄉村生活的一封信 (白話文)

志成兄；

許久不曾晤面，渴念得很！別後便到鄉間居住，謹將一年來生活情形，報告一二：

去年初到鄉間，適在十月不旬，榆葉半黃，楓林全赤，當夕陽西下的時

候、散步村外、彷彿身在畫圖中、別是一個天地。後來到來冬天、白雪紛飛、村前村後、一片茫茫、此種景色、在久居城市的人們、是難得欣賞的。今年春間、田野景色、更爲美妙：桃紅柳綠、隨處見到；各的鳥聲、叫得極其好聽、「好鳥枝頭亦朋友、」這句話真有意思。入夏以後、田事大忙、那火傘般的太陽、晒得農人們汗如雨下；但是他們有耐勞的習慣、絲毫不覺得苦。等到工作完畢、大家坐到樹蔭底下、上下古今、談論一陣、卻也着實有趣。

兄如有暇、何妨到鄉間來領略一下呢！

你的好友慰農。 月 日

〔註釋〕

許久—久しい間。

不曾—しなかつた。

晤面—面會する。

渴念得很—非常に思ふ、切に慕ふ。

適—丁度。

當…的時候—…の時には。「當…際」に同じですが、「當」

だけでもこの様に使用されます。

別是一個天地—別々一つの天地である、全く別天地である。

難得欣賞—欣賞するに難い、めつたに欣賞出来ない。

隨處見到—隨處に見られる。

叫得極其好聽—極めていい聲でなく。「極其」は「極めて」なる副詞で「其」は助字です。

田舎―畑の仕事、農事。

火傘船的―火の傘の様な

晒得―照りつけて…、…になるまで照りつける。

汗如雨下―汗が雨の降る様である。

等到…―…するに及んで。

〔譯文〕

郷村生活を報告する一通の手紙

志成兄

久しく御目にかゝらず眞に御久し振りで御座ります。お別かれしましてからすぐ田舎に参り住んで居りますが、謹んで一年來の生活情形を一二御知らせ致します。

去年田舎に來ました時は丁度十月下旬で、楡の葉は半ば黄色になり、楓の葉は全く赤くなつて、夕陽の西に沈む時村外を散歩しますと、恰も身は畫中に在る如く、別な天地でありました。後、冬になりますと、白雪はしきりに飛び、村の前後は一面茫茫とし、此の景色は、久しく都會に住んでゐる人々には滅多に鑑賞出來ぬものです。

今年の春は、田野の景色は更に美妙で、桃の紅柳の緑は、到るところに見受けられ、各種の鳥は妙な囀をして居りました。「好鳥枝頭も亦友達」と言ふこの言葉は眞實に意味があります。夏になつてからは農事が非常に忙しく、かの火の傘の如き太陽は、農夫が雨の如く汗を流すほど照りつけます。だ

完畢―終る、完了する。

着實―眞實に。

如有暇―若し暇あれば。

何妨―二つ…しては如何。

領略―分かる、體得する、味合ふ。

がかの農夫たちは勞に耐へる習慣があり、少しも苦しみを覺えませんが、仕事が終わりますと、皆は樹蔭に坐つて話に花をさかせます。これも却々面白味があります。

貴君若し御暇が御有りでしたら一つやつて來て味合つて見たら如何ですか。

親友 慰 農 月 日

第八課 前 題 (文言文)

志成兄：

久不晤面，曷念須臾！別後即往鄉間居住，謹將一年來之生活情形，略作報告。

去歲始至鄉間，適在十月下旬，榆葉半黃，楓林全赤，當夕陽西下之時，散步村外，彷彿身在畫圖中，別是一番天地。及至冬日，白雪紛飛，村前村後，一片茫茫，此種景色，久居城市之人，頗難得欣賞之也。

今年春，田野景色，尤爲美妙；桃紅柳綠，隨處可見；羣鳥鳴聲，尤爲悅耳，「好鳥枝頭亦朋友」此語誠有味哉。入夏以後，田事大忙，陽光似火傘，農人被灼，揮汗如雨。但彼等有耐勞之習慣，絲毫不覺其苦。工作既

畢、羣坐樹蔭下、無所不談、頗有奇趣也。

兄如有暇、曷不來鄉一領略乎！

弟 慰農 上 月 日

〔註釋〕

往鄉間居住——鄉間に行つて住む。

略作報告——寸報告をする。

一番天地——一つの天地。

及至冬日——冬に至るに及び、冬になると。

難得欣賞之——之ヲ欣賞スルヲ得ルハ難シ、滅多に之を欣

賞することは出来ない。

尤爲美妙——尤も美妙である。

〔翻譯〕

志成兄

久シク晤面セズ、渴念頗ル深シ、別レシ後即ニ鄉間ニ往キテ居住セリ、謹ミテ一年來ノ生活情形ヲ將ツテ、略々報告ヲ作サン。

去歲始メテ鄉間ニ至リシハ、適々十月下旬ニ在リ、楡ノ葉半バ黄ミ、楓ノ林ハ全ク赤ク、夕陽西下ノ

隨處可見——隨處に見る可し、隨處に見ることが出来る。

尤爲悅耳——尤も耳を悦ばす。

被灼——灼きつけられる。

揮汗如雨——汗を散らすこと雨の如し、汗を雨の如く流す。

無所不談——談ぜざるものなし、凡ゆることを話する。

曷不——乎——曷ゾ——セザル乎、どうして……しないか。

時ニ當リ、村外ヲ散歩スレバ、彷彿身ハ畫圖中ニ在ルガ如ク、別ニ是レ一番ノ天地ナリ。冬日ニ至ルニ及ビ、白雪紛ニ飛ビ、村前寸後ハ、一片茫茫タリ。此ノ種ノ景色ハ、久シク城市ニ居ルノ人ハ、頗ル之ヲ欣賞スルヲ得難キ也。

今年春、田野ノ景色ハ尤爲モ美妙タリ、桃紅柳綠ハ隨處ニ見ル可ク、群鳥ノ鳴聲ハ、尤爲耳ヲ悅バセリ。「好鳥枝頭モ亦朋友ナリ」此ノ語ハ誠ニ味有ル哉。夏ニ入りタルノ後、田事大ニ忙シ、陽光火傘ニ似、農人灼カレ、汗ヲ揮フニ雨ノ如シ。但シ、彼等ニハ勞ニ耐ヘルノ習慣アリ、絲毫モ其ノ苦ヲ覺エズ、工作既ニ畢レバ、群ハ樹蔭下ニ坐シ、談ゼザル所ナク、頗ル奇趣有ル也。

兄、如シ段有ラバ、曷ゾ郷ニ來リテ一度領略セザラン乎。

弟 慰 農 月 日

第九課 約作伴赴校

某某同學兄大鑒。日前造

府恭候。得以促膝談心。快慰矣。以。作妾本校通告。定於本月十六日開課，各生務於前一日到校。想

尊處亦已接到。弟擬於十五日束裝就道。未知吾

兄何日榮行。如蒙

不棄請即於是日

駕臨舍間。俾得携手同行。以免途中寂寞。何幸如之。專此奉約。順頌

春祺。

弟某某手啓 某月某日

〔註釋〕

約―誘ふ。

作伴―伴になる。一緒に。

同學―同窓生。

日前―先日。

大覽―御高覽。

造府―府に造る、お宅に參上する。

恭候―御待ちする。

促膝談心―對座して語り合ふ。親しく語り合ふ。

快慰奚似―愉快なること奚ぞ似ん。愉快なることこの上

もない。

定於―…に於いて。

開課―授業を始める。

各生―各學生。

擬―…せんと欲す。

東裝就道―旅裝をととのへて出發する。

榮行―御出發。

如蒙不棄―若し不棄を蒙れば、若しお嫌でないなら、若

し御差支へなくば。

駕臨―御出で下さる。

舍間―拙宅。

俾―…せしめる。

以免―…を免れる様に。

何幸如之―何の幸か之に如かん、此以上の幸はない。

專此奉約―專ら此に奉約す、先づは右御誘まで。

順頌―序に…を頌す。「順」は「ついで」の意。

春祺―春季の御安泰。

手啓―親しく書いて申上げる、自分で書き申し上げる。

〔開讀〕

伴ニ作リテ校ニ赴クヲ約フ

某々同學兄大鑒、日前府ニ造リ恭候シ、促膝談心スルヲ得タリ、快慰奚ゾ似シ。昨本校ノ通告ニ接セシニ、本月十六日開課スレバ各生ハ務メテ前一日ニ於イテ校ニ到レト。想フニ尊處モ亦已ニ接到セシナラン。弟ハ十五日ニ於イテ、東装シ道ニ就カンコトヲ豫スルモ、未ダ吾兄何日ニ榮行スルヤヲ知ラズ、如シ不棄ヲ蒙ラバ、請フ即チ是ノ日ニ於イテ舍間ニ駕臨セラレ携手同行スルヲ得シメ、以ツテ途中ノ寂寞ヲ免レンメンコトヲ、何ノ幸カ之ニ如カン。專ラ此ニ奉約ス。順ニ春祺ヲ頌ス。

弟 某 某 手啓ス 某月某日

〔譯文〕

某 某 兄

先日は御宅に參上親しく相語るを得此の上なく愉快に感じ候。昨日學校からの通告に接せしに、本月十六日授業開始なれば、各學生は一日前に學校に到着致すべしとの趣に有之候。貴君の處に於かれても已に落掌せしことと存じ居り候。小生十五日旅装を整へ出發致す所存に有之候へど、貴君何日に御出發に相成るや不明にて候。若し御差支へなくば當日拙宅にお出で下され同道の榮を賜れば道中の寂寞も免れ幸甚の極みと存じ候。

先づは右御誘致し、序ながら春季の御安泰をお祈り申し上げ候。

第九課 約作伴赴校

弟 某某 某月某日

〔白話文〕

某某大兄：

前幾天到你府上來，和你談天，快活得很。昨天接到本校的通告，說在本月十六日要開課了，學生必須在前一天到校，想你也已經接到這種通告。我想在十五日動身到校，不曉得你在那一天起程？你若是不拋棄我，請你在十五日到我家裏來，順便可以同伴回校，路上也不致寂寞了，這是最邀幸的事體！

某 某 某月某日

談天—四方山の話をする。

必須—必ず…せねばならぬ。

起程—出發する。

第十課 託帶信

某某仁兄大鑒。昨謁

台階。適

公出未晤。不勝惆悵。近聞

大駕有滬上之行。未知行期定於何日。送上致某君一函。因其舊時寓址。

倘若—若しも。

不致寂寞—さびしくならぬ。

順便—ついでに。

業已遷移。一時無從投遞。茲乘我
兄吉便。務祈代爲探詢。並希
飭送該處爲感。弟明日擬往某處。在
足下起程之前。恐不及趨領
教益。容俟
錦旋後。再當奉謁道謝。專懇。卽頌
行安。

弟某某謹啓 某月某日

〔註釋〕

帶信—手紙をとどける。

仁兄—同輩の友人に對する敬稱

台階—御宅。

適—たまたま、相憎にも。

公出—用事で外出す。

不勝惆悵—惆悵に勝えず。「惆」は「失望する」、「悵」

は「残念に思ふ」。

近聞—近頃まじく。

大編—貴下の駕、あなた。

滬上—上海。

行期—出發の期日。

送上—お届けする。

致某君一函—某君に出す一書狀。

寓址—住所、家の在所。

業已—己に。

無從—……するによしなし。

投遞—郵便に出す。

吉便―御ついで。

務祈―何卒…を祈る。

代爲探詢―代つて探りたづねる。

飭送―送る様命ずる、届けさせる。

爲感―感謝する。「祈…爲感」と続きます。

足ト―貴方、貴君。

恐不及―恐らくは…間に合はぬ、

趣領教益―趣いて教益に預る、参上し御目にかゝる。

〔翻譯〕

信ヲ帯スルヲ託ス

某某仁兄大鑒、昨台階ニ謁セルニ、適と公出セラレ、未ダ晤ヘズ、惆悵ニ勝テズ。近ゴロ聞ク、大駕滬上ノ行有リト。未ダ行期何日ニ定メタルヤヲ知ラザルモ、某君ニ致スノ一函ヲ送上ス。其ノ舊時ノ寓址ハ、業已ニ遷移シ、一時投遞スルニ從ナシ、玆ニ我兄ノ吉便ニ乗ジ、務メテ、代リニ探詢ナサレントヲ祈リ、並ニ該處ニ飭送セラレンコトヲ希ム。感トナス。弟、明日某處ニ往カントヲ擬ス、足下起程スルノ前ニ於イテハ、恐ラクハ趣キテ教益ヲ領スニ及バザラン。容ニ錦旋セル後ヲ俟チテ、再ニ當ニ奉謁謝ヲ道フベシ。専ラ懇ズ、即チ行安ヲ頌ス。

容…さまに…すべし。

俟…後再當…の後を俟ち再…すべし、…したらその

上で…する。

錦旋―御歸り、御歸還。

奉謁道謝―お目にかゝり御禮を言ふ。

專懇―専ら懇ず、専らお頼みます、先づは御頼みまで。

行安―御旅行の御安泰。

弟 某某 謹ミテ啓ス 某月某日

〔釋文〕

某 某 兄

昨日參上致せしところ、適と御用事にて外出なされ、御面會叶はず眞に残念なる次第に御座候、近時貴君上海に赴かれるとの由耳に致し、御出發の期は何日なりや不明に候へど茲に某君に致す一書信をお届致し置き候。某君の以前の住宅は已に遷り、一時郵送に託すすべなき次第に有之候ところ、茲に貴君の御序に乘じ、何卒代りて御調べ下され某君の所に御届けの勞をおとり下されば幸ひと御願申上げる次第に御座候。小生は明日某所に赴く豫定にて、貴下御出發前には恐らくは拜趨御面談間に合はざること、存じ、貴君御歸還の上直ちにお目にかゝり御禮申し上げる心組にて候。先づは右御依頼まで如斯御座候。尙ほ末尾乍ら旅行の御平安を御祈り申し上げ候

弟 某 某 謹啓 某月某日

〔白話文〕

某某兄：

昨天到你府上來，剛巧你有公事出去，不能會面，懊惱得很。近來聽說你要到上海去，不知道你那一天動身？送上寄給某君的信一封；因爲他的舊時住址，已經遷移，一時無法投遞。現在趁你便，請你打聽打聽，並且託你叫人送他那裏去，感激得很。我明天要到某某地方去，在你動身之前，恐怕來不及領教了，等你回來時，再過來面謝罷！

某 某 某月某日

剛巧一問が悪く。

公事一お仕事、御用事。

懊惱一残念がる。
來不及一間に合はぬ。

第十一課 報告棉價

某某先生大鑒。敝處棉花業已上市。各處商號均已陸續來定。計最上子花現批每包拾元。寶號如欲購辦。應請從速。遲恐加價。不合銷售也。崑此佈達。順頌財安。

弟某某鞠躬 某月某日

〔註釋〕

報告棉價一棉價を通知する。

敝處一當地。「敝國」一私の國。「敝號」一敝店。「敝

眷」一私の家族。

業已一すでに。「業」も「已」も「すでに」の意です。

上市一市に上る、市場に出る、出廻る。

商號一商店。此には「屋號」の意味も有ります。

均一皆、均しく。

陸續一陸續として、續いて。

定一注文する。「定貨」の意です。

計一合計。此詞は數量的な句を導くとき、其冒頭に置か

れるもので、「合計」と言ふ様な意味より、寧ろ「即

ち」と言ふ位の意です。

子花一袋棉。

現批―現金での卸賣。「批發」―卸賣りする。

寶號―貴店。「寶號」は「敝號」の對詞です。

如―若しも。

購辦―買入れる、購入する。「定購」―注文する。「辦

貨」―品物を買入れる。

應請―當然…を請ふ、…して戴かねばならぬ。

從速―速きに從ふ、早目に。「從重」―重く、嚴しく。

「從緩」―ゆつくりと。

〔訓讀〕

某某先生大鑒。敝處へ棉花業^{スアニ}已市ニ上り、各處ノ商號へ均シク已ニ陸續トシテ來リ定ム、計ルニ最上ノ子花へ、現批每包拾元ナリ。寶號如シ購辦セント欲セバ、應^{オカ}ニ速ニ從ヘレンコトヲ請フベシ。遅レバ、價ヲ加へ、銷售ニ合セザランヲ恐ル。尚^{モツバ}ラ此ニ佈達シ、順^{フヒテ}ニ財安ヲ頌ス。

弟 某某鞠躬 某月某日

〔譯文〕

某 某 様

當地は棉花已に出廻り、各地の商店は皆已に續々と注文致し居り候。最上實棉は現金卸賣にて一包十圓に御座候、貴店もし御仕入れ致す所望有之候へば、何卒早目に御願申上候。遅れば、或は市價昂騰致

加價―價が加はる。値が上る。

不合…に合せず、…に工合が悪い。

銷售―賣捌く。「銷路」―販路。「售罄」―賣切れる。

尚此…^{モツバ}ラ此ニ…、先づは右…まで。

佈達―陳べ告げる、知らせる。

順―序に。自話の「順便」に同じ。

財安―商業上の御安泰。

し御寶物に不便で相成るかとも存じ候。先づは右御通知致し序いで乍ら御商賣繁昌を御祝申上候。

某月某日

某 某

〔白話文〕

某某先生：

敝處棉花、已經上市：各處商店已經都來採辦。最好的子花、現價每包拾元、你處倘要添辦、應該趕快；否則怕要漲價、那就不合算了

某 某 某月某日

採辦—仕入れる。

漲價—値が上る。

趕快—急いで。

那就—さうなれば、。

否則—然らざれば、さうでなければ。

合算—引合ふ、採算がとれる。

第十二課 索 貨 様

某某先生臺鑒。頃閱報章。得悉

寶號新出某項貨物多種。據云貨樣既精。批價又廉。但不知究竟若何。請即將各種貨樣寄下一閱。以便採辦。尚此奉懇。並頌

財安。

弟某某謹啓 某月某日

〔註釋〕

索—求める、要求する、請求する。

貨樣—商品見本。「様子」「様本」も同じです。

臺鑿—御高覽、邦語の「様」^{サマ}。御中に相當するものと見

て良いでせう。

頃—只今、先頃。

報章—新聞。「報紙」「報」としても同じです。

悉—知る、判る。「敬悉一切」とすれば「委細承知仕り

候」と言ふことになります。

賣號—賣店、相手の店の尊稱。「敝號」は「弊店」の意。

某項—某種。

據云—言ふ所によると、…; ださうだ。

〔訓讀〕

貨樣ヲ索ム

某某先生臺鑿、頃、報章ヲ閱シ、賣號へ新シク某項ノ貨物多種ヲ出セルヲ悉ルヲ得タリ。云フニ據ルニ、貨質既ニ精ニシテ、批價又廉ナリト。但シ究竟、若何ナルヲ知ラズ。請フ、即チニ各種ノ貨樣ヲ寄

批價—卸値。

究竟—一體。

若何—どの様、如何に。「如何」と同じ。

將—…; を。白話の「把」に當ります。

即—すぐに、直ちに。

寄下—送つてよこす。「寄上」とすると「送つてやる」即

ち「御送りする」になります。

以便—以て…; に便にす、…; に都合よい様にする。

端此—先づは右…; まで。

奉懇—御願する、御願みする。

財安—商賣上の御安泰。

下一閱サレ、以ツテ採辦ニ便サレンコトヲ、當ラ此ニ奉懇シ。並ニ財安ヲ願ス。

弟 某 某 謹啓 某月某日

〔譯文〕

見本を求む

草 某 様

只今新聞により、貴店に於ては某品多種を新しく出だせる趣承知仕り候。品質精美、卸値廉價の由に候へ共、結局の所如何様たるは不明に候へば、何卒各種の見本を至急御送り下され註文の便宜を御計り下されたく候。先づは右不敢取御願申上げ、末筆乍ら御商賣上の御安泰を御祝申上候。

某 某月某日

〔白話文〕

某某先生：

今天看某某日報，知道寶號新出貨物多種。據說：品質既已精美，批發的價錢又是便宜。但不知到底是怎樣的好法？請把各種貨樣寄來，我看他了以後，再來採辦。

某 某月某日

批發—即賣する。

便宜—廉價なる。

到底—一體、結局。

第十三課 託代購某銀行股票

某某先生惠鑒。昨閱申報。知某某銀行。今年擴充營業。有添股之舉。該行信用素著。其股票大可買得。現擬煩閣下代購五股。需銀若干。乞先詳示。當即滙奉。專此奉託。即候
臺安

弟某某上言 某月某日

〔註釋〕

添股—株を増す、増資する。

股票—株、株券。

擬—……せんとする。

〔訓讀〕

某銀行ノ股票ヲ代購サレンコトヲ託ス

某某先生惠鑒。昨申報ヲ閱シ、某某銀行ハ營業ヲ擴充シ、股ヲ添ヘルノ舉有ルヲ知ル。該行ノ信用素ヨリ著ハル、其股票ハ大ニ買ヒ得ベシ。現、閣下ニ代リテ五股ヲ購フヲ煩ラハサント擬ス、銀若干ヲ需

スルヤ、乞フ先ズ詳示セラレンコトヲ。當ニ即ニ滙奉スベシ。專ラ此ニ奉託シ、即チ臺安ヲ候ズ。

弟 某某上言 某月某日

〔釋文〕

某 某様

昨日申報にて、某某銀行は營業を擴張し増資を致す趣承知仕り候。該行の信用は素より厚く、其株は買ふも全く心配なき事と存じ、茲に貴下を煩らはして五株買求めたく存じ候。要すべき金額幾許なりや一先づ詳細に御知らせを願ひ、直ちに爲替にて御送り致す心組にて候。先づは右御願まで如斯御座候。

月 日

某 某 上言

〔白話文〕

某某先生

昨天我看申報，知道某某銀行，今年推廣營業，將要添招股本，該行信用素來很好，他的股本大可買得。現在我想託你代買五股，應付多少銀錢，請你先來信告明，我就滙上的。

某 某 某月某日

招股一株を募集する。「認股」は「株に加入す」の意下

應付一支拂ふ。

す。

滙上一爲替で御送りする。

第十四課 消遣

現時交際社會上有幾句最通行的談話：彼此見面，多半問道，「近來作何消遣？」那答話的多半談道，「無聊得很！不過隨便做做某樣某樣的頑意兒混日子罷了。」這幾句話頭，外面看來，像沒有甚麼大罪惡。那裏知道這便是亡國滅種的根原！這種流行病，一個人染著，這個人便算完了；全國人染著，這國家便算完了。

天下最可寶貴的物件，無過於時間。因為別的物件，總可以失而復得；惟有時間，過了一秒，即失去一秒；過了一分，即失去一分；過了一刻，即失去一刻；失去之後，是永遠不能恢復的；任憑你有多大權力，也不能堵著他不叫他過去；任憑你有多大金錢，也不能買他轉來；所以古人講的惜寸陰惜分陰，這並不是說來好聽，他實在覺得天下可愛之物，沒有能穀比上這件的，所以拚命的一絲一毫不肯輕輕放過。近來世界上發明許多科學。論他的作用，不過替人類節省時間的耗費，增大時間的效力。從前兩三點鐘纔能辦結的事，現在一點半點便可辦結；因此尙可以將賸下的時

間、騰出來拿去又幹別的事業。所以現在的人，一日抵得過古人兩三日的用處；一年抵得過古人兩三年的用處；所以一世人能做古人兩三世的事業。現世文明進步，一日千里，這便是一個最大關鍵。我國因爲科學不發達，沒有種種節省時間的器具，就令我們比人家加一倍勤勞，也只好作一世入當得人家半世便了。卻是人家一日當得兩三日用的還嫌不彀，兢兢業業的一分一秒不敢糟蹋。我們兩三日只當得一日用的，倒反覺得把他無可奈何，單只想個方法來消了他遣了他。咳！那裏想到天地間一種無價至寶，一落到我中國人手裏，便一錢不值到這壓田地，咳！可痛！可憐！

(梁啓超)

【註釋】

消遣——時間をつぶす、鬱晴しをする。

談道——言ふ。

無聊得很——無聊で堪らない。

不過——罷了、……にすぎない。

玩意兒——こと、無意味なこと。

混日子——日を送る、良い加減に日を送らず、

話頭——話、言葉。

外面看來——表面から見ると。

那裏知道——豈料らんや、突ぞ知らん。

滅種——種族を滅ぼす。

寶貴的——貴い。

無過於……にすぎるなし、……以上のものはない。

失而復得——失つても又得る。

惟有―ただ…だけは。

任憑―假令でも…。「也」につゞきます。

堵着他不…：それを堵いで過ぎ去らせない。

買他轉來―其を買つて戻す、其を買ひ戻す。

惜寸陰惜分陰―寸陰を惜しみ分陰を惜しむ、僅かな時間

を惜しむ。

並不是…：決して…でない。

說來好聽―言つて耳觸が良い。

比上―比べる。

拚命的―一生懸命に。

一絲一毫―少しも、絲毫も。

耗費―費す、無駄にする。

辦結―なし終る。

因此―此がために、故に。

〔譯文〕

暇 つぶし

將……を。

剩下的―残つた、残した、剩した。

騰出來―工面し出す、融通し出す。

抵得過―相當し得る、匹敵し得る。

就令…：假令…でも。「也」につゞきます。

作一世人…：一世代の人は他人の半世代に相當し得るだけである。

只好…：便了―僅かに…し得るのみ。

兢兢業業―勤め倦まざる様。

糟塌―無駄にする。

單只想…：ただ…を考へる。

一錢不值到…：一錢にも値せぬのが…にまでなる、…の

程度まで一錢一文の價値もなくなる。

現時交際社會上に幾句かの最も通用してゐる談話があつて、お互が顔を合はせると、大多數は「近頃

何をして暇つぶしをしてゐますか」と尋ねる。その答は大半は「無聊で堪らなから、たゞいゝ加減に某種某種のつまらぬ事をして日を送つてゐるだけです」と言ふ。このいくつかの言の中には、表面から見れば、何も大きな罪悪はない。所がこれは國家を亡し種族を滅するの根原なのである。この種の流行病に、一人が染まつて了ふと、この人はお終ひであり、全國の人が染まつて了ふと、この國もお終ひと言ふものだ。

天下で最も貴いものは、時間。過ぎるものはない。何故ならば、別のものは失つても復た得られるが、たゞ時間だけは、一秒過ぎれば一秒を失ひ、一分すぎれば、一分を失ひ、一刻(十五分)すぎれば、一刻を失ひ、失つた後は、永久に取り戻せぬからである。假令君にどんなに多くの權力があつても、其を堵いでゐて過ぎ去らぬ様には出来ぬし、假令君に如何に澤山な金が有つても、其を買ひ戻すことは出来ぬ。故に、古人は「寸陰を惜しみ分陰を惜しむ」と言つてゐる、これは決して言つて趣のあるためのもではなく、實際に彼は天下の惜しむべきものはこのものに比すべきものなしと思ひ、其故に一生懸命に些かなりとも易々とすこすのを肯んじなかつたのである。近來世界上に多くの科學が發明せられたるが、其の作用はと言ふと、人類のために時間の消費を節約し、時間の效力を増大してくれるにすぎない。以前は二三時間でやつとなし終つた事は、今は一時間半時間でなし終るのである。故に尙ほ剩つた時間を融通し、又別な仕事をする事が出来るのである。一年は古人の二三年の用に相當する故に、一世代の人は古人の二三世代の仕事をする事が出来るのである。現代は文明の進歩は一日千里の勢であ

るが、これが即ち一つの最も大きな鍵なのである。我國は科學が發達せず、時間を節約する種々なる器具がないために、假令我々が他人（外國の人）よりも一倍多く勤勞しても、二世代の人は他國の人の半世にしか相當することが出來ぬのである。所が他人は一日を二三日になし得て使用するも、尙ほ足らざるを嫌つて、精を出して一分一秒も敢へて無駄にせぬのである。我々は二三日を一日として使用してゐるにも拘らず、其を如何ともなし得ず、何とかして其を消し其をつぶさんとしてゐることばかり考へてゐるのである。あゝ、全く料らざることである、天地間の價の分からぬ位の一種の至寶が、一度、我々中國人の掌中に落ちるや、斯の如く一錢にも値せぬ様になるとは。あゝ痛ましい哉、憐れなる哉。

第十五課 最苦

人生什麼事最苦呢？貧嗎？不是。病嗎？不是。失意嗎？不是。老嗎？死嗎？都不是。我說人生最苦的事，莫苦於身上負着一種未來的責任。人若能知足，雖貧不苦；若能安分，雖失意不苦；老病死乃人生難免的事。達觀的人看得很平常，也不算什麼苦。凡是人生世間，一天有一天該做的事。該做的事沒有做完，就像是有幾千斤重擔子壓在肩頭，那才是最苦的了。爲什麼呢？因爲受那良心的責備，要逃避也沒處逃避。

許了人辦一件事沒有辦完，欠了人的錢沒有還，受人的恩惠沒有報答，得罪了人沒有賠禮，就連這些人的面也幾幾乎不敢見；縱然不見面，睡裏夢裏都像有他們的影子來纏着。爲什麼呢？因爲覺得對不住他們哪。因爲自己對於他們的責任，還沒有解除啊。不獨是對於一個人如此，就是對於家庭，對於社會，對於國家，乃至對於自己，都是如此。凡屬我受過他好處的人，我對於他就有了責任；凡屬我應該做的事，而且力量能够做到的，我對於這件事就有了責任；凡屬我自己打主意要做一件事，就是現在的自己和將來的自己，立了一種契約，就是自己對於自己加了一層責任。有了這責任，那良心就時時刻刻在後面監督。一天應盡的責任沒有盡，到夜裏就感着苦痛。一生應盡的責任沒有盡，就死了也是帶着苦痛往墳墓裏去。這種苦痛，卻比不得普通的病老死，可以達觀排解得來。所以我說人生沒有苦痛便罷；若有苦痛，當然沒有比這個再重的了。

〔註釋〕

莫苦於……より苦しきはなし。「於」は比較を表はし

「……より」の意です。

雖貧不苦—貧乏でも苦しくない。

乃—乃ち—である。

看得很平常—極めて普通のものともみる。

人生世間—人がこの世に生れ。「世間」は「この世」を

言ひます。

擔子—荷物。

那才……それでこそ始めて……である。

要逃避也……逃避せんとして……。

沒處逃避ト逃避する處がない。

許了—承諾した。「應許了……」の意味です。

不獨……就……ひとり……のみならず……。

欠了人的錢—人の錢を借りる。

賠禮—謝罪する。

〔註釋〕

最も苦しいこと

人生は何が最も苦しいか、貧乏か？さうでない、病氣か？さうでない、失意か？さうでない、老いることであらうか？死であらうか？皆さうでない。私は、人生の最も苦しいことの中で、身に一種の未達の責任を負ふてゐることより苦しいこととは思ふ。人は若し足るを知ることが出来れば貧乏でも苦しくないし、若しも分に安んじ得るならば、失意なりと雖も苦しくなく、老・病・死は人生に於いて免れ得ないことで、達觀してゐる人は極めて平常のものと思、何も苦しみには入れないのである。凡そ人が此の世に生れれば、一日には其日になすべき事がある筈である。なすべき事をなし終らざれば、幾千斤かの荷が肩を壓して居る如く、それが最も苦しいのである。何故であらうか？かの良心の責め苦

幾幾乎—殆んど。

縱然—假令……でも。

纏着—まとひついてゐる。

乃至……更……にも。

凡屬—凡そ。

就死了也……—假令死んでも……。

比不得—比較出来ぬ、比較にならない。

便罷—それまで……ある。

を受け、逃避せんとして逃避する處がないからである。

人に或ることをすると承諾して、なして終らず、人の錢を借りて返へさず、人の恩恵を受けて報答せず、人に罪を得て謝罪しなかつたら、此等の人々の顔すらも殆んど敢へて見ようとせず、假令顔を會はせなくても、寝てゐる中、夢の中皆彼の影が來てまといつゝいてゐる様である。何故であらうか？それは彼等に對しすまぬと感じて居るからである。自分が彼に對する責任をまだ解除して居らぬからである。ただ一人の人に對して斯くの如きのみならず、家庭に對しても、社會に對しても、國家に對しても、さては自分に對しても指斯くの如くである。凡そ自分がその恩恵を受けた人は、自分は其人に對して責任をもつに至る。凡そ自分の爲すべき事にして、且つ力がなし能ふるものならば、自分はこの事に對して責任が出て來る。凡そ自分で或ることをなさんと考をきめれば、現在の自分と將來の自分に一種の契約をしたものであり、即ち自分は自分に對して一つの責任を加へたものである。

この責任をもつと、かの良心は、時々刻々後に在つて監督する。一日に盡すべき責任を盡さないと、夜になつても苦痛を感じてゐる。一生の間に盡すべき責任を盡さないと、假令死んでも苦痛をもつて墓の中に行くことになる。この種の苦痛は、普通の貧・病・老・死が達觀で解除出来るのと比較にならぬのである。故に私は人生に苦痛なければそれまでのことであるが、若し苦痛があるならば當然此れより更にひどいものはないと思ふのである。

第十六課 天資和努力

你在學校裏，同級的同學想來有好多位；他們的程度比你好呢？還是比你差？你在全級裏，是優等生、中等生還是劣等生？

我想，全級同學的程度，一定不會齊的。最好的和最差的比較地少，最多的是中等生；是不是？

程度最好的同學，稱做優等生，常常被老師稱許，被其餘同學羨慕；一般中等生，成績可以說得過去，雖不常常被稱許，羨慕，但也不感覺什麼困難；最感覺痛苦的是那些程度不好的同學，他們被稱做劣等生，大部分的功課，都比較別人懂得慢；而且常常發生錯誤。

照通常的說法，程度好的同學，有的是天資好，有的是天資不好而肯努力，有的是天資好而又肯努力，至於那些程度不好的同學，有的是天資不好，有的是天資好而不肯努力，有的是天資不好而又不努力。

倘若我問各位願意做哪一種人，我想各位會不約而同地希望做一個天資好而又努力的學生。

各人的天資是不同的，天資最好的稱爲天才，天資最差的稱爲低能。天才和低能是同樣地不常見的，比較最多的是中材。

古今中外的大科學家大文學家大政治家有不少是絕頂的天才；像牛頓在二十多歲的時候，就對算學上有大發明。我國也有不少神童，在幾歲的時候，就會做詩寫文章。不過，我們有一點必須認識，就是所有的大科學家大文學家大政治家，並不一定個個都是絕頂的天才。在另一方面說，有許多天才，卻未必能成爲大科學家大文學家大政治家。

人們要有些成就，除掉靠天資以外，還要自己努力。

如果我們讀名人傳記，就可知道他們都是很努力的；像愛迪生小的時候，被老師認爲沒有什麼希望的孩子，可是愛迪生能夠努力研究，有時候每天只睡四小時，到後來，居然做了「發明大王」。再就牛頓說吧，他固然是個天才，不過他的努力確是過人；他在研究的時候，竟會把錶常做雞蛋放到鍋子裏去煮，你想他是多麼專心！所以我們即使天資好，倘若不肯努力，也不會有成就；倘若肯努力，即使天資差些，也是有些希望的。

沒有方法改造的，我們只有任他去；有方法補救的，我們終須努力。

如果自己程度不好，一味歸咎於天資的不好，而不肯努力，那是決沒有希望的。

〔註釋〕

想來——想ふに。

比你差——君より劣る。

不會齊——そろつてゐる筈がない。

稱做——……よびなす、……と稱す。

稱許——はめる。

其餘——外的、其他の。

說得過去——言つてすまし得る、まあまあと言ふところ。

雖——但……と雖も然し。

覺得慢——理解がおそい。

照通常的說法——普通の言ひ方によるに、普通言はれると

ころでは。

有的——有的……ある者は……ある者は……

至於——……に至つては。

倘若——もしも。

不約而同——期せずして一緒に。

稱爲——……なりと稱す。

中材——普通の人。

不過——だが、ところが。

名人——有名な人、名士。

必須認清——はつきり認識せねばならぬ。

所有的——一切の、すべての

並不一定——……決して必ずしも……でない。

在另一方面說——別な一面から言ふと。

未必——必ずしも……ならず。

除掉——除外——……を除いて以外は。

如果——もしも。

愛迪生——エヂソン。

居然——意外にも。

就——說吧——……に就いて言ひませう。

超人一人にすぎず、人以上である。

竟曾……竟に……の様なこともある。

把録富做雞蛋一時計を卵と思ふ。

即使……也……假令……でも。

只有……ただ……あるのみ。

〔譯文〕

天資と努力

あなたは學校で、同級の學生が非常に多いこと、思ひます。彼等の程度は君よりも良いですか、それとも君よりも劣つてゐますか。君は全級中で優等生ですか、中等生ですか、それとも劣等生ですか。

私は全級の學生たちの程度はきつと揃つてゐるやうなことはなく、最も良いものと、最も劣つてゐる者は比較的少く、最も多いのは中等の學生であると思ひます。さうでせう。

程度の最も良い同級生を優等生と稱し、常に先生にほめられ、他の同級生たちに羨まれます。一般の中等の學生は、成績はまあまあと言ふところで、常にほめられたり、羨まれたりはしないが、何の困難も感じないのです。最も苦痛を感じるのは、かの程度の悪い同級生で、彼等は劣等生と稱せられ、大部分の學業は他人よりも分りがおそく、而かも常に誤をしてゐます。

普通の言ひ方では、程度の良い同級生は、あるものは天分優れ、或るものは天分優れなくも努力し、あるものは天分優れたる上に努力するのですが、かの程度の良くない同級生は、或るものは天分が劣つ

任他去……それにまかせぬ。

終須……どうしても……せねばならぬ。

一味……遂に。

歸答於天……天分の劣れるに答を歸す。

てゐ、あるものは天分優れても、努力しようと思せず、あるものは天分優れざる上に努力しないのであります。若しも私が皆さんにどの種の人になるを願ふかと問ふならば、皆さんは期せずして同じく天分優れながらも努力する學生になるを希望すると思ひます。

各人の天分は同じものではありません。天分の最も良いのを天才と稱し、天分の最も悪いのを低能と稱します。天才と低能は同様に常見されるものではありません。最も多いのは中等のものです。

古今中外の大科學者・大文學者・大政治家には絶頂の天才が少くありません。ニュートンの如きは二十餘歳で數學上に大發明がありました。我國にも少なからざる神童が居て、數歳の時にもう詩を作つたり、文章が書けたりしました。だが我々ははつきり認めなければならぬ一點があります。それはすなはち、一切の大科學者・大文學者・大政治家は、決して必ず皆が皆絶頂の天才であると言ふ理ではないことです。他の一面から言ふならば、多くの天才が居ても、それは必ずしも大科學者・大文學者・大政治家になることが出来るとは限りません。

人々が若し成し遂げる所あらんとするならば、天分に頼る外、尙ほ自分で努力せねばなりません。

若し私たちが有名な人の傳記を讀むならば、彼等は皆非常に努力した人であることが分かります。エヂソンの幼い時には、先生からは何の希望もない小供と認められました。更にニュートンに就くことが出来、時には毎日四時間しかねず、後には終に「發明王」になりました。更にニュートンに就いて言ふならば、ニュートンは固より天才であります。彼の努力は確に人以上でした。彼は研究してゐた時は、終に時計を卵と思つて鍋の中に入れて煮る様なことさへありました。彼は何と専心したこと

でせうか。故に我々は假令天分が優れてゐても、若し努力する氣にならないならば、成就する所はなく、若し努力する氣になれば、假令天分が少し位劣つてゐても、些かの希望があります。

改造する方法がないものは、私たちは其のまゝに委せるだけです。補救する方法があるものは、私たちは矢張り努力すべきです。若しも自分の程度が良くないことを、一途に天分の劣れるに歸し、努力しようとしなければ、それは全く望がないものであります。

第十七課 新生活

胡

適

(一)

那樣的生活可以叫做新生活呢？

我想來想去，只有一句話。新生活就是有意思的生活。

你聽了，必定要問我：有意思的生活又是甚麼樣子的生活呢？

我且先說一兩件實在的事情做個樣子，你就明白我的意思了。前天你沒有事做，閑的不耐煩了，你跑到街上一個小酒店裏，打了四兩白干，喝完了，又要四兩，再添上四兩。喝的大醉了，同張大哥吵了一回嘴，幾乎打

起架來。後來李四哥來把你拉開，你氣忿忿的又要了四兩白干，喝的人事不知，幸虧李四哥把你扶回去睡。昨兒早上，你酒醒了，大嫂子把前天的事告訴你，你懊悔的很，自己埋怨自己：「昨兒爲甚麼要喝那麼多酒呢？可不是糊塗嗎？」

〔註釋〕

胡適——一八九〇年、安徽省に生る。字を適之と言ひ、白

話、挽唱の第一人者にして、「白話文學史」、「胡適

文存」、「中國哲學史大綱」、「嘗試集」等の著書あり、

ハーバード大學の哲學博士なり。

新生活——新しい生活。蔣委員長によつて提唱せられた

る、新生活運動の意ではありません。

想來想去——あれこれ考へる。「來」「去」の連用は動作

の反覆を表はします。

必定——きつと、必ずや。「一定」と同じです。

且先——先づ、取り敢へず。

實在的事情——實際のこと。

做個樣子——見本にする。

閑得不耐煩——煩はしき耐へられぬほどひまなる、ひま
でたまらない。

白干——燒酒に似た酒。「白乾」とも書きます。

喝的大醉——のどで大いに酔ふ。

張大哥——人名ですが、張家の一番上の男の子を言ふとき

にかく稱します。

吵了——回嘴——一度口喧嘩をする。

拉開——ひきはなす、仲裁しはなす。

氣忿忿的——怒つてブンブンして。「氣憤憤的」とも書き

ます。

幸福——幸なことには。「幸而」「好在」に同じ。

大嫂子——奥さん。つまり年長の他人の妻をかく呼びます。

埋怨——怨む。

可不是——まあ……ではないか。

【譯文】

新生活

どんな生活を新生活と言ふことが出来るか。

私はあれこれ考へて見るに、たゞ一言だけある。それは新生活は即ち有意義な生活であると言ふことである。

君はきいたら、必ず私に問ふであらう。有意義な生活とは更に如何なる生活であるかと。

私は取り敢へず一二の實際的な事を話し、見本としよう。さうすれば、君は私の意義が分かるだらう。一昨日、君はする仕事がなく、閑でやりきれず、街の小さな居酒屋に走つて行つて、四兩の焼酒を買ひ、飲み終り、又四兩貰ひ、更に四兩増しすつかり酔ふて了ひ、張大哥と口喧嘩をし、ほとんど打合をするまでになつた。後に李四哥が來て、君をひきはなしたので君はブンブンして、又四兩の焼酒を買つて、人事不省になるまで飲んで了つた。幸なことに李四哥が君を扶けて歸へりねせてくれた。昨日の朝、君は酒がさめてから、奥さんが、一昨日のことを君につげると、君は非常に後悔して、自分で自分を「昨日は何故あんなに多くの酒を飲んだらう。全く馬鹿であつた」と恨んだ。

(二)

你趕上張大哥家去，作了許多揖，賠了許多不是，自己怪自己糊塗，請

張大哥大量包涵。正說時，李四哥也來了，王三哥也來了。他們三缺一，要你陪他們打牌。你坐下來，打了十二圈牌，輸了一百多吊錢，你回得家來，大嫂子怪你不該賭博，你又懊悔的很，自己怪自己道；「是啊，爲甚麼要陪他們打牌呢？可不是糊塗嗎？」

諸位，像這樣子的生活，叫做糊塗生活，糊塗生活便是沒有意思的生活，你做完了這種生活，回頭一想，「我爲甚麼要這樣幹呢？」你自己也回不出究竟爲甚麼。

諸位，凡是自己說不出「爲甚麼這樣做」的事都是沒有意思的生活。反過來說，凡是自己說得出「爲甚麼這樣做」的事都可以說是有意思的生活。

生活的「爲甚麼」就是生活的意思。
人同畜生的分別，就在這個「爲甚麼」上。

〔註釋〕

趕上：去—急いで—へ行く。この場合の「上」は介詞なる。

に注意を要します。

作揖—揖禮をする。「揖」とは「拱手の禮」です。

賠了不是—悪いところを謝罪す。

大量包涵—氣持を大きくして勘辨する。

他們三缺一―彼等は三人で一人足りない。

打了三牌―十二回の牌を打つ、十二回勝負をする。

吊錢―昔の錢で、銅貨十枚を一吊と言ひます。

尙得家來―家に歸へつて来る。得は「的」とするもよく、

「了」と同じと見て差支へありません。この場合は可能を表はしてゐるではありません。

回頭―想―顧みて思ふ。「回頭」は「頭」を重念にして「後を向く」「顧みる」の意になります。

〔譯文〕

君は急いで張大哥の家に行き、何回も拱手の禮をし、幾つもの自分の落度を詫び、自ら自分の馬鹿なるを咎め、張大哥に何卒大目に見て勘辨してくれと頼む。丁度語をしてゐる時、李四哥も來、王三哥もやつて來た、彼等は三人で一人足りぬので、君に彼等と麻雀をする様に要求した。君は坐りこんで、十二回勝負をして、一百吊錢餘りまけて了つた。君は家に歸へると、奥さんは君が賭博をすべきでないと言め、君は又非常に後悔して、自ら自分を咎めて、「さうだつた。何故彼等と麻雀をやらねばならなかつたのか。全く馬鹿であつたわい」と思ふ。

諸君、この様な生活を、馬鹿生活と稱し、馬鹿生活は意義のない生活なのであります。君はこの様な生活をなし終つて、顧みて「私は何故にこの様にせねばならなかつたか」を考へても、君自身でも一體

問不出―答へ出せない。「問答不出」と同じです。
究竟―一體、つまり。

說不出―言ひ出せない。

反過來說―逆に言ふ。「反過來」は「翻過來」とも書き「ひっくりかへす」「逆にする」の意です。

分別―差異、區別。「分別」は動詞のときは「分かれる」副詞のときは「夫々」の意をもちます。

「何故かを答へることは出来ない。」

諸君、凡そ自分で「何故にこの様になしたか」を言ひ出せぬとは、皆意義のない生活なのである。

逆に言ふならば、凡そ自身で「何故にかくなしたか」を言ひ得ることは、皆有意義なる生活と言ひ得るのである。

生活の「何故に」は即ち生活の意義である。

人と畜生の差異は即ちこの「何故に」の上を存するのである。

(三)

你到萬牲園裏去看那白熊一天到晚擺來擺去不肯歇，那就是沒有意思的生活。我們做了人，應該不要學那些畜生的生活。畜生的生活只是糊塗，只是胡混，只是不曉得自己爲甚麼如此做。一個人做的事應該件件事回答得出一個爲甚麼。」

我爲甚麼要幹這個？回答得出，方才可算是一個人的生活。

我們希望中國人都能做這種有意思的新生活。其實這種新生活並不十分難，只消時時刻刻問自己爲甚麼這樣做，爲甚麼不那樣做，就可以漸漸的做到我們所說的新生活了。

諸位，千萬不要說「爲甚麼」這三個字是很容易的小事。你打今天起，每做一件事，便問爲甚麼——爲甚麼不把辮子剪了？爲甚麼不把大姑娘的小脚放了？爲甚麼大嫂子臉上搽那麼多的脂粉？爲甚麼出棺材要用那麼多叫化子？爲甚麼娶媳婦也要用那麼多叫化子？爲甚麼罵人要罵他的爹媽？爲甚麼這個？爲甚麼那個？——你試辦一兩天，你就會覺得這三個字的趣味真是無窮無盡，這三個字的功用也無窮無盡。

諸位，我們恭恭敬敬的請你們來試試這種新生活。

〔註釋〕

萬牲園—動物園。

一天到晚—一日中。

擺來擺去—あつちへ振りこつちへ振りする、あつちこつち身體を振り動かす。

胡混—やたらにすごす、良い加減にすごす。「混」は「過」

の意ですが眞面目ならざる場合に「混」を使用します。

方才—はじめて。「方」も「才」も「はじめて」の意であります。

並不十分雖—決してそんなに困難なものではない。

只消—ただ…さへすれば。「消」は「要」とするも同じです。

千萬不要—一萬々…する勿れ、決して…してはいけない。

大姑娘—年頃の娘。「大娘子」に同じです。

小脚—纏足せる足。

放了—纏足をといた。

出棺材—棺桶を出す、葬式をする。

叫化子—乞食。「花子」「化子」「討飯的」など皆同じく

使用されます。

娶媳婦—妻を娶る。

爹媽—父母。

〔譯文〕

君は動物園へ行くと、かの白熊が一日中あちこち振動して休まうとしないのを見るだらう。あれは意義のない生活である。我々は人たれば、かの畜生の生活を眞似るべきではない。畜生の生活はたゞ曖昧であり、たゞみだりに過してゐるだけであり、たゞ自分は何故に斯くなすかを知らぬのである。一人の人間のなすことは、皆一つ一つ、一つの「何故」を答へ得なければならぬ。

私は何故にこれをなすか？ 答へ出し得てこそ、始めて一人の人の生活と見、考へられるのである。

我々は、中國人が皆この種の有意義なる新生活をなし得る様希望する。實際のところ、この種の新生活は決してさしも難いものではなく、たゞ時々刻々、自分に、何故に斯くなすか、何故にあゝするかを問ひさへすれば、段々、我々の言ふ新生活になし到れるのです。

諸君、此の「何故に」なる三つの字は非常に容易なる小事なりと萬々思つてはならぬ。君は今日から、一事をなす毎に、何故なるかを問ふて見よ——何故に辨髪をきらざるか？ 何故に年頃の娘の纏足せし脚を解かぬのか？ 何故に奥サンの顔にはあんなに多くの脂粉をぬるのか？ 何故に棺を出すのに、あんなに多くの乞食を使ふのか？ 何故に妻を娶るのにもあの様に多くの乞食を使ふのか？——君が一二日試みにやつて見れば、この三つの字の趣は眞實に窮りなく盡きるなく、この三つの字の效用も窮りなく盡きるなきを覺えるであらう。

諸君、我々は謹みて諸君たちがこの種の新生活を試みられんことを請ふものである。

第十八課 山中雜記

謝 冰 心

(一) 我怯弱的心靈

我小的時候，也和別的孩子一樣，非常的小膽。大人們又愛逗我，我的小舅舅說什麼聊齋，什麼夜談隨錄，都是些僵屍，白面的女鬼等等。在他們還說着的時候，我就不自然的惴惴的四顧，塞坐在大人中間，故意的咳嗽。睡覺的時候，看着帳門外，似乎出其不意的也許伸進一隻鬼手來。我只這樣想着，便用被將自己的頭蒙得嚴嚴地，結果是睡得週身是汗！

十三四歲以後，什麼都不怕了。在山上獨自中夜走過叢塚，風吹草動，我只回頭凝視。滿立看猙獰的神像的大殿，也敢在陰暗中立。母親屢屢說我膽大，因為她像我這般年紀的時候，還是怯弱的很。

我白日裏的心，總是很寧靜，很堅強，不怕那些看不見的鬼怪。只是近來常常在夢中，或是在將醒未醒之頃，一陣悚然，從前所怕的牛頭馬面，

都積壓了來，都聚圍了來。我呼喚不出，只覺得怕得很。手足都麻木，靈魂似乎蜷曲着。掙扎到醒來。只見滿山的青松，一天的明月。灑然自笑，這樣怯弱的十年來已絕不做了，做這夢時，又有些悲哀！童年的事都是有興趣的，怯弱的心情，有時也極其可愛。

〔註釋〕

謝冰心——現代中國第一流に位する閨秀作家にして、一九

〇二年福建省に生れ、米國のウエスレー大學を卒業、

北京燕京大學に教鞭を執る。留學前より文をよくし、

米國に赴く途すがら又滯米中本國によせた書信式の細

行文は「寄小讀者」の題の下は北京の晨報に載せられ大

きな名聲を得た。其繊細なる筆致と、清澄なる零圓氣

を醸し出すスタイルに我々は何處か中國本來の女性姿

態を認め得る。又彼女は詩をよくし「繁星」「春水」な

る詩集もある。この山中雜記は「寄小讀者」中の一部で

ある。

一九四一年三月昆明にて病死すと傳へらるも誤傳たり。

第十八課 山中雜記

心靈——心、氣持。

怯弱——臆病なる。

逗——からかふ。氣をひく「過弄」とも言つてゐます。

小舅舅——一番年下の叔父さん。

聊齋——聊齋志異、蒲松齡（一六三〇—一七一五）の著はす

怪談集。

僵屍——死人の屍。

惴惴的——びくびくして。

塞坐——はさまつて坐る。

帳門——とばりの入口。

似乎——…の様である。

出其不意的——不意に、（驚）ぬげに。

被し布圍。

睡得週身……ねて全身汗だらけになる。

叢塚……むらがつてゐる塚、墓地。

簞障……氣味悪い様の。

將醒未醒……さめんとしてまださめない。

牛頭馬面……牛の頭をし馬の面をしてゐる鬼。閻魔様に仕

〔譯文〕

私の憶病な心

私は小さい頃は、よその子供と同じ様に非常に臆病でした。大人たちはその上私をからかふのが好きで、私の小さい叔父さんは、聊齋とか、夜談隨錄だとか話してくれましたが、それは皆死んだ人の屍、白い顔をしてゐる女の幽霊等でした。彼がまだ話をしてゐる中は、私は不自然にビク／＼して四邊を見、大人の火の中にはまざり坐つて、わざと咳をしました。寝る時も、とぼりの入口の外を見てゐると、何だか出しぬけに、一本の幽霊の手が伸びて入つて來るのかも知れぬ様でした。私はたゞこんな考へては、布圍で自分の頭を……つかり被せるのですが、其結果身體中汗だらけになつてねて居るのでした。

十三四才以後には、何も怖れなくなりました。山上を一人で眞夜中に歩き墓地をすぎ、風が吹いて草が動いても、私はたゞ振り向いてちつと見てゐるだけでした。所せ、まきまでに氣味の悪い神像の立つてゐる神殿でも、私は陰暗中に立ちました。母親は屢々私が大膽だと申しますが、それは母親が私の年頃

へる怪物。

麻木……しびれ感がなくなる。

挿扎……がく。

麗然……清らかな様、ほつとして。

極其可愛……極めて愛すべきである。

にはまだ非常に臆病だつたからです。

私の日中の氣持はいつも非常に靜かです、非常にしつかりしてゐて、かの眼に見えざる妖怪を怖れませんが。たゞ近頃は常に夢の中、或は醒めぎはのウツラ／＼してゐる頃、急にぞつとして、以前に怖れてゐた牛頭馬面が皆おり重なり、集つて取り圍んで了ふのです、私は聲も出せず、たゞ恐ろしい一方で、手足はしびれて了ひ、心は蜷つて了つてゐる様です。もがいて眼が醒めると、山一面の青松と空一杯の明月が見えるのみです。ほつとして自ら笑ふのですが——こんな臆病な夢は、十年この方もう全く見ませんでした。この夢を見たときは些か悲哀を感じます。幼い頃のこととは皆面白いですが、臆病な氣持は時にはとても愛しいものです。

(二) 古國の音樂

去冬多有風雪，風雨的時候，便都坐在廣廳裏，大家隨便談笑，閒話匣子、彈琴，編絨織物等等，只是消磨時間。

榮是希臘的女孩子，年紀比我小一點，我們常在一處玩。她以古國國民自居，拉我作伴，常常和美國的女孩子戲笑口角。

我不會彈琴，她不會唱，但悶來無事，也就走到琴邊胡鬧。翻來覆去的只是那幾個簡單的熟調子。於是大家都笑道，「趁早停了罷，這是什麼音

樂？」她傲然的叉手站在琴旁說，「你們懂得什麼：這是東西兩古國，合奏的古樂，你們那裏配價略！」琴聲仍舊不斷，歌聲愈高，別人的對話，都不相聞。於是大家急了，將她的口掩住，推到屋角去，從後面連椅子連我一齊拉開，屋裏已笑成一團！

最妙的是連「印第阿那的月」等等的美國調子，一經我們用過，以後無論何時，一聽得琴聲起，大家都互相點頭笑說，「聽古國的樂呵！」

〔註釋〕

廣聽——廣間、ホール。

開話匣子——蓄音機をかける。

編織——毛織物をする。

消磨時間——時間を費す、時間をつぶす。「消磨」は「消遣」

に同じです。

戲笑——ふざける。

口角——口論をする。

耐來無事——怠惰になつて仕事がない。憂

胡鬧——馬鹿騒ぎをする。

續來過去的，繰りかへし繰りかへし。

熟調子——よくなれてゐる調子、知れて居る調子。

趁早——早くに。

叉手——手を組む。

那裡說——どうして……の資格がありません、どうして……出来ませう。

領略——知る、味合ふ。

連椅子連我——椅子や私さへも。

拉開——ひき放なす。

笑成一團——わあと言ふ笑になる。

最妙の—最も可笑しいのは…

印第阿那—インヂアン。

〔譯文〕

古い國の音樂

去年の冬は風雪が多かつた。風雨の時は、皆ホールに腰を下して、一同勝手に談笑したり、蓄音機をかけたなり、ピアノをひいたり、毛織物をしたり、織物したり等で、たゞ時間をつぶしてゐるにすぎません。

榮はギリシヤの女の子で、年は私よりも少し小さく、私たちは常に一緒に遊びます。彼女は古い國の國民と自ら任じ、私を引つぱつて伴にして、常にアメリカの女の子たちと、ふざけたり口論をしたりします。

私はピアノが上手でなく、彼女は歌も上手ではありません。だが退屈してしまつて、仕事がないと、すぐにピアノの所へ出かけて馬鹿騒をしますが。くりかへしくやるものは、たゞかの幾つかの簡單なる知りつくされてゐる調子です。そこで皆の人たちは「早くおやめなさいよ、これ何の音樂なの」と笑つて言ひますと、彼女は傲然と腕を組んでピアノの傍に立つて「あなたたちに何が分かりますか、それは東西の二つの古い國の古樂の合奏よ、あなたたちには分かりつこないわ」と言ひます。ピアノの音は依然として絶えず、歌の聲は益々高くなり、他の人の對話は皆互にきくとれなくなりました。そこで皆んなは焦つて了ひ、彼女の口を掩うて、部屋の間を推して行き、後から椅子も私も一齊に引きはなして了ひ

一經…一度…するや、

互相—互に。

部屋中はもう笑聲一杯になりました。

一番面白いことは、「インデアン」の月等のアメリカの調子でも、私たちが一度やつてからは、其後はいつでも、ピアノの聲がし始めるのをきくと、喜ま互ころなほきまつて「古の國の音樂をきく給へ」と言ふことです。

(三) 她得了刑罰了

休息的時間，是萬事不許作的。每天午後的這兩點鐘，乏倦時覺得需要睡不着的時候，覺得白天強臥在床上，真是無聊。

我常常偷着帶書在床上看，等到看護婦來巡視的時候，就趕緊將書壓在枕頭底下，閉目裝睡。——我無論如何淘氣，也不敢大犯規矩，只到看書

爲止。而壁這個女子，往往悄悄的起來，抱膝坐在床上，逗引着別人談笑。這一天她又坐起來，看看無人，便指手畫腳的學起醫生來，大家正臥着看着她笑，看護婦已遠遠的來了，她的床正對着甬道；臥下已來不及，只得仍舊皺眉的坐着。

看護婦走到甬道上，戾門郭默然，不敢言語。她向壁說：「你怎麼不躺下

。「壁笑說「我胃不好，不住的打呃。躺下就難受。」看護婦道，「你今天飯吃得怎樣？」壁惱惱的忍笑的說「還好！」看護婦沉吟了一會便走出去。壁回首看着我們，抱頭笑說，「你們等着，這一下子我完了！」

果然看見看護婦端着一杯藥進來，杯中泡泡作聲。壁只得接過，皺眉四顧。我們都用氈子蒙着臉，暗暗的笑得喘不過氣來。

看護婦看着她一口氣喝完了，才又慢慢的出去。壁頹然的兩手捧着胸口臥了下去，似哭似笑的說「天呵！好酸！」

她以後不再胡說了。無病吃藥是怎樣難堪的事。大家談起快意，拍手笑說，「她得了刑罰了！」

〔註釋〕

乏倦——疲れ倦む。

強臥——無理に臥す。

偷着——こっそり「偷偷的」とするも同じです。

枕頭底下——枕の下。

淘氣——いたづらなる。

只到看書爲止——たゞ精々本を見る程度位である。

悄悄的——こっそりと。

逗引——惹き起す、誘ひ起す。

這一天——或る日。

指手畫脚——手眞似足眞似する。

甬道——部屋の間の道（廊下）

來不及——間に合はない。

不住的——絶えず。ひつきりなしに。

打呃ーしやくりが出る。

沉吟ーためらふ、ぐづぐづする。

泡泡作聲ーブツブツ音をたてる。

氈子ー毛布。

〔譯文〕

彼女は罰があたりました

休息の時間は、何事もしてはいけません。毎日の午後この二時間、疲れ倦んだ時は必要を覚え、ねつけぬ時は、日中無理にベットに臥してゐることは眞實に無聊を覺えます。

私は常にこつそり本をもつて行つてベットの上で讀みますが、看護婦が巡視に來ますと急いで本を枕の下に隠し入れ、眼を閉じてねた振をします。——私は如何に茶目ツ氣でも大きく規則を犯すことは致しません。たゞ本を見る位が關の山です。然しピーと言ふ女の子は時々こつそり起き上がり、膝を抱えてベットに坐り、ほかの人を誘つて話したり、笑つたりします。

或る日、彼女は又坐りこんで、人が居ないのを見ると、手まね足まねで醫者の眞似を始めました。皆んなは臥したまふ彼女を見て笑つてゐましたが、看護婦はもう遠くからやつて來てゐたのです。彼女のベットは丁度部屋の間の通路に面して居りましたので、横になつてももう朝に合ひません。仕方なしに、もと通り眉をしかめて坐つてゐました。

喘不過氣來ー息が出なくなる。

似笑似笑ー泣き笑ひして。

好酸ー何と酸ばいこと。

看護婦が崩下までやつて來ました。私たちは皆だまつて敢へて物を言ひません。看護婦はピーに向つて尋ねました。「どうしてお休にならないのですか」ピーは笑ひ乍ら「私は胃が悪いの、ひつきりなしにしゃつくりが出て、横になると苦しいんです」看護婦が言ひました「今日は御食事はどうでしたか」「いゝ方です」ピーはびく／＼しながら笑ひを忍び言ひました。看護婦はしばらくためらつてゐましたが、出て行きました。ピーは後を向いて私たちを見て、頭を抱えて笑ひ乍ら言ひました「あなた方待つてね、こんどは私だめよ」

果して看護婦は一杯の薬をもつて入つて來ました。杯の中はブツ／＼音を立ててゐました。ピーは已むなく受け取り、顔をしかめてあたりを見廻しました。私たちは毛布で顔を蔽つて、くすくすと息もつけなくなる程笑ひました。

看護婦は彼女が一口にのみ乾すのを見て、やつと悠つくり出て行きました。ピーはぐつたりと、両手で鳩尾ミソオチをかゝへ横になり、泣笑ひの縁で「神様よーなんとすつばいことー」と言ひました。

彼女はそれからは再び冗談は言はなくなりました。病氣でもないのに薬を飲むことは、どんなにかやりきれないことでせう。皆んなは話をし出すと、愉快になつて、拍手して申します「彼女は罰が當つたのよ」と。

第十九課 寄包裹

老
向

(一)

我先到的郵局，可是櫃臺裏邊那位胖小伙子，隔過我去；先接一位女士的包裹，嘴裏還俏皮了我一句：『Ladies first!』我心裏明白他是怎麼回事，我不說。儘他磨蹭够了，我才把自己的包裹遞過去。

「這包裹是什麼？」那位胖小伙子，瞪着眼睛盤詰我。

「包裹單上不是寫得很清楚嗎？」我這樣回答。

「牛肉用這個盒子不行！」他把包裹毫不經意的向外一推。

「借光！用什麼盒子才行？」我問。

「用鐵盒子，裏邊塞上鋸末。」他不耐煩的說了一句。

「哎喲！昨天我用鐵盒子來寄。你閣下說，得換木盒子，今天我換上木盒子，怎麼，你閣下又說得用鐵盒子？而且，鋸末跟牛肉……」

「木盒子容易漏湯。」他說。

「可是這裏邊並不是清炖牛肉，又在這三九天兒。」

「牛肉乾兒，照章得用鐵盒子。」

「可是昨天的章程，用鐵盒子還不行呢！」

「沒有的話，章程不會改得那麼快。」

「章程是被人使用着，它本身永遠不會自己改。」

「我們是照章行事，沒錯兒！你不要再麻煩。」那位胖小伙子，有點兒欠幽默了。

〔註釋〕

老向——河北省東鹿縣の人。幼より田舎に育ち、農民生活の描寫に一種獨特なる筆をとり、老舎と同様ユーモラスな作風を有する作家である。

「宇宙風」「論語」上に短篇ものを發表してゐた。又平民教育に自らたずさはり、定縣に於いて教鞭をとりたることあり、平民教育に關する論叢、並に著書「黄土泥」あり。この文は該書の百頁と雜誌「人間世」にのつたもの。

包裹——小包。「小包兒」とも言つてゐます。

郵局——郵便局。「郵政局」「郵便局」の略。

櫃臺——勘定臺、帳場。こゝでは「窓口」と譯します。

胖小伙子——デブの若者。「小伙子」は「小夥子」とするも同じです。

隔過我去——私を隔てて行く、私をさしおいて。

俏皮——嘲笑する、洒落を言ふ、軽くあしらふ。

怎麼回事——どんなこと、どうしたこと。

儘——まかせる。

磨蹭斃了—思ふ存分ぐづぐづする。「磨蹭」は「時間をのばす」の意です。

遅過去—渡す、差し渡す。

瞪着眼睛—眼を見張つて。

盤詰—詰問する、問ひ糺す。

包裹車—小包送達申告書。

盒子—箱、小型の箱。

經意—意に介する、注意する。

禁上—つめこむ、ふさぎ入れる。

榧末—榧り屑。

譯文

私は先に郵便局についたのだ。然し窓口に居るあのデブの若者は、私を差し置いて、先に一人の女の小包を受け取り、なほ口の内で「女はお先に」と軽く洒落をとばした。私は心中彼の底意がよめたが、私は黙つてゐた。すきなだけ暇取らせておいてから、私は始めて自分の小包を渡した。

「此の小包は何ですか」かのデブの若者は眼を見張つて私に詰問した。

「小包送達申込書にはつきり書いてあるではありませんか」私はこう答へた。

「牛肉は此の箱では駄目です」彼は小包を全く意に介さぬ風に外の方へ推しやつた。

不耐煩—煩しさに耐へず、面倒くさいとばかり。

容易漏—もろ易い、もろ勝である。

清沌牛肉—牛肉の煮つけ。「沌」は「激」に同じで、醬油や

調味料を加へて煮るの意味、「清」は他のものが入つて

ゐないことを意味します。

三九天兒—冬至から三十七日目を言ひます。最も寒い時

です。大寒。

牛肉乾兒—牛肉の乾したるもの。

照章—規則による。

欠幽默—ユーモアを缺く、不機嫌なる。

「もしもし、どんな箱を使つたら良いのですか、私は尋ねた。

「鐵の箱を使つて、内に鋸屑をつめるんです」彼は五月蠅くてたまらぬ様に一言言つた。

「エツ、昨日私は鐵の箱で出しに來ましたら、あなたは木の箱に取り換へねばいけないと言はれましたから、今日私は木の箱に取り換へたのです。どうしてあなたは又鐵の箱を使はなければとお仰るのですか。それに鋸屑と牛肉とは……」

「木の箱は汁が漏り易いですからなあ」彼が言つた。

「でも此の中は決して牛肉の煮つけではないのです。それにこの嚴寒の候ですから――」

「牛肉の乾いたのは、規則では鐵の箱を使用しなければならぬのです」

『でも昨日の規則では、鐵の箱でもいけなかつたのですよ』

「飛んでもない、規則はそんなに早く變る筈がありません」

「規則は人に使はれてゐるので、規則自身は永遠に變る筈はないですわね」

「私たちは規則通りに事を行つてゐるのです。間違はありません。これ以上面倒かけないで戴きます」
かのデブの若者は些か不機嫌になつた。

(二)

「你閣下要沒有錯兒，那麼，是這位女士錯了。她不該把一個和我同樣

的包裹交給閣下，使閣下這一次違背了章程。」

「什麼？……」那位胖小伙子說話的氣焰，由一千丈驟然間降到不過一尺了。他用着乞求的眼光看那位女士。

「對不起得很，先生！我用木盒子寄牛肉乾兒，這是第十八次。」那位女士說。「你比我們倆綁在一塊兒都聰明些，你應該知道你爲什麼會有這類錯誤。」

「你們倆？」那位胖小伙子重複了一句。顯然的他還驚訝着「綁在一塊兒」。

「是的，我們夫婦倆，」她說。「包裹內外都是一樣的，只是寄出去的地點不同。」

那伴小伙子聽了，未免一怔。他把推出來的木盒子又拿進去，一邊用天秤稱，一邊搭訕着說：「寄到了的時候，東西壞了，我們可不負責任！」

「不過，你要不是故意把它放壞了再寄，我相信它不會壞」我找補了這麼一句。

「……」他低着頭寫收據，沒言語。

爲了平均負擔，兩個包裹，我們每人拿一個。她因爲和一位朋友在路上打了個招呼，所以落後了半分鐘。不是我們有心測驗那位小伙子，是他自己被測驗了。

〔註釋〕

驟然間—忽ち。

對不起得很—まことに相済みません、非常にお氣の毒です。

顯然的—明白に、はつきりと。

未免—むごよつとせざるを得ない、思はず驚いて了ふ。

推出來—推し出す。

拿進去—とり入れる。

一邊—一邊—一方で—一方で—す、—ししながら—する。

〔譯文〕

「あなたが間違がないなら、するとこの女の方は間違つてゐますな。この女の方は私と同様な小包をあなたにお渡しして、あなたに今度規則に違反すゝ様にしてはいけませんね」

「何ですつて……」かのデブの若者の話しの氣焔は突如一千丈から一尺たらずに降つて了つた。彼は哀みを求める眼で彼女を見た。

搭訕着—てれくさきうに、氣まずい様子で。

不過—だが、然し。

找補—補足する、つけたす。

收據—受けとり。「收條」「收單」も同じです。

沒言語—言はなかつた。

打了個招呼—一寸挨拶をする。

有心—故意に、魅々。

測驗—ためす。テストをする。

「眞に相済みません。私が木箱で乾牛肉を送るのは、此れが八回目です」その女の人は言つた「あなたは、私たち二人が束になつてゐるのよりも聰明です。あなたは、あなたがどうしてこんな誤をもつ様なことになつたか御存知の筈です」

「あなたたち二人？」かのデブ若者は一句を重ね、見るからて彼を尙ほ「束になつてゐる」を繕き牙しがつてゐた。

「さうです。私たちは夫婦です」彼女は言つた、「小包の内も表も皆同じです、ただ送り先が違つてゐるだけですよ」

かのデブ若者はきいて、ギグツとせざるを得なかつた。彼は推し出した木の箱を取り入れて、秤で計りながら「着いた時に品物が壊れてゐても、こちらでは責任は負ひませんよ」とテレクサさうに言つた。「だがあなたが態とドンと置いて壊してから送らなければ、壊れる筈はないと信じてゐます」私はこんな言葉をつけ加へた。

「……」彼は頭をさげて受取りを書き、言葉を發しなかつた。

負擔を平均するために、二つの小包を私たちは各各一人で一個をもつたのだつた。彼女は一人の友達と途中で挨拶をしてゐたので、一寸ばかり後れたのだ。私たちが故意にそのデブの若者をテストしたのではなくて、彼自身がテストされたのであつた。

第二十課 天 窗

茅

盾

(一)

鄉下的房子只有前面一排木板窗。暖和的晴天，木板窗扇扇開直，光線和空氣都有了。

碰著大風大雨，或者北風虎虎地叫的冬天，木板窗只好關起來，屋子裏就黑的地洞裏似的。

於是鄉下人在屋面開一個小方洞，裝一塊玻璃，叫做天窗。

夏天陣雨來了時，孩子們頂喜歡在雨裏跑跳，仰着臉看閃電，然而大人們偏就不許，「到屋裏來呀！」孩子們跟著木板窗的關閉也就被關在地洞似的屋裏了；這時候，小小的天窗是唯一的慰藉。

從那小小的玻璃，你會看見雨脚在那裏卜落卜落跳，你會看見帶子似的閃電；你想像到這雨，這風，這雷，這電，怎樣猛厲地掃蕩了這世界，你想像牠們的威力比你在露天真實感到的要大這麼十倍百倍。小小的天窗會

使你的像想銳利起來！

〔註釋〕

茅盾——浙江省桐鄉縣の人。本名は沈雁冰で、茅盾はそのペンネーム。北京大學卒業後、上海の商務印書館に入り、編輯を司る。五四運動後新文學運動の先鋒をきり、小説月報を主編し、郷振鐸等と文學研究會を作り、創作、翻譯、文學批評に大なる活動をつづけたが、北伐に際しては革命運動に身を投じ武漢で民國日報の主筆に當つた。國共分裂して後は上海に戻り、有名な三部作「幻滅」「動搖」「追求」をもつた。著書多く「虹」「子夜」「路」「三人行」「春蠶」「宿葬」は有名なるもの。本文は彼の隨筆集「速寫與隨筆」より取つた。

天窗——屋根にある明り窓。

木板窗——板の窗。

明 り 窓

田舎の家には、たゞ前の方に一並びの板の窓があるだけです。暖い晴れた日に、木の窓は一枚々々眞

扇扇開直——一枚一枚眞直に開く。

碰着——出遇ふ。

虎虎地——ビョービョーと。「呼呼地」と同じです。

關起來——閉める。

地洞——穴ぐら。

方洞——四角な穴。

仰着臉——顔を仰むけにして。

閃電——稲妻。

卜落卜落——パタパタと、パタパタと。

帶子——帯。

比——要大這麼——よりもこんなにも：大きい。「要」に比

較語句の中に入る「要」で別に意味がありません。

銳利起來——銳利になる。

〔譯文〕

直に開かれ、光線と空氣が入つて來ます。

大風大雨、或は北風がヒュー／＼と吹く冬に出遇ふと、木の窓は仕方なく閉じますので、部屋の中は土穴の様に暗くなります。

そこで田舎の人は、屋根の前に一つの小さな四角い窓を開け、一枚のガラスをはめます。これを明り窓と叫んでゐます。

夏の俄雨が來た時、子供たちは、雨の中を走つたりはねたり、顔を仰けにして稻妻を見たりするのが一番好きなのですが、大人たちはわざと許さず、「家の中來い」と言ふと、子供たちは、木の窓の開いたり閉つたりするにつれて、すぐに穴の様な部屋に閉じ込められます。この時、小さな／＼明り窓は唯一の慰めです。

小さなガラスから、あなたは雨脚フレイムがそこでバタ／＼と躍つてゐるのを見られます、帯の様な稻妻を見ることが出來ませう。この雨、この風、この雷、この稻妻は如何に猛烈にこの世界を掃蕩したかに想像し、彼等の威力は、あなたが露天に於いて眞實に感じた威力より、こんなに十倍も百倍も大きいだらうと想像させよう。小さな小さな明り窓はあなたの想像を銳利にします。

(二)

晚上當你被逼著上牀去「休息」的時候。也許你還忘不了月光下的草地

河灘，你偷偷地從帳子裏伸出頭來，仰起了臉，這時候，小小的天窗又是你唯一的慰藉！

你會從那小玻璃上面的一粒星，一朵雲，想像到無數閃閃燦燦可愛的星，無數像山似的，馬似的，巨人似的，奇幻的雲彩；你會從那小玻璃上面掠過的一條黑影想像到這也許是灰色的蝙蝠，也許是會唱的夜鶯，也許是惡霸似的貓頭鷹，——總之，美麗的神奇的夜的世界的一切，立刻會在你 的想像中展開。

啊嗒嗒！這小小一方的空白是神奇的！牠會使你看見了若不是有了牠你就想不起來的宇宙的祕密；牠會使你想到了若不是有了牠你就永遠不會聯想到的種種事件！

發明這「天窗」的大人們，是應得感謝的。因為活潑會想的孩子們會知道怎樣從「無」中看出「有」，從「虛」中看出「實」，比任憑他看到的更真切，更瀾達，更複雜，更確實！

【注釋】

被過牆上床——無理にベツトに入らせられる。

也許——或は：かも知れぬ。

忘不了——忘れきれない。

河灘—河原。

儼然—こつそりと、秘かに。

帳子—とぼり、幕、ベットの隅についてゐるカーテン。

閃閃爍爍—きらきらと光る。

奇幻—奇妙極まる。

掠過—かすめ去る。

〔譯文〕

夜あなたは無理にベットに「休息」にやらせられた時、あなたは尙月下の野原や河原を忘れきれず、こつそりカーテンの中から頭を出し、顔を仰向けにするかも知れない。この時小さな明り窓は又あなたの唯一の慰めであります。

あなたは、その小さなガラスの上の一つの星、一つの雲から、無数の輝く愛らしい星、無数の山の如き、馬の如き、巨人の如き、變化極りなき雲を想像し及ぶでせう。君はかの小さなガラスの上を掠め去る一つの黒い影から、此は灰色の蝙蝠かも知れぬ、或はよくなくナイチンゲールかも知れぬ、或は悪い覇者の如き木兎かも知れぬと想像し及ぶでせう。——とまれ、美麗なる神祕的な夜の一切の世界はすぐに、あなたの想像中に展開することです。

あゝ、この小さな一つの四角な空白は何と神祕的なこと。それは、若しもそれがなかつたらあなたは想ひ起せぬ宇宙の神祕をあなたに見させます。それは、若しもそれが出来てゐなかつたら、永遠に

會唱的夜鶯—歌の上手なナイチンゲール。

惡潮—悪い覇者。

猫頭鷹—木兎。

立刻—すぐに。直ちに。

應得感謝—感謝をうけるべき。

任憑—假令—でも。

聯想し及ばない種々なる事に想ひ至らせます。

この「明り窓」を發明した大人等は感謝さるべきです。何故ならば、活潑にしてよく考へる子供等は、如何にして「無」の中より「有」を見出すか、「虚」の中より「實」を見出すか、(それ等は)たとひ見及んだものよりも、更に眞實適切、更に潤く、更に複雑、更に確實なるを知ることが出来るからです。

第二十一課 熊的母雞

(一)

熊吩咐牛養大了三只很肥很肥的母雞。狐狸想吃，狼想吃，牛也想吃。

狐狸要吃雞，所以就想了個法子，去對熊說道「熊大哥我覺得和你談話真有意思。你這樣聰明，這樣有見識，誰和你談話。準能得到不少的益處。我簡直沒有找第二個像你那樣的人，並且，你又是那樣喜歡客人。記得我前次來拜望你的時候，你請我吃紅燒鴨，滋味真是好極了。」

熊聽了狐狸的話，很高興。「我歡喜你這樣的朋友」熊說「我要把一只肥嫩的母雞款待你。」

所以狐狸留在熊的家裡，吃了一只紅燒鴨。抹着嘴巴走了。

〔註釋〕

母雞—牝雞。

養大—養つて大きくする、大きく飼育する。

三只—三羽。「只」は「隻」に同じです。

狐狸—狐。「狐」と「狸」ではありません。

熊大哥—熊君。「大哥」は「一番上の兄」の呼稱ですが、年

上の男の人を呼ぶときにつけます。

準能得到—きつと得ることが出来る。

簡直—全く。

第二個像—第二番目の君の如き、もう一人の君の如

〔原文〕

熊の牝雞

熊は牛に三羽のそれはく肥えてゐる牝雞を飼育する様に申しつけました。狐は食べたがり、狼も食べたがり、牛も食べたがりました。狐は雞を食べようとして、それで一つの方法を考へて、行つて熊に言ひました。

「熊兄さん。私はあなたと話をするのは非常に面白いと思ひます。あなたはこの様に聰明で此の様に見識をもつてゐる。誰でもあなたと話をすれば、きつと少なからざる利益を得ることが出来ます。私は全くあなたの様な人は二人と捜し當てたことはありません。それに、あなたは又あなたにお客様を喜びま

き入。

記得—覚えてゐる。

拜望—訪問する。

紅燒鴨—家鴨を油で炒め後醬油其他の調味料で煮たる料理。

理。

高興—愉快なる、嬉しがる。

肥嫩—油がのつてゐて軟かい。「肥」は「脂がある」の意で

「瘦」は「脂肪氣のない」の言ひます。

抹膏嘴巴—頬をふいて。「抹」は「拭ふ」ですが「抹油」などとなる。「油をぬる」となつて全く反對の意になります。

す。憶えてゐますが、私はこの前來てあなたを訪問した時、あなたは私に家鴨の旨煮を食べさせました。味は眞實にこの上なく良かったです」

熊は狐の話をきいて非常に愉快になりました。「私は君の様なこんな友達がすきだ」熊が言ひました。

「私は一羽の脂の多い軟かい牝雞で君を款待しよう」と。
それで狐は熊の家に留まり、一羽の家鴨の旨煮を食べて、頬をふきく去りました。

(二)

狐狸去了多久，狼也到熊的家里來了。說道：

「熊大哥，我今天有功夫來看你。真覺得很高興。近來我忙極了。獅王要委我做內務大臣，並且虎將軍又要把他的女兒許配給我的兒子。只是那個姑娘脾氣太躁了些，我有些不願意，你看怎樣呢？………嗚，我就要走了，有人約我去吃飯……真麻煩，每天我總要應酬許多人。不是這家，便是那家。」

熊想狼是得了勢，所以拉住了狼的手，說道：

「狼大哥，慢走！我這兒吃了飯去。我有一只肥嫩的母雞款待你。請你賞我一個大面子吧。」

狼裝着一定要走，被熊再三拉住了。

所以狼留在那兒，吃了一只紅燒雞。抹着嘴巴走了。

牛走到熊那兒說道：

「先生，請你把一只母雞給我吃吧。我餓極了，並且我給你做了這許多工。雞又是我養大的。你應該給我一只。」

熊不給牛吃雞。

「什麼！」他生氣的道，「雞是配你這種蠢東西吃的嗎？你幫我做工，我允許你吃草，這還不公平嗎？」

熊把雞自己吃了，並且將牛趕出來。牛跑到外面，抱怨着說：

「這是一個什麼道理啊，吹牛皮和拍馬屁的能够吃好的，認真的却祇能够嚼草！」

註釋

去了好久——去つてから久しい間たつ。

功夫——ひま、時間。「工夫」に同じです。

委我敢——私になれと命じる。

許配——婚約する。「許婚」に同じです。

只——ただ、だが。「不過」に同じです。

脾氣——性質(悪い方)、性癖。「皮氣」とも書きます。

躁了些——些か短氣である。「躁」は「急性子」の意。

約我去—私に：に行くを誘ふ。

應酬—交際する。

不是—便是：—でなければ：だ。「便是」は「就是」とする

も同じです。

拉住—ひきとめる。

慢走—悠くりしてくれ。

賞我一個大面子—私に大きな面子を與へよ、私に大いに

面目を施させて下さい。

〔譯文〕

狐が行つてから久しくして、狼も熊の家に来て、言つた。

「熊君、私は今日暇があつたので會ひに来、眞實に愉快に感じます、近頃私はとても忙しく、獅子王は私に内務大臣になれと任命せんとし、その上、虎將軍は自分の娘を私の息子に婚約したいと言ふのだ。だが、あの娘は些か短氣なので、私は一寸同意しないのだが、あなたはどう思ふかね……やあ、私はすぐ出かけなければならぬ。私を食事に行く様誘つてゐる人があるんでね……眞實に五月蝸い、毎日どうしても多くの人と交際しなければならなくて、この家でなければ、あの家と言ふ様に。」

熊は狼が勢力を得たと思つたので、狼の手をひきとめて、言つた。

「狼君、悠くりして下さい、私の所で飯を食べて行きなさい。私はあなたを款待する一羽の脂のある軟

裝着—：を裝ふて、：の振りをして。

配—：…するだけの資格がある。

東西—馬鹿奴。のろまな奴。

趕出來—退出す。

抱怨—怨む。

吹牛皮—大風呂敷をひるげる。

拍馬屁—人におべつかを使ふ。

い牝雞があります。どうぞ私の顔を十分に立てさせて下さい」と。

狼はどうしても行く振りをしたが、熊に再三ひきとめられて了つた。

それで狼はそこに留つて、一羽の家鴨の旨煮を食べ、頬を拭ひ乍ら去つた。

牛が熊のところへ行つた。

「先生、どうぞ私に一羽の牝雞を食^べさせて下さい。私はとても腹がすいてゐるのです。それに私はあなたにこの多くの仕事をして上げました。雞はそれに私が大きくしたのですから、あなたは私に一羽下さるべきです」

熊は牛に雞を食^べさせなかつた。

「何を！」彼は怒つて言つた。「雞なんかお前の様なノロマが食^べる資格があるか、お前は俺に仕事を手傳つてくれたら、俺はお前に草を食^べるのを許したのだ。これでも不公平か」

熊は雞を自分で食^べて了つて、その上牛を追出した。牛は外に走り出て、怨んで言つた。

「此れは何んたることか、大風呂敷をひろげ、人にへつらふ者は、いゝものが食^べられ、眞面目な者は、たと草を嚼めるだけだ」と。

第二十二課 比較

八六

豐子愷

(一)

有一次我同了一位朋友和他的孩子一同乘火車。

朋友的孩子，今年照西洋說法十三歲半，照中國說法十五歲了。這種不大不小的人，乘火車最感困難。給他買半票，違背了鐵路局的定章，被查問時，只得撒謊；給他買全票呢，其實這孩子並不比別的十一二歲的孩子高大，似乎太吃虧了。朋友就給他買半票。

他携着這大孩子走出軋票處，軋票的軋着半票時，看看這孩子；說：「這孩子太大了！」但說過就算，我們也管自走了。到了火車中，孩子坐在他父親身旁，我獨自另坐一處。驗票的驗着半票，看看這孩子說：「他下會要買全票啊！」查票人去後，我的朋友對我說，省得囁嚅，回去時給他買全票罷。我很贊成。

但回去時我們一時忘記，又給他買了半票，到了火車中方才記得，這會

因爲朋友手裏提的東西太多，是我携着這孩子上車的。到了火車中，朋友因爲要看守東西，獨自坐在一處，他的孩子傍着我坐在另一處。回憶我携着他走出軌票處時，軌票的並沒有說話。後來驗票的來了。看看坐在我旁邊的大孩子，也沒有說話。下了車，又是我携着這孩子走，收票的，就是前次說「這孩子太大了」的軌票人，看看我携着的大孩子，也沒有說話。

註釋

豐子愷——浙江省石門灣に生れ、畫家であり、隨筆家である。

林語堂の主筆した「論語」にユーモラスな反面諷刺

感傷の伴つてゐる隨筆を寄せてゐた。こゝに紹介する

「比較」も「論語」に載つたものの一部である。著書に

(但し筆者の知つて居る範圍内)「漫畫阿Q正傳」「車

廂社會」「子愷隨筆」「綠線堂隨筆」「綠線堂再筆」等がある。

る。

有一次ある時。

照：説法……の言ひ方に照せば、……の言ひ方では。

半票——半額の切符、子供の切符。

定章——規則。

只得撒謊——やむなくウソをつく。

全票——普通の大人の切符。

似乎……の様な。

大吃虧——餘りに損をす。

軌票處——改札口。「軌」は「查」とするも同じです。

說過就算——言つて了ふとそれで終り、言つただけで何事

もない。

管目——かまはずに。

下會——この次、「會」は「回」が正しいです。

查票人——檢札係。

省得——を省き得る様、……にならぬ様に。

囁囁——多言する、グズグズ言ふ、面倒なことを言ふ。

一時忘罷——一寸忘れぬ。

方才記得——やつと覺えた、初めて氣がつく。

還會——今度。「會」は「回」が正しく「這回」とすべきです。

(譯文)

比 較

或る時、私は一人の友と彼の子供と一緒に汽車にのつた。

友達の子供は、今年は西洋流に言つて十三歳半、中國流に言つて十五歳であつた。この位の大きい方でもなく小さい方でもない者は、汽車にのるとき一番困難を感じるのである。小供の切符を買つてやつて、鐵道局の規則に違反すると調べられきかれた時は、仕方がないウンを言ふ。大人の切符を買つてやるとすると、實際のところこの子は他の十一二歳の子供より少しも大きくないので、ひどく損をした様に思ふ。友達はその小供の切符を買つてやつた。

友達がこの子供を連れて改札口を出、改札者が子供の切符を缺んだ時、子供を見て「この子供は大きすぎます」と言つたが、言つただけで済んで了ひ、私たちもかまはずに行つて了つた。汽車の中に入つて、子供は父の傍に腰を下し、私は獨り別に坐つてゐた。檢札者が半額切符を檢札するとき、この子供を見て「次は大人の切符を買はねばいけません」と言つた。檢札係が行つて了つてから、私の友達は、面倒が起きるといけないから、歸る時には大人のを買はせよと言つた。私は賛成した。

だが歸へる時に、不圖忘れて又半額切符を買つて了つて了ひ、汽車の中に入つてやつと氣がついた。

傍讀我——私に近づいて、私に近く、私の傍に
收票的——切符を受けとる人。

今度は友達に手に多くの物をもつてゐたので、私がこの子をつれて乗車した。汽車に入つてから、友達は品物の番をしてゐなければならぬので、獨りで一箇所に腰を下し、子供は私のそばの別のところに腰かけた。考へて見ると、私が子供をつれて改札口を出るとき、改札する人は何も言はなかつた。後に檢札係が來た。私の傍に腰を下してゐる大きな小供を見ても何も言はない。下車して、又私はこの子供をつれて行つた。切符を受取る者は、前に「この子供は大きすぎます」と言つた改札者だつたが、私がつれてゐる大きな小供を見ても、何とも言はなかつた。

(二)

難道他們和我特別要好，就「馬馬虎虎」不索補票嗎？不會的。出車站後我找尋這理由，苦思不得。這孩子却找尋出了，他說是他爸爸身體短小而我身體高大的原故。不錯！原來他的父親身軀短小精幹，名爲大人，其實比他兒子高得半個頭，而且粗得很有限。前會他和這矮小的父親携着走，並着坐，相形之下，便見「孩子太大，」「下回要買全票啊。」這會他和我携着走，並着坐。我雖然並不魁梧奇偉，但是一個中等身材的人，穿的衣服又寬，看起來比他高大得多。相形之下，只見孩子很小，儘有買半票的資格了。

我確信了這理由之後、就像「回也聞一以知十」一般、推想到世界大少、高低、長短、厚薄、廣狹、肥瘦、以至貧富、貴賤、苦樂、勞逸、美醜、賢愚、部不是絕對的、都是由「比較」而來的。而且「比較」之力偉大得極、一切人生的不滿足也都是由於比較而生。今天比較之力使我們省進半張火車票的價錢、真不過是「小試其技」而已。怪不得、華租交界之處、華界的草棚傍着了租界的洋房看似格外低小；而租界的洋房傍着了華界的草棚看似格外高大。人行道上、中國人傍着了西洋人走路看似格外矮小；西洋人傍着了中國人走路看似格外高大。

註釋

難道：嗎—まさか…ではあるまい。

和：要好—…と仲睦ましい。

馬馬虎虎—考へなき、良い加減に。

補票—補助切符、補助券。

不會的—あり得ない、ある筈がない、そんなことはない。

苦思不得—しきりに思つても分からない。

找尋出—見つけ出す。

名爲大人—名前は大人である。

精幹—手腕ある。但し此の場合は「細そりして引きしまつてゐる」の意です。

高得半個頭—頭の半分だけ高い。

粗得復有限—太さも非常に限りがある。肉づきも大した

ものではない。

矮小—背が低く小さい。

相形之下—雙方を比較するに。

相形之下—雙方を比較するに。

魁梧奇偉——容貌偉大なる。「魁偉」に同じです。

中等身材——中肉中背の身體。

儘有——ただ、だけあり。「儘」は「竟」「儘」に同じです。

回也聞——以知十一回ヤ一ヲ聞キ以ツテ十ヲ知ル論語の言葉を用いたもので、「回が一」をきいて十を知つた如く……の意味に使つたものです。

以至——に及ぶまで。「以及」に同じです。

偉大得極——偉大なること極まる、極めて偉大である。

〔譯文〕

(二)

まさか彼等は私と特別に仲良いで、良い加減にして補助券を要求しなかつた理ではあるまい。そんな筈はないのだ。停車場を出てから私は理由を捜し、しきりに考へて見たが分からなかつた。この子供の方が却つて理由を捜し出して、お父さんの身體は低く小さいのに、私の身體は高く大きいからだと言つた。成程！もつとも彼のお父さんは身體が低く小さくきりつとしまつてゐて、名は大人でも實際は自分の息子より頭の半分位しか高くなく、肥り方も大したものではない。前の時は、子供はこの低く小さい父親と一緒に歩き並んで腰をかけてゐたから、双方比べて見ると、「小供は大きすぎる」と思はれ、「次

省進——省き入れる。

小試其技——一寸其の技を試めず、一寸したためし、ほんの小手調をする。

不過——而已——にすぎない。「而已」は「就是了」とするに同じです。

怪不得——尤もなことだ。

華租交界——中國街と租界の境。

草棚——アンペラ葎の小屋。

からは大人の切符を買はねばなりません」となつたのである。今度は私と一緒に歩き並んで坐つた。私は決して偉大ではないが、中肉中背の身體つきで、着てゐる衣服もダブついでゐるので、見ては子供よりぐと高く大きく見えるのである。双方比べると、たゞ子供のみとても小さくて、半額切符を買ふだけの資格しかない様に見えるのである。

私は此の理由を確信してからは、丁度「顔同が一をきゝ十を知つた」如く、世の中の、大小、高低、長短、厚薄、廣狹、肥瘦、乃至、貧富、苦樂、勞逸、美醜、賢愚、は皆絶對的のものでなく、すべて「比較」から來るものだと言ふことに想到した。而かも比較の力の偉大なるは凄く、一切人生の不満足も皆比較から生れるものである。今日比較の力は私たちをして半額の汽車切符の値段を儉約させたが、これはほんの小手調べ位のものである。尤もなことである、中國街と租界の境をなしてゐる所は、中國街のアンペラ小屋は租界の西洋館に近く特に低く小さく思はれ、租界の西洋館は中國街のアンペラ小屋に近く特に高く大きく見えるのは、人が道を歩むにも、中國人が西洋人に近づいて歩けば特に低く小さく見えるし、西洋人が中國人に近づいて歩けば特に高く大きく見えるのである。

(三)

這幾天、盛夏、我談起了「比較」便想到日本某畫家的一套連環漫畫。大意是這樣：一、小資產階級的青年夫婦二人到避暑的名勝地找尋旅館，因

避暑人多，旅館處處客滿，夫婦二人手携皮篋和行杖，在途中徨徨，嘆息：「唉！自己有別莊的人多麼寫意！像我們要臨時找尋旅館的，真是不便！」二，都市裏的公司的職員開着電風扇，在室內辦公；從窗中望見這對青年夫婦相偕趁專車赴避暑地去，嘆息着說：「唉！有閑避暑的人多麼寫意！像我們，被職務所羈，每天坐在這裏看電風扇搖頭，真是沒趣！」三，公司對面煙紙店裏的老板搖着芭蕉扇坐在櫃內，望見公司裏的職員開着電風扇辦公，嘆息着說：「唉！有電扇的人多麼寫意！像我們，不絕地搖這把破蒲扇，手腕幾乎搖脫，汗水還是直流，直是晦氣！」四，馬路上拉黃包車的經過煙紙店門前，望見老板坐在櫃內揮扇，嘆息着說：「唉！坐在屋裏搖扇子多麼舒服！像我們，拉了這輛車子在大毒日頭底下跑路，真是苦惱！」五，黃包車夫經過打鐵店門口，鐵匠司務看見了，嘆息着說：「唉！這幾天在路上拉車子多麼爽快！像我們，天天在煤爐旁邊被烤，這才受罪！」

〔註釋〕

皮篋—皮のカバン。

行杖—ステッキ。

徬徨—さまよふ、徘徊する。

寫意—愉快なる、満足する。

電風扇—扇風機。

辦公—事務をとる。

趁—のる。「乘」に同じです。

專車—特別列車。

被—所屬—にしばられる。

壁紙店—壁草紙屋。

老板—主人。

芭蕉扇—團扇。

櫃内—帳場内、勘定臺の内

不絶地—絶えず。「不住的」に同じです。

幾乎—殆んど。「幾幾乎」に同じです。

【圖文】

(三)

この數日はひどく暑い。私は「比較」のことを話したら、日本の某畫家の一部の連續漫畫を「ひ出し」た。漫畫の大意は次の如きである。一、小資産階級の年若い夫婦二人が避暑の名勝地へ行き、旅館をさがしたが、避暑する人が多く、旅館はどこも満員、夫婦二人は手に皮カバンとステッキをもつて途上をさまよひ、嘆息して曰く「アアア！自分で別荘をもつてゐる人は何と愉快なことか！私たちの様に其

揺脱—ゆりぬける、ふり抜ける。

直流—しきりに流れる。

晦氣—運が悪い、氣が腐る。

黄包車—人力車。

揮扇—扇を動かす、扇を使う。

大毒日頭—とてもひどい太陽、じりじり照りつける太陽。

打鐵店—鍛冶屋。

鐵匠司務—鍛冶屋の親方。「司務」は「職人の頭」を言ひます。

這才受罪—これでこそ罪をうけたのだ、これは全く罰當

りだ。

の時になつて宿搜しするなんて、眞實に不便だ」と。二、都會の會社の職員が扇風機をかけ室内で事務をとつてゐる。窓から、この二人の若夫婦が相携へて特別列車にのり避暑地に行くのを望み見、嘆息して曰く「アアア！避暑に行ける閑のある人は何といふんだらう。俺たちの様に職務にしばられ、毎日此處に坐つて扇風機のカンブリ振りを見てゐるのは、全く面白くないや」三、會社の向ひ側の煙草屋の主は團扇を使ひ乍ら勘定臺におさまつてゐ、會社の職員が扇風機をかけて事務を執つてゐるのを見て、嘆息して曰く「アアア！扇風機のある人は何といふんだらう！手前どもの様に、絶えずこの破れ團扇を使つてゐちやあ、腕が落ちさうだ、汗もしきりに流れるし、眞實に氣が傷るわい」と。四、車道に車夫が煙草屋の前をすぎ、主人が勘定臺に坐つて扇を使つてゐるのを見、嘆息して曰く「アアア！家の内に坐つて扇を使ふなんてなんと氣持がいくだらう。俺たちの如く、この車を引いて、ひどく照りつける太陽の下で走るなんて、眞實に苦しいことだ」と。五、人力車夫が鍛冶屋の門口を通る。鍛冶屋の親方が見て、嘆息して曰く「アアア！このごろは、路で車を引いたら何と爽快なことか、俺たちの様に、毎日々々石炭爐の傍であぶられてゐるとは、これこそ罰當りだわい！」と。

第二十三課 村兒轍學記

老

向

(一)

本來一個鄉下孩子，要長到八九歲，春天會拔苗兒，夏季能割草，蓋房

搬得動磚，澆園開得了畦，做活已經頂大半個人了，誰家還願意讓他去上學？可是城裡的告示，六歲的孩子要不入學讀書，他的大人得去坐監獄。村兒就是被這種罰規逼到學校裡去的一個。

村兒第一天上學，帶回家去了八本書。他的祖父，祖母，父親，母親都圍上來，看那書上的插圖。他們一邊看；一邊不住的贊歎。他祖父說：「以前的四書五經，哪有這麼多的五彩畫兒？」

「這上邊畫的人們都不是中國的。」村兒的父親忽然驚訝了，他說：「你們細看，書上的大人孩子，服裝都不跟咱們這裡人一樣兒。這是皮鞋，這是洋服，這叫打狗棍兒，倒很像城裡十字街上那位佈道的老洋鬼子那一套。」

「這個紡線的，也是個外國人。」村兒的祖母說：「咱們搖紡車用右手，她這是用左手。」「要是那麼說，這個趕車的也不是中國人。你們看，中國趕車的，幾時拿着鞭子站在外手兒呢？」村兒的祖父這樣說。

〔註釋〕

輟學—學をやめる、學問するをやめる。

長到—成長して—なる、—まで成長する。

拔苗兒—苗を抜く。

割草—草を刈る。

蓋房—家をたてる。

ある。

村兒は第一日に學校へ行き、八冊の本を家にもち歸つた。彼の祖父、祖母、父、母は皆集つて、その本の挿繪を見た。彼等は見ながら絶えず賛歎した。彼の祖父は言つた。

「以前の四書五經は、どうしてこんな多くの色のついでゐる繪があつたらうか」

「この上に畫いてある人たちは、皆中國の人たちではない」村兒の父親が突然驚き訝しがつた。「皆んなよくみる、本の上の大人や子供は、服装はどれもわたしたちの處のと同じではない。これは皮靴で、此は洋服で、此は犬はたき棒と言ふんだ。城下の十字路上のあの傳道してゐる年寄りの毛唐の様子に似てゐるし」

「この絲をつむいでゐる者も外國人だ」

村兒の祖母が言つた。「わたしたちが絲つむぎ車を動かすには右手を使ふが、この人は左の手を使つてゐる」

「さう言へば、この馭者も中國の人ではない、見ろよ、中國の馭者が、いつ鞭をもつて右側に立つかね」村兒の祖父はこの様に言つた。

(二)

「先生說、這八種書統共要一塊二毛錢。」村兒看見他們都高興了，才鼓

着勇氣說了這麼一句。可是這一句話很像一個霹靂，把大家嚇得都愣住了。他的祖母首先發話：「咱們給他們去上學，還要咱們買書？剛上學不到一天就花一塊多，這個書誰家念得起？我們就是半年不點燈，也省不出這麼些錢，要糶老玉米，至少得糶八斗。」

「按理說，一個初上學的孩子，有一本書念着，也就可以了。念完一本再買一本，不是正合適嗎？」村兒的祖父說。

「再說，這一張紙上，寫這麼三四個大字，怎麼能值這些錢？」村兒的祖母還接着他斷了的話頭兒說：「一本皇曆上有大字有小字，那麼密，才賣五個大銅板了。這怎麼能值一塊多？」

他們適才贊歎的那八種教科書，忽然都變成「苦悶的象徵」了，由喫晚飯那時候兒討論起，直到雞叫了兩遍，才決定這一次算是認了頭疼，把這筆書價，如數拿出；其中一部分，是村兒的母親把賣了兩付耳環子的錢拿出來湊足的。村兒的父親莊嚴的訓教村兒說。

「你今年九歲，可不算小了。家裏不要你做莊稼活，要你去念書。可是憑咱這個家境，哪裏供給得起？你要不用心學出點兒能耐來你對得起誰？」

〔註釋〕

統共―合計。

高興―愉快なる、嬉しがる。

霹靂―雷が急激になること。突如來るもの。

愣住―呆りして了ふ、きよんとしてしまふ。

首先―原先に。

念得起―よみ得る、讀むだけの力がある。「這個書難家

念得起」は「この本を誰の家が讀むだけの資力をもつ

てゐるか」となります。「こんな學問はだれもしきれ

ない」の意になります。

就是…也―假令…でも。

省不出―儉約し出せない。

糶―贖物を賣り出す。

老玉米―玉蜀黍。「玉米」だけでも同じです。

至少―少くも。

按理說―理窟から言へば。

再說―更に、それに、それから。

接膚…につゞいて、…をついで。

話頭兒―話の緒、話題。

皇曆―こよみ。「黃曆」と發音も意味も全く同じです。

銅板―穴あき銅貨。「大」は「小銅板」、一厘二厘の小銅貨)

に對して言つたもの。

適才―たつた今、今し方。

由…起直到…から…づうと…まで、…から…引きつゞ

き…まで。

認了頭疼―頭痛と認めて了ふ、不運とあきらめる。

這筆書價―この本の値段。「筆」は「錢」の陪伴詞。「書的

價錢」。

如數―數通り、額通り。

兩付―二つの。「付」は「副」に同じく、「耳環子」「耳環」の

陪伴詞です。

湊足―十分に集める、工面し十分にする。

訓教―教訓する、いましめる。

莊稼活―百姓仕事、野良仕事。

憑…による、…頼る。「家」「筒蓆」に同じです。

家境―家の狀態、暮し向。

學出：能耐來―才能を學び出す、才能をみがき出す、學んで能を身に付ける。

對得起誰―誰に顔向けがなるか、誰にすむと思ふか。

〔譯文〕

「先生が此の八種の本は合計一圓二十錢だと言ひました。」村兒は彼等が皆愉快になつたのを見て、やつと勇氣を鼓してこう言つた。だが此の一言は、恰も霹靂の如く皆の者を驚かしてボカンとさせて了つた。彼の祖母は眞先に言葉を發した。「わしどもはあの人たちのために學校に入れてやつたのに、まだわしどもに本を買はせるのかい。學校に入つて一日にもなるかならぬかに、一圓餘りも使ふ、こんな本はこの家だつて讀ませるものか。わしどもが半年間燈をつけなくてもこんなに多くの錢は儉約し出せない。玉蜀黍を賣るにしても、少くも八斗は賣らねばならない」

「理窟から言へば、學校に入つたばかりの一人の子供は讀んでゐる一冊の本さへあればいふんだ。一冊讀み終つたら其上で一冊買つたら、眞實に工合がいゝぢやないか」村兒の祖父が言ふ。「それによ、この一枚の紙には、こんな三つか四つの大きな字が書いてあつて、どうしてこんな錢の價値があるかね」村兒の祖母は尙ほ途切れた話の緒をつゞけて言つた。「一つの上には大きな字や小さな字があんなにぎつたりつまつてゐて、僅かに大銅貨五枚だ。これがどうして一圓いくらの價値があるもんかね」

彼等が今し方まで賛歎してゐたかの八種の教科書は、突然「苦悶の象徴」に變つて了つた。晩飯を食

べる時から討論し出し、ずつと鶏が二度鳴くまでつゞけ、やつと今度はまあ不運と諦め、この本の代價を全部出すこととし、其中の一部分は、村兒の母親が二つの耳環を賣つた金を出してまとめることにした。村兒の父親はいかめしく村兒に申し渡した。お前は今年九歳で小さい方ではないのだ。家ではお前に野良仕事をさせようとせず、お前に勉強に行つて貰つてゐるのだ。だがわしどものこの暮し向きでは、どうして出しきれようか。お前が若し一心に學問して身に能をつけないならば、お前は誰に顔向けが出来るか。

(三)

別看村兒是個農家孩子，還是真有心眼兒，把他父親的話，一字不漏，都記在心裏了，第二天早晨，天剛一亮，村兒就去上學。校役輕輕的說：「九點鐘才上課，現在還不到五點半，你來得太早。先生正睡黎明覺，教室門也不開，你快回去吧！」村兒在院裏一看，同學們一個還沒有來；再隔着窗子一聽，果然聽得先生正打鼾聲，他圍着教室繞了一匝，看見無門可入，只得文跑回家去。

村兒的祖父正在打掃院子，忽然看見村兒跑回來，把掃帚一揮，罵起來。「天生的是拉鋤把子的材料兒，剛上學第二天就逃學！」村兒正要分辯

他母親過來批了他個大嘴巴，立逼着他去抱柴燒火，幫着作飯。不用說，大人們的憤怒，都關聯着那一塊多錢的書價。

早餐吃過了，村兒又去上學。先生已經立在講臺上訓話，題目是「好學生不遲到」。訓話之後，接着講了一段故事：一個小仙人，拿着一口袋子，在路上等着那上學最早的孩子。村兒聽了，覺得「小仙人」，「金子」都怪好聽的；可是他怎麼想也想不明白「最早」是什麼意思。

下午三點半鐘，村兒的父親剛睡醒午覺，要到地裡去工作。村兒的學校已經放了學。幸而他父親看見別的孩子們也回了家，又看見先生也提着打狗棍兒出來散步，才沒有疑惑村兒又逃學。不過心裡一勁兒的念叨「洋學堂，洋辦法」

村兒上學六天了。依着預定的程序，先生已經教完了國語第一課，課文是「這是媽媽」村兒可不能說不用功，每天下午放了學自己在家裡溫課，一遍接一遍的念「這是媽媽」。一直念到天黑。他用左手按着書，右手指着字，認真的念誦，好像一不留神，書上的字就會飛了。

〔註釋〕

別看……と見るな、……と思ふな。

有心眼兒——心のはたらきがある、心根がある、物事を辨

べてゐる。

一字不漏——一字も漏らさぬ、一言半句もきゝ漏らししな

記在心裏——心に憶える。

校役——學校の小使。

睡黎明覺——明け方のねむりをする。

打鼾——鼾をかく。

繞了、二匝——めぐりめぐる。

打掃——掃く。

掃帚——箒。

天生的——生れつきくはの柄を引く材料だ、生れつき

土百姓の子だ。「鋤把子」は「くはの柄」の意です。

逃學——學校をずる休みする。

正要——丁度——せんとす。

分辯——辯解する。

批——大嘴吧——ひどく彼の頬を打った。

立逼着——すぐに迫つて、すぐに無理やりに……

燒火——火をたく。

不用說——言はずと知れた、言ふまでもなく。

接着——つゞいて。

一口袋——一つの袋。

怪好聽——とてもきくによい、とても面白い。「怪」は「非常

に」の意であります。

睡醒午覺——ひるねがさめる。

地裡——畑、野良。

放了學——學校が終る。

幸而——幸なることには。「幸虧」に同じです。

一勁兒——續け様に。

念叨——ブツブツ言ぶ。

程序——順序。

一遍接一遍——一度は一度につゞき、一遍一遍くり返

し。

村兒は農家の小供だとお考へになつてはいけない。彼にはやはり心根があつて、父の話を一言半句もきゝ漏らさず、皆心に留めた。第二日目の早朝、夜が明るや、村兒は學校へ行つた。學校の小使は「九時にやつと授業が始まるのに、まだ五時半にもならぬ、來方が早すぎる。先生は丁度明方のお休みをしてゐる。教室の戸も開かないから、お前は早く歸へれ」とあつさり言つた。村兒は庭を見たが同級の者は一人も來て居らず、更に窓を隔ててきくと、果して先生が丁度射をかいてゐるのがきこえた。彼は教室をぐるりと一廻りして見たが、入口がないので、仕方なく又家へ驅け戻つた。

村兒の祖父は丁度庭を掃いてゐたが、ふと村兒が走つて歸つて來たのを見て、箒を投げ出して悪く言ひ出した「生れつきの土百姓筋だ、學校に上つたばかりの二日目にする休をする」村兒は辯解しようとしてゐたら、彼のお母さんがやつて來て、ひどく彼の頬を打ち、すぐに無理に柴を抱え、火をたかせ、御飯を作る手助けをさせた。言ふに及ばないことだが、大人等の憤怒は皆かの一圓いくらの本代に關聯してゐたのである。

朝御飯がすんで、村兒は又登校した。先生は教壇上に立つて訓話をしてゐた。題目は「良い學生は遅刻せず」と言ふのだつた。訓話の後、つゞいて一くだりの昔話をした。一人の小さな仙人が一袋の金貨をもつて、道で登校に最も早い子供を待つてゐる。村兒はこれをきいて「小さな仙人」「金貨」はとても面白く思はれた。だが彼は如何に考へても「最も早い」と言ふのはどんな意味かはつきり考へ出せなかつた。

午後の三時半、村兒の父親は晝寝からさめて野良へ行つて仕事をしようと思つた。村兒の學校は已に終つてゐた。幸に彼の父は外の子供も家に歸へるのを見、又先生も犬はたき棒を手にして散歩に出るのを見たので、やつと村兒がする休みしたと疑はなかつた。でも心中ではしきりに「洋式學校、洋式方法」とブツ／＼言つた。

村兒が學校に上つてから六日になつた。豫定の順序に依つて、先生は已に國語第一課を教へ終つた。教科書の文は「これはお母さんです」と言ふのだつた。村兒は勉強せぬと言ふことは出来ない。毎日午後、學科が退けると自分で家で復習し、何遍も何遍もくり返へして「これはお母さんです」とづうつと目が暮れるまで讀みつゞけた。彼は左の手で本を抑へ、右手で字を指し、眞面目に音讀した。丁度一寸不注意にしようものなら、本の上の字はすぐにも飛ぶかの如く。

第二十四課 北伐途次

郭沫若

(一)

第二天清早八點鐘的時候，鄧主任由歌生路的總司令部行營到了後城馬路來，因爲在八點半鐘是決定了要開一次部務會議的。

部務會議列席的人是各科的科長，股長，以及祕書，主席便是主任。鄧主任所主席的會議，名目雖叫會議，照例是一種軍事的獨裁。他是先在自己的鈔本上寫出幾條大綱，接着便用命令式宣佈。

他這個所宣佈出的命令，是要政治部全部遷過武昌，駐劄在舊省議會裏面，以後的工作是偏重在農民運動方面。

這個步驟本來是應該有的，但要全部遷徙却是出於意料之外。我的意思是想仍然以漢口爲本部，而於武昌設立支部，因爲漢口無形中已經成爲了政治的中心，而且也是武漢三鎮的社會的中心，對內對外的工作都以這兒爲便利；而且政治部的工作在這兒已經有了一個月的基礎，不應該完全拋棄，搬到那偏僻的在各種工作技術的運用上都不靈便的武昌。注重農民運動的工作在漢口也是可以做的，武昌該立一個小規模的辦事處也就可以呼應了。

【續】

郭沫若—四川省樂山縣の人、日本に留學。九州帝大醫學部を卒業す。歸國後は著述に従事。郁達夫、張資平等とロマンティズム文學を提唱し創造社に據りて、魯迅等の自然主義文學に挑戦す。後北伐に際し政治宣傳科長として活躍す。北伐以後左翼に轉じ、プロ文學のリーダー格となり、更に共產軍に入ったが、國民政府に逮捕令を發せられ、日本に亡命、且上海に歸へり

たるも再び彈壓を蒙り、日本に亡命し居りたるころ、中日事變起るや、中國に赴き抗日陣營に参加した。著書頗る多く其中有名なものに、「中國古代社會研究」「沫若小説戲曲集」「女神」「反正前後」「童年時代」等々がある。

茲に紹介するのは「宇宙風」に載りたる「北伐途次」の一文であり、北伐に参加せし時の一從軍日記である。

清早—早朝。

行營—出征中の軍營。

股長—隊長。

照例—例に照らせば、例によると。

鈔本—寫し本、謄本。

〔譯文〕

第二日目の早朝八時の頃、鄧主任は、歐生路の總司令部行營から後城馬路（大通）に來た。此は八時半には部務會議を一度開くことに決定してゐたからである。

部務會議列席の人は、各科の科長、係長及び秘書で、主席は即ち主任である。鄧主任の主席となる會議は、名目は會議であるが、例によれば一種の軍事的獨裁である。彼は前以つて自分の寫本上に幾つか

接着—つゞいて、引きつゞき。
遷過—移す。

偏重在……を特に重んずる。

步驟—順序、手段、手續。

遷徙—移る。「徙」も「うつる」の意です。

出於意料之外—思ひがけない、豫想外である。

無形中—無形の中に、表面に表はれずに。「無心中」（無意識に）と同じと見ない方が良いでしょう。

武漢三鎮—武昌・漢口・漢陽を合はせて、武漢或は武漢。

三鎮と言つてゐます。

靈便—便利なる。

靈便—便利なる。

の大綱を書き出し、つゞいて命令式に宣佈した。

彼が宣佈した命令は、政治部を武昌に遷し、舊省議會の中に駐割させ、以後の工作は農民運動方面に特に一方的に重きを注がんとするものだった。

この手續は本來なければならぬものであるが、全部を遷さんとするとは思ひがけなかつた。私の考は、依然として漢口を本部とし、武昌に支部を設立せんとするものだ。何故ならば漢口は潜在的に已に政治の中心となつて居り、而かも武漢三鎮の社會的中心であり、對内外的工作は皆此の地を便利とするからで、而かも政治部の工作は已に此の地で二箇月の基礎を有するに至つてゐるのであるから、完全に拋棄して、かの邊鄙なる、各種の工作技術の運用上にすべて不便な武昌に移すべきではないのだ。農民運動に重きを置く工作は漢口に於いてもなし得るし、武昌に一つの小規模な事務所を設ければ呼應することが出来るのである。

(二)

我把這層意思表示了出來，擇生反對着說，「目前的漢口雖然是政治的中心，但這是一時的現象。武昌已經攻破了，政治中心是要移到武昌。不久省政府，省黨部，都要次第移過去。還有是政治工作人員應該過艱苦的生活，久住在漢口是會墮落下去的。」

決議自然時照着他的意思，等待做着第四軍軍部的省議會空出之後便搬過江去，同時漢口的辦事處留下幾個庶務員看管，只當成一個購置物品的機關。

在會開完後擇生過江去了，我在那天下午得到空閑也渡過了江去。城裏的情形自然是還沒有恢復的，商家都閉着店門，居民都瘦削憔悴得像木乃伊。我的去向是往省議會，議會前面的廣場中停集着好些北軍的棺材，有些是南軍進城後才收殮了的。天氣還熱，棺材都是些菲薄的木板匣子，屍臭異常的熏人。

走進省議會時已經是快黑的時候了，四軍軍部正在搬家，我叩問了幾位負責的人，知道第二天上午便可以空出。政治部也就決定了在第二天搬來。

〔註釋〕

這層意思——この考。

次第地——次第に。

移過去——移つて行く。

會墜落下去——墜落して行くこともある。

照着——…に照して、…通りに。

等待——…を待つて、…してから。

軍部——軍司令部。

看管——見まはりをする。

過江去了——江を渡つて行つた。この場合は漢口から揚子

江を渡つて武昌に行つたの意。

瘦削憔悴——瘦せ細り憔悴せる。

去向は行き先。

棺材―棺桶。

收殮―死體を棺に入れる。

〔譯文〕

私は此の考を表明したが擇生は反對して言つた「目前の漢口は政治の中心ではあるが、これは一時的な現象である。武昌は已に攻め破つたのだから、政治の中心は武昌に移さねばならぬ。久しからずして省政府、省黨部は皆次第に移つて行かねばならぬ。それに、政治工作人員は艱苦な生活をなさねばならぬ。久しく漢口に居れば、墮落して行くことも考へ得る」

決議は勿論彼の考へ通りになり、第四軍の司令部になつてゐる省議事堂が空いたら、すぐ江を渡つて移つて行き、同時に漢口の事務所には幾人かの庶務員を殘留させ番をさせるが、たゞ一つの物品を購入する機關と成した。

會が閉會してから擇生は江を渡つて行つた。私はその日の午後閑を得たので江を渡つて出掛けた。城内の様子は勿論まだ恢復して居らず、商家は皆店の戸を下し、居民は皆瘦せ細り憔悴して木乃伊の様であつた。私の行き先は省議會で、議事堂前の廣場には、澤山な北軍の棺桶が安置されてゐたが、多くは南軍が入城して始めて入棺したものである。天氣はまだ熱く、棺は皆薄つぺらな板の箱で、屍臭が異常に人の鼻をついた。

省議事堂に入つた時は日は已に間もなく暮れなんとしてゐた頃だつた。第四軍の司令部は丁度引越を

菲薄―薄つぺらな。

木板匣子―木板の箱。

熏人―人を煙す。

してゐた。私は幾人かの責任ある者に尋ね、やつと明日午前空けられると言ふことを知つた。政治部もすぐに次の日引越して來ることに決定した。

(三)

那時被活捉着的劉玉春是關在省讀會的樓上的。一位副官把我引到那間房間裏去，那是在樓上第一排右側的第一間小房間，裏面是很黑洞洞的，只在一張桌上放着一盞馬燈。進門右側的角放着一張木板床，劉玉春面着壁捲臥在上面，有一個跟隨的人在服侍着他。引我進去的副官打了招呼，劉玉春起了床來，很客氣的請我坐。

劉很白晰而肥胖，足見他在四十天的圍城生活中是絲毫也沒有受苦的。他是一位中等身材的人。雖然在繯絏之中，大約也是狃於素來的威勢吧，態度很能鎮靜。

我在那時和他談過一席，話在第二天的「革命軍日報」上發表過。我開手恭維他，說他能忠於職守，能把一座孤城死守了四十天，是難得的事情。他也謙遜着，說他只是「一介的武弁」，只曉得服命上官的命令，上官要叫

他守城，他使守城罷了。

「但是，」我說，「你所服從的上官，吳大帥一從賀勝橋敗潰了下來，便渡過江跑回河南去了，而你一個人偏偏要來頂着擔子堅持，使武昌城內二十萬的居民，爲了你一個人受了四十天的水深火熱的痛苦。你們又在武勝門外放火，燒毀了無數個人家，使多數負郭的居民無家可歸，這無論怎樣，怕是該你負責的。」

「在軍事上是出於不得已，軍人是只曉得服從命令，只曉得打勝仗的。」他回答着。

〔註釋〕

活捉—活どりにする、捕虜にする。

房間—部屋。

第一排—第一番目のならび、第一列。

黑洞洞—暗くてガランとせる。

馬燈—カンテラ。

角土—隅。

木板床—板の寢臺。

捲臥—背を圓くして横臥する。

跟隨的人—つき従つてゐる者、附添人。

服侍—かしづく、仕へる。

打了招呼—聲をかける。

肥胖—肥滿せる、太つてゐる。

圍城生活—城を包圍されての生活。

中等身材—中肉中骨の者。

縲絏之中—牢獄の中。「縲」は「とり纏」「絏」は「繋ぎ纏」

狂於……に慣れる。

鎮靜―落ちつける。

恭維―はめる、おべつかを言ふ。

忠於職守―職務に忠實である。

難得の事情―得難いこと、稀有なこと。

武井―武人。

吳大帥―吳佩孚將軍。

一從……一度……してより。

偏偏―わざわざ。

〔譯文〕

その時捕虜にせられた劉玉春は省議事堂の樓上に監禁してあつた。一人の副官は私をその部屋へ案内した。それは樓上の第一列右側の一番目の小さな部屋で、中は暗くてガランとして、たゞ一つのテーブルの上に一つのカンテラが置かれてあつた。入口を入つて右側の隅に一張りの木の寢臺がおいてあり、劉玉春は壁に面して其上に圓くなつて横臥して、一人の附添人が彼に仕へてゐた。私を案内し入れた副官が壁をかけると、劉玉春はベットから起き上り、非常に呻に私にかける様子ゝめた。

劉は非常に白い面で肥満してゐた。これで彼は四十日の城を圍まれた生活中にも、毫も苦痛を受けて居らぬことが分かる。彼は中肉中脊であつた。囚はれの身となつてゐるけれども、大方今までの威勢に

頂着擔子―荷をかついで、重荷をかついで。
堅持―頑張る。

水深火熱……塗炭の苦痛。「水深火熱」は孟子に「如水益深如火益熱」とあるところから出たのだらう。

負郭的居民―城下並に其の近在の居民。「負郭」とは「城郭附近」を言ひます。

無論怎樣―如何あらうとも。

該你負責―君が責任を負ふべきです。

打勝仗―勝戦をする。

慣れてゐるのだらう、彼の態度は非常に落つきはらつてゐた。

私はその時話をした一席の言は、次の日の「革命軍日報」上に發表したことがあつた。私は最初彼の氣を良くする言葉を使つて、彼は職務に忠實であり、一座の孤城を四十日も死守したのは稀有の事だと言つた。

彼も謙遜して、自分は只の武人にしかすぎない。たゞ上官の命令に服従するを知つて居るのみで、上官が自分に城を守らせたから、自分は城を守つたまでのことだと言つた。

「だが」私は言つた「君の服従してゐる上官吳佩孚大元帥は、賀勝橋で敗戦崩潰して了つてからは、直ちに楊子江を渡つて河南に逃げ戻つて了つた。然るに君一人は態々重荷を背負つて頑張り、武昌城内二十萬の居民をして、君一人のために、四十日間の塗炭の苦しみを受けさせた。君たちは又武勝門外に放火して多くの人家を焼き拂つて、多數の城内外の居民をして歸へる家を無からしめた。これはどうあらうと、君が責任を負ふべきである」

「軍事上に於いて已むを得ざるに出たので、軍人はたゞ服従のみ知るだけである。たゞ戦ひで勝つを知るのみである」彼は答へて居た。

(四)

「你這樣的話，」我又說，「怕不見得是出於本心。軍人的天職是在保衛

人民的，所該服從的命令是保衛人民的命令，要打勝仗也是爲的人民；不是專爲某一個人效奔走犬馬之勞，不是爲要保全一二人的身家性命而屠民以逞的。我敢於替你把本心的話說出來罷，你是相信着吳大帥會捲土重來；吳大帥一時是決不會崩潰。所以你能多支持得一天，你的功勞便很大，你是多有一重犒賞的。」

「我是決沒有那樣的心事，我可以對天地神明發誓！」他搶着話頭來辯駁。『你不用掩飾罷，』我說，『這種想頭是誰也應該有的，你我也並不是聖人。不過就是爲了你這一念，武昌城內外的居民，你想，是怎樣地受了災難？』

他沉默了下來，隔了一會又再說時，聲音愈見和軟了。

「我們軍人的腦筋很簡單，」他說，「我們沒有深刻的心思。」

照那語氣上看來，似乎有悔恨的意思在他的腦中盤旋。我最後又問到他的家族。他說，他最墨念的是有一位八十多歲的老母親。萬一國民軍的長官肯鑒諒他，使他能够保全生命，回家奉養，他以後決不再做軍人，他要做一名馴良的老百姓。

和他談了一席話，覺得他很真率，似乎並沒有什麼矯詐的地方，在舊軍人中的確要算是很難得的一個人物。他在我的談話中似乎也感受了好些慰藉，當我把話說完了和他拉手告別的時候，他很和藹的對我說，他希望能夠和我再見。他說他自從失掉了自由以來，來和他談話的人都好像法官拷問囚犯一樣，沒有人像我這樣的和氣。

和劉玉春一別之後，在第二年的夏天他終竟恢復了自由。那時張發奎在做第四集團軍的總指揮，我在做黨代表，我們在做督軍署的總指揮部中還見過一次面；他還記得我，同時也還記得我們那一次談話。但他後來的情形是怎樣，是不是做了「一名馴良的老百姓」我是不知道的。

〔註釋〕

不見得——見るを得ない、……とは思はれない。

保衛——保ち護る。

効——之勞——の勞をつくす、……の勞をとる。

身家性命——身一家生命。

屠民以逞——民を犠牲にして自分の利を貪る。「殘民以逞」

とも言ひます。

犒賞——慰勞の賞。

心事——考、心の中に秘めたること。

發誓——誓をたてる。

搶着話頭——話の緒をひつたくつて、言葉を遮へざる様にして。

掩飾——かくしかざる。

想頭——考、思ひ。

隔了一會―暫くおいて。

愈見―愈々、ますます。

和軟―穏かにして物柔かい。

腦筋簡單―頭が簡單である。

盤旋―ぐるぐるめぐる、旋廻する。

聖念―心配する、氣にかゝる。

奉養―扶養する。

【譯文】

「君のこの様な話は」と私は又言つた。「恐らく本心から出てゐるとは思はれない。軍人の天職は人民を保護するに在り、服従すべき命令は人民を保護するの命令である。勝戦をしようとするのも人民のためなのであつて、専ら某一個人のために奔走犬馬の勞を效すものでもなければ、一二の人の一身一家生命を保全せんために民を犠牲にして自己の利を貪るためのもでもないのである。私は敢へて君に代つて君の本心の言葉を吐いてやらう。君は呉將軍が捲土重來するであらう、呉將軍は一寸は決して崩潰する様なことはないと思つてゐたのだ。だから君が一日餘計に支持し得れば、君の効勞は非常に大きくなり、君は餘計に重い賞に與かれるのだ」

「私は決してそんな考へはない。私は天地神明に誓を立てることが出来る」
彼は言葉を遮ぎる様にして反駁した。

馴良的老百姓―姓順にして善良なる人民。

眞率―眞實味あり率直なる。

矯詐―高ぶり詐はる。

拉手―握手をする。

失掉―失つて了ふ。

終竟―終に。

「君はかくしかざるに及ばん」私は言った。「こんな考は誰だつて持つ筈だ。君も僕も決して聖人ではな
く。たゞ君の此の一念のために、武昌城内外の居民は、君考へて見よ、どんなに災難を受けたかを」

彼は沈黙して了つた。しばらくして又言ひ出した。時には、彼の聲は益々物柔かになつてきた。

「我々軍人の頭は簡單で」彼は言った。「我々には深刻な考へはないのです」

その語氣から見ると、何だか悔恨の意が脳裡を旋廻してゐる如く思はれた。

私は最後に又彼の家族について尋ねた。彼は自分の最も氣にかゝるのは、八十餘歳の老いたる母であ
り、萬一にも國民軍の長官が自分を諒承してくれ、彼をして生命を全ふさせ、家に歸つて扶養させて下
さるなら、以後は決して再び軍人にはならず、一人の從順善良なる人民になる心算だと言つた。

彼と一席話をして、彼は非常に眞實味のある率直な、少しも何の矯りも詐りの點もない、舊軍人中で
は、確かに非常に得難い人物であると感じた。彼は私との談話中に、多くの慰藉を感じ受けたる如く、
私が話が終つて彼と握手して別れを告げた時、彼は非常に人なつくく私に、自分はあなたと再會出來得
ることを希望しますと言つた。彼は、「自分が自由を失つてからは、來て私と話をする人は皆丁度法官が
囚人を拷問する如きであつて、あなたの様にこんなに穩かのはありません」と言つた。

劉玉春と一別して後、次の年の夏彼は終に自由を恢復した。其の時張發奎は第四集團軍の總指揮にな
つて居り、私は黨代表をして居り、我々は舊督軍署の總指揮部中で尙ほ一度顔を合はせたことがあつた。
彼は尙ほ私を覚えてゐたし、同時に我々のあの時の談話も覚えてゐた。だが彼は其後はどうしたか、一
人の從順にして善良なる人民」になつたかどうかは私は知らない。

第二十五課 駱駝祥子

老

舍

(一)

個別的解決，祥子沒那麼聰明。全盤的清算，他沒那個魄力。於是，一點兒辦法沒有。整天際圈着滿肚子委屈。正和一切的生命同樣，受了損害之後，無可如何的只想由自己去收拾殘局。那門落了大腿的蟋蟀，還想用那些小腿兒爬。祥子沒有一定的主意，只想慢慢的一天天，一件件的挨過去，爬到哪兒算哪兒，根本不想往起跳了。

離廿七還有十多天，他完全注意到這一天上去，心裏想的，口中念道的，夢中夢見的，全是廿七。彷彿一過了廿七，他就有了解決一切的辦法，雖然明知這是欺騙自己。有時候他也往遠處想，譬如拿着手裏的幾十塊錢到天津去；到了那裏，碰巧還許改了行，不再拉車。虎妞還能追到他天津去？在他的心裏，凡是坐火車去的地方必是很遠，無論怎樣她也追不了

去。想得很好，可是他自己良心上知道這只是萬不得已的辦法，再分能在北平，還是在北平！這樣一來，他就又想到廿七那一天，還是這樣想，近便省事，只要混過這一關，就許可以全局不動而把事兒闖過去；即使不能乾脆的都擺脫清楚，到底過了一關是一關。

〔註釋〕

老舍——現在の支那文壇に此の作者ほど特異な存在はない。

それは彼の驅使する言語、作風、取材凡ゆる點から言はれる。支那現代作家の大部分は南方人であるが、彼は北方人で純粹なる北京語を縱横に驅使して主として

京津間の事情を描寫し、又好んで華僑にも取材する。文體輕妙ユーモアに富み、其の中に藏されてゐる人生

に對する辛辣な批判的觀察、さては人情味豊かな筆致は讀者をして一讀卷を措く能はざらじめる。著書多く

其中「老張の哲學」「趙子曰」「二馬」「樓海集」

「小坡の生日」「哈藻集」「牛天賜傳」「駱駝祥子」な

どは有名である。此の文は「駱駝祥子」の「丁部」であつて、「祥子」なる車夫が「駱駝」なる異名をつけられた後、

車賃貸屋（人和廠子）の虎妞に惚れられ逃げ出したが、

主人に預けた金も斷念出來ず、それに虎妞も後を追つて來さうなめで、小心者の彼は全く進退に窮してゐるところである。

整天際——一日中、終日。「整天家」「整天價」に同じです。

鬨着——廻りつゝある。

滿肚子——腹一杯の。

委屈——無念、不平。

由自己去———自分の手で……。

殘局———碁綻。

鬨落———鬨つて落す。

綽號———こぼろき。

挨過去———無理にすこす、氣持を抑へてすこす。

爬到那兒……どこまで這ひ上つたらそこで終りにする、
行つたところでやめにする、行きつける所まで行くこ
とにする。

根本不想……根本から……とは思はぬ、全く……と思はぬ。

往起跳——高く跳れる、飛躍する。

念道——聲を出して言ふ。

碰巧——間がよま、うまい工合に。

還許……まだ……し得る。「許」は軽い「能」の意。

改了行——商賣替をする。

再分能……この上一寸でも……出来るなら、

這樣——來——こうなつて來ると。

〔譯文〕

個別的な解決、祥子にはそんな聰明さはない。全盤的な清算、彼にはそんな魄力はない。そこでどう
することも出来なくなり、終日腹一杯に無念さが渦巻いてゐた。丁度すべての生命が損害を受けた後は、
如何ともすべくなくも只嘗ら自分で破綻を拾取せんと欲すると同じだ。かの争つて大きな脚を落した蠅
は、尙ほかの小さな脚で這はんとする、祥子は一定の考へがなく、たゞゆつくりと一日々々、一つく
何とかすこし、行き當りばつたりで、全く飛躍して見ようなどは考へない。

近便省事——手取り早く便利で面倒でない。
混過……を何とかしてすこす、……をいゝ加減にすこ
す。

不動而把事兒——そのまゝそつくり、一つの破綻も來さず
に。

闖過去——突き進んで行く。

即使——假令。

乾脆的——きれいきつぱりと。

擺脫清楚——きれいにぬけ出す、きれいに縁をきる。

到底——結局、やつぱり。

二十七日までまだ十幾日あるが、彼は完全にこの一日に注意して、口で言ふことも夢に見ることとも、すべてが二十七日で、恰も二十七日がすぎれば、彼は一切を解決する方法が出て来る如きであつた。此れは自分を欺いてゐるのだとは明かに知つてはゐたが、時には、彼は遠くの見方を考へた。例へば、手中の幾十圓かの金をもつて天津に行くのだ。そこへつけば、うまく行くとまだ商賣替が出来て再び車を引かなくなれる、虎妞はそれでも天津まで追つて来るだらうか。彼の考へでは、汽車に乗つて行く地方は必ず逆も遠く、どうしたつて彼女は追かけては來られぬと思つてゐるのだ。とても良い考だ。だが自分の良心上では、此れは萬已むを得ざるの方法で、まだ少しでも北京に居られるなら矢張り北京に居るのだと言ふことを知つてゐるのだ。こうなつて來ると、彼はすぐに又二十七日と言ふ日に想到した。矢張りこう考へる方が手取り早くて面倒でないのだ。この一つの難關さへ、越せば全體はそのまゝそつくりつき抜けられるかも知れない。假令さつぱりときれいに縁切りは出來なくても、結局のところ一難關を越したことは事實なのだ。

(二)

怎樣混過這一關呢？他有兩個主意：一個是不理她那回事，乾脆不去拜壽。另一個是按照她所囑咐的去辦。這兩個主意雖然不同，可是結果一樣：不去呢，她必不會善罷甘休；去呢，她也不會饒了他。他還記得初拉車

的時候，摹仿着別人，見小巷就鑽，爲是抄點近兒，而誤入了羅圈胡同；繞了個圈兒，又繞回到原處。現在他又入了這樣的小胡同；彷彿是；無論走哪一頭兒，結果是一樣的。

在沒辦法之中，他試着往好裏想，就乾脆耍了她，又有什麼不可以呢？可是，無論從哪方面想，他都覺着驚氣。想想她的模樣，他只能搖頭。不管模樣吧，想想她的行爲；哼！就憑自己這樣要強，這樣規矩，而要那麼個破貨，他不能再見人，連死後都沒臉見父母！誰準知道她肚子裏的小孩是他的不是呢！不錯，她會帶過幾輛車來；能保準嗎？劉四爺並非是好惹的人！即使一切順利，他也受不了，他能幹得過虎妞？她只須伸出個小指，就能把他支使的頭暈眼花，不認識了東西南北。他曉得她的厲害！要成家，根本不能耍她，沒有別的可說的！耍了她，便沒了他，而他又不是看不起自己的人！沒辦法！

沒方法處置她，他轉過來恨自己，很想脆脆的抽自己幾個嘴巴子。可是，說真的，自己並沒有什麼過錯。一切都是她佈置好的，單等他來上套兒。

毛病似乎是在他太老實，老實就必定吃虧，沒有情理可講！

〔註釋〕

不理—かまはぬ、相手にしない。

拜壽—誕生祝をする、人の誕生を祝賀す。

另一個—別の一つ。

善罷甘休—そのまゝにすます。

小巷—小さな通り。

抄點近兒—少し近道をする。

羅圈胡同—迷路になつてゐる横町。

繞了個圈兒—一廻りする。

那一頭兒—どの方向、どの道。

往好裡想—良い方に考へる。

誤了她—彼女を貫つて了ふ。

鬱氣—心の晴々せぬ、氣が腐る。「鬱氣」に同じです。

模樣—容貌。

就憑—假令…でも。

要强—向上する、努力する。

第二十五課 駝駱祥子

規矩—眞面目なる、きちんとしてゐる。

破貨—やくざ者。

保準—保證する。

並非是—決して…でない。

好惹人—相手にしよい人間。

一切順利—すべて順調に行く。

幹得過—馱し得る、相手にし得る。

只須—たゞ…しさえすれば。「只要」に同じ。

支使—指圖する、使ふ。

頭暈眼花—頭はくらみ眼はかすむ。

成家—家庭をもつ。

看不起—輕蔑する、見下げる。

轉過來—轉じて來る、戻つて來る。

抽嘴巴子—頬をなぐる、ビンタをくれる。

佈置好的—ちやんとし組んだもの。

單等—ただ…を待つ、…のみを待つ。

上套兒—わなにかゝる、ペテンにかゝる。「上當」に同じです。

〔譯文〕

どうしてこの難關をすごさうか。彼には二つの考がある。一つは彼女の事をかまはずに、いつそのこと誕生祝に行かないことだ。他の一つは、彼女が言ひつけた通りにやることだ。この二つの考は異つてはゐるが、結果は同じだ。行かなければ、彼女は必づそのまゝすますとはしないだらう。行けば、彼女は彼を恕しはしないだらう。彼はまだ車を引き始めた頃、人の眞似をして、小さな通りを見ると入り込んで行き、少し近道をしてやらうとして、迷路になつてゐる横町に入り、ぐるりと廻ると、もとの所へ廻つてゐることがあつたのを覚えてゐる。

今彼はこの様な小さな横町に入つたのだ。どうも、どの方を歩いて見たところ結果は同じなのだ。

方法のない中に、彼はよい方に考へて見ようとした。思ひきつて彼女を貰つて了つたところ何のいけないことがあらうか。だがどの方面から構へても、彼は氣が腐つて了つた。彼の顔かたちを思つては彼はたゞ頭を振るだけだ。顔かたちは管はぬとして、彼の行を考へて見よう。ウン、自分はこんなに努力し、こんなにきちんとしてゐても、あんなロクでなしを娶つたのでは、死後さへも父母に合はせる顔がない。彼女の肚の中の子供が彼のか否をか誰がはつきり知つてゐようか。さうか、彼女は、輦臺の車をもつて来るかも知れない。でも保證出來ようか、劉四爺は決して相手にし、良い奴ではない。假令萬事が順調に行つても、彼はやりきれない。彼は虎妞を馱し得るだらうか。彼女は小指を出すだけで、彼を頭は昏み眼はかすみ、東西南北を分からなくする位使ふことが出来るのだ。彼は彼女の姿を知つてゐる

若し家庭を持たうとするならば、根本的に彼女を貰つてはいけないのだ。外に言ふべきことはないだ。彼女を貰へば、自分がなくなるのだ。而かも彼は自分を輕蔑する人ではないのだ。方法はないのだ。

彼女を處置する方法がなく、彼は轉じて自分を恨んで、痛快に自分の頬を五つ六つなぐりたくなつた。だが、眞實を言へば、自分には決して何の誤もないのだ。一切は皆彼女がちゃんと配置して、たゞ彼が來てベテンにかゝるのを待つてゐただのだ。缺點は彼が餘りにも大人しいところに在る様である。大人しうに必づ損をし、言ひ尋る青理もないのだ。

(三)

更讓他難過的是沒地方去訴訴委屈。他沒有父母兄弟，沒有朋友。平日，他覺得自己是頭頂着天，脚踩着地，無牽無累的一條奴漢。現在，他纔明白過來，悔悟過來，人是不能獨自活着的。特別是對那些同行的，現在都似乎有點可愛。假若他平日交下幾個——他想——像他自己一樣的大漢，再多有個虎妞，他也不怕；他們會給他出主意，會替他拔劍賣力氣。可是，他始終是一個人；臨時想抓朋友是不大容易的！他感到一點向來沒有過的恐懼。照這麼下去，誰也會欺侮他；獨自一個是頂不住天的！

〔註釋〕

訴訴委屈—無念さを訴へる。

頭頂着天—頭には天を頂く。

脚踩着地—脚は地を踏む。「頭頂着天」「脚踩着地」の二

つで「頂天立地」と同じく非常に自由なるを言ひます。

無牽無繫—かゝはりもひつかゝりもない、何の係累もな

い。

一條大漢—一人の大的男。

明白過來—分かつて來た。

醒悟過來—後悔し悟つて來た。

同行的—同業者。

交下—交つておろく、交を結んでおろく。

有個虎妞—虎妞の如きものが居る。固有名詞に「個」のつ

〔譯文〕

更に彼を辛くさせたことは、無念を訴へに行く所のないことだ。彼は父母、兄弟もなく、友達もない。普通、彼は、自分は頭には天を頂き、足は地を踏みつけた、何の束縛のない一人の男だと思つた。今や彼はやつと分かつて來た、後悔し悟つて來た、人は獨りでは生きて居られぬのだと。特にかの同業者の者

いた時は注意を要します。

出主意—考を出す。

拔削—苦しみを除く。

賣力氣—勞動する、骨折る。

始終—いつも。

抓朋友—友達をつくる、友をみつける。

沒有過的—今までもつたことのない。

照這麼下去—この様にして行くと。

欺侮—馬鹿にする。

獨自一個—自分一人、獨り。

頂不住天—天を支へきれぬ、大手を振つて生きて行きま

れぬ。

には、今は何だか一寸愛しい様に思はれた。若しも、彼が平日幾人かの——彼は考へた——自分と同じ様な大の男と交際しておいたら、更に多くの虎妞の如きものが居ても怖くはないのだ。彼等は自分に考を出して呉れるだらう。彼に苦勞を取去り力を提供してくれるだらう。だが、彼はいつも一人の者だつた。今となつて友達を抓へようとするのは餘り容易ではないのだ。彼は些か今まで持つたことのない恐怖を感じるに至つた。こんなにして行つたら、誰だつて彼を馬鹿にするであらう。自分一人では世の中には住みつけぬのだ。

第二十六課

喫茶

周 作 人

(一)

前回徐志摩先生在平民中學講「喫茶，」——並不是胡適之先生所說的「喫講茶，」——我沒有工夫去聽，又可惜沒有見到他精心構的講稿，但我推想他是在講日本的「茶道，」（英文譯作Teism）而且一定說得很好。茶道的意思，用平凡的話來說，可以稱作「忙裏偷閒苦中作樂，」在不完全的現世享樂一點美與和諧，在剎那間體會永久，是日本之「象徵的文化」

裏の一種代表藝術。關於這一件事，徐先生一定已有透澈巧妙的解說，不必再來多嘴，我現在所想說的，只是我個人的很平常的喝茶觀罷了。

〔註釋〕

周作人——一八八五年浙江省紹興府に生る。仲密、知道と

號す。魯迅の弟である。日本立教大學に留學、往時北京

に於いて魯迅等と共に文學研究會を組織し、自然主義

文學運動に活躍せるは有名なることなり。現に燕京大

學、北京大學教授たり。隨筆をよくし、當代支那に於

いては氏の右に出ずるものなしと言はる。又日本文化

の研究者にして、日本文化を取扱たる文多し。著書に

「雨天的書」「談虎集」「自己的園地」「夜讀集」「知

堂文集」「看雲集」「苦茶隨筆」等々頗る多く、この外

に世界各國文學の翻譯多し。

徐忠摩——有名な詩人である。一九三一年不慮の死をとぐ、

〔譯文〕

喫 茶

前同、徐志摩先生は平民中學に於いて「喫茶」——

此は決して胡適之先生の言ふ、茶屋にて裁判茶を

良、友文學叢書に遺稿の一部があり。

喫講茶——父老先輩の立合の下に茶館に講議し是非曲直を

つける、一種の民間裁判。

精心結構——精進してつくりあげる、銳意つくりあげる、

苦心作成する。

忙裏偷閑——忙中閑をぬすみ、苦しい中に楽しみをな

す。

和諧——やほらぎ、調和。

體會——會得する。

關於——に關しては。

多嘴——餘計なことを言ふ、口出しをする、饒舌する。

のむことではない——を講じたが、私は行つてきく閑もなく、その上惜しいことには、徐志摩先生が苦心して作り上げた講演の原稿を見てゐない。だが、私は、彼は日本の「茶道」(英語では *Teaism*) を話してゐたので、且つ必づ非常にうまく話をしたと推測してゐる。茶道の意義は、平凡なる言語で言ふなら「忙中閑を偷み、苦中樂をなす」と言ふことが出来よう。不完全な現世にあつて些かの美と、やはりを享樂し、刹那間に於いて永久を會得する。これは日本の「象徴的文化」中の一種の代表藝術である。この二つのことに關し、徐先生から必づや已に透徹巧妙なる解説があり、たることでせうから、更に駄辨をなす必要はないのでありますが、私が今言はんとしてゐることは、たゞ私個人の非常に平凡なる茶飲み觀にすぎないのです。

(二)

喝茶以綠茶爲正宗。紅茶已絕沒有甚麼意味，何況又加糖——與牛奶
葛辛 (George Gissing) 的草堂隨筆 (原名 *Private Papers of Henry Pycroft*) 確是
很有趣味的書，但冬之卷裏說及飲茶，以爲英國家庭裏下午的紅茶與黃油
麵包，是一日中最大的樂事，支那飲茶已歷千百年，未必能領略此種樂趣
與實益的萬分之一，則我殊不以爲然。紅茶帶「土斯」未始不可喫，但這
只是當飯，在肚飢時食之而已我的所謂喝茶，却是在喝清茶，在賞鑒其色

與香興味、意未必在止渴、自然更不在果腹了、中國古昔曾喫過煎茶及抹茶。現在所用的都是泡茶、岡倉覺三在茶之書(Book of Tea 1919)裏很巧妙的稱之曰「自然主義的茶、」所以我們所重的即在這自然之妙味。

〔註釋〕

何況又—況や、其上…するに於いておや。

加糖—砂糖を加へる、砂糖を入れる。

牛奶—牛乳。

説及…に言及する、…に言ひ及び。

黄油麵包—バターtoast。

領略—會得する、知る、味得する。

殊—眞に。

不以爲然—さうであるとは思はぬ。

士斯—トースト。

未始不可…全く…してはいけないのではない。

當飯—飯にする、飯代りにする。

意未必在…其の目的は必づしも…にあるとは限らぬ。

果腹—腹の足しにする。

清茶—純粹な茶。(種々なるものを入れない)

泡茶—湯に入れて出す茶。

〔據文〕

喫茶は綠茶を以つて正統とする。紅茶には已に全く何の意味もない。況や砂糖牛乳を加へたりするに於いては尙更である。デオチー・ギツシングの草堂隨筆(原名Private Papers of Henry Dyceroff)は確かに非常に面白い書であるが、冬の巻の中で、茶を飲むことに言及してゐるが、英國の家庭の午後の紅茶とバターtoastは、一日中で一番大きな楽しみであり、支那の茶を飲むことは已に千百年を経たが、

まだ必づしも此の種の楽しみと實益の萬分の一を味得してゐるとは限らぬと考へるなら、私は眞にさうでないと思ふ。紅茶にトーストをつけたのは、さらに食べるべきでないと言ふのではなく、たゞ此は飯代りとし、腹の空いてゐる時に食べるだけである。私の所謂茶をのむと言ふのは、純粹な茶を飲むことにあり、其色と香と味とを鑒賞するにあり、目的は必づしも渴を止めるにあるのではなく、勿論更に腹の足しにするに在るのではない。中國では昔煎茶抹茶をのんだことがあつたが、今飲むのは皆泡茶（先に茶碗に茶を入れ後湯を入れ喫す）である。岡倉覺三の茶之書（Book of Tea 1919）の中では非常に巧妙に之を「自然主義的茶」と言つてゐる。故に我々の重んずる所は即ち自然の妙味にあるのである。

(三)

中國人上茶館，左一碗右一碗的喝了半天，好像是剛從沙漠裏回來的樣子，頗合於我的喝茶的意思（聽說閩粵有所謂喫工夫茶者自然更有道理。）只可惜近來太是洋場化，失了本意，其結果成爲飯館子之流。只在鄉村間還保有一點古風，唯是屋宇器具簡陋萬分，或者但可稱爲頗有喝茶之意，而未可許爲已得喝茶之道也。

喝茶當於瓦屋紙窗下，清泉綠茶，用素雅的陶瓷茶具，同二三人共飲，得半日之閒，可抵十年的塵夢。喝茶之後，再去繼續各人的勝業，無論爲

名爲利・都無不可，但偶然的片刻優游乃正亦斷不可少。中國喝茶時多喫瓜子，我覺得不很適宜；喝茶時可喫的東西應當是輕淡的『茶食』中國的茶食却變了滿漢饅饅其性質與『窩窩頭』相差無幾，不是喝茶時所食的東西了。

註釋

上茶館—喫茶店に入る。

左—碗右—碗—一碗一磁と何杯ものむ。

閩—福建省の別名。

粵—廣東省の別名。

工夫茶—時間をかけゆつくりのむ茶。

洋場化—西洋化する。

飯館子—料理店。

簡陋萬分—極めて簡單粗末なる。

但可稱爲—たゞ…なりと稱し得る。

紙窗—障子。

素雅—簡素の中に雅のある。

可抵—…に相當し得る、…に匹敵し得る。

塵夢—浮世に於ける夢。

勝業—佛語で善き果報を望む、心口意の三業を言ひます。

が、茲では「仕事」位の意です。「修勝業」で「なりはひ

をなす」の意になります。

片刻優游—ほんの暫くの自適、短時間の憩。

瓜子—西瓜の種を煎り薄く味をつけたもの。

茶食—お茶うけ。

饅饅—うどん粉をこね蒸して作れる一種の菓子。

窩窩頭—玉蜀黍や豆の粉をこねて饅頭の如くしたもの。

相差無幾—相異なること幾もなし。大した違はない。

譯文

中國人は茶館に上ると、次から次へと何杯も長い間飲み、丁度沙漠から歸つて來たばかりの様であるが、これは頗る私の茶を飲む意義に合する（きくところでは、福建、廣東には悠くり茶を飲むことがあるさうだ。勿論更に道理に叶つてゐる）だが惜しいことには近頃は餘りにも西洋化して、本意を失つて了び、其結果料理店流になつて了つてゐる。たゞ鄉村間には尙ほ些かの古風を存してゐる。然し家や器具が、簡單粗末この上なく、或はたゞ茶を飲むの意は頗る存すと稱し得るだけで、必づしも已に茶を飲むの道を得てゐるとはなし得ないかも知れぬ。

茶を飲むのは、瓦の家障子の窓の下に於いてなすべきで、清い泉、緑茶を簡素の中に雅美なる陶器の茶具を使つて、二三人と共に飲み、半日の閑時を得ば、十年の俗世の夢にも匹敵する。茶を飲んだ後、更につゞけて各人の仕事をなす、それは名譽のためたと利益のためたとを問はず、皆差支へはないのであるが、偶然に僅かなる時間の憩も正に缺くことは出来ないものである。中國では茶を飲むときは多く西瓜の種を食べるが、私は餘り適當でないと思ふ。茶を飲むとき食べるものは、軽い味のうすい「茶うけ」でなければならぬ。中國の茶うけは滿漢饅々に變り、其性質は高々頭と幾ばくも差がなく、茶を飲む時に食べるものではない。

第二十七課 說肥瘦長短之類

郁 達 夫

(一)

人體的肥瘦長短，照中國歷來的審美標準來看，似乎總是瘦長的比肥短的美些。從古形容美人，總以長身玉立的四字爲老調，而「嫫母倭傀，善譽者不能掩其醜」，也是大家所熟知的典故。按常理來說，大約瘦者必長，肥者必倭，但人身不同，各如其面，肥瘦長短的組合配分，却不能像算術上的組合法那麼簡單。所以同外國文中不規則動詞的變化一樣，瘦而短，肥且長的陰性陽性，美婦醜男，竟可以有，也竟可以變得非常普通。

若把肥瘦長短分開來說，則燕瘦環肥，各臻其美，堯長舜短，同是聖人；倘說唐明王是懂得近世擇美人魚的心理的人，則不該賚送珍珠，慰她寂寞。倘說人長者心美，短者必醜，則堯之子何以不肖，而娥皇女英又如何肯共嫁一人。

〔註釋〕

郁達夫一名は文、一八九六年浙江省富陽縣に生れ、我國に留學、一高、東大經濟學部を卒業、一九二二年歸國し、文學生活に入り、郭沫若等と創造社を創り、北京、武昌、中山等の大學教授たり。作品多く「沈淪」は留學中の作にして、其後「蕩蘿集」「秋柳」「零餘者」「達夫全集」あり隨筆をよし「閑書」がある。本文は「閑書」中の一つである。

照：來看―に照らして見る、…によつて見る。

似乎―…の縁である。

總是―いつも、どう見ても。

老調―きまり調子、定り文句。

嬪母―武帝の第四妃。背が低く醜くかつたと言はれてゐる。

〔譯文〕

肥瘦長短の類を説く

人體の肥瘦長短は、中國從來の審美標準に照らして見ると、どうも瘦せて背の高い方が肥えて低いのが上手な者。

典故―故事。

按常理來說―普通の理から言ふ。

大約―大體。

燕瘦環肥―燕は瘦せ環は肥えたり。燕は漢の成帝の后趙

飛燕で、環は唐の玄宗の妃楊玉環（楊貴妃）で肥えた程

度瘦せたる程度の美に叶つたことを意味します。

堯長舜短―堯は背が高く舜は短かかつた。

唐明王―唐の玄宗皇帝。

擇美人魚―美人魚（裸高の美人）を選ぶ。

寶送―送り賜はる。「寶」は「たまはる」の意。

娥皇―堯の娘で舜に嫁した。

女英―堯の娘で舜に嫁した。

より幾分美しいとされてゐる様である。古より美人を形容するには、常に長身玉立の四字を以つてするのが定り文句となつて居、又「嬪母は矮醜ニシテ、善ク譽ムル者モ其醜ヲ掩フ能ヘズ」と言ふのも、皆の知つてゐる故事である。常識から言ふと、大體瘦せた者は必ず背が高く、太つたものは必ず低いのだが、人間の身體が異つてゐるのは、各々其顔つきの様なもので、肥瘦長短の組合はせ配分は、算術上の組合はせ法の如くさう簡單には行かぬのである。故に外國語の不規則動詞の變化の如く、瘦せて低い、肥えて高いの陰性陽性、美女醜男もあることになり、其變化のし方も極めて普通であり得るのである。

●若しも肥瘦長短を分けて言ふならば、燕の瘦せたる、環の肥えたるはいづれもその美をなして居り、堯は高く、舜は低かつたが、共に聖人である。若しも唐の明王が、現代の裸體美人を選らぶ心理を知つてゐる人ならば珍珠を送つて彼女の寂しさを慰める様なことはしなかつたらう。若しも高い人は心美しく、短い人は心醜しと言ふならば、堯の子は何故不肖であつたのだらうか。それから娥皇女英は又どうしても一緒に一人(舜)に嫁ぐ氣になつたのだらうか。

(二)

關於肥瘦。若將美的觀點撇開，從道義人品來立論，則肥者可該倒霉了。嗜食者不肥體，是管子的金言；子貢淫思七日，不寢不食，以至骨立，的

是聖門弟子的行爲。飯顆山頭逢杜甫，他老人家只爲了忠君愛國，弄得骨瘦如柴。桓溫之孽子桓元，重兼常兒，抱輒易人，終成了篡位的奸臣。被人殺戮；叔魚之母，見了她兒子的鶯肩牛腹，嘆曰，豁顰可盈，是不可鑿也，必以賄死，遂勿視。凡此種種，都是說肥者壞，瘦者好的史實，而韓休爲宰相，弄得唐玄宗不敢小有過差，只能也強說一句吾貌雖瘦，天下則肥的硬好漢語來解嘲，尤其是有名的故事。

反過來從長短來說，中國歷史裏，似乎是特別以贊揚矮子的記錄爲多。第一，有名的大政治家矮的却占了不少，周公伊尹，全是矮子，晏子長不滿六尺，而身相齊國，名顯諸侯。孟嘗君乃眇小丈夫，淳于髡亦爲人甚小。其他如能令公喜公怒的短主薄王珣，磨穿鐵硯賦日出扶桑的半人桑維翰等，都係以矮而出名者，比起長大人來（當然也是很多），短少人決不會有遜色。武人若伍子胥，若韓王信輩，都係長人，該沒有矮子的分了；而專諸郭解，相傳亦是矮人。

看了這些廢話，大家怕要疑我在贊成瘦子矮子了，但鄙意却沒有這樣簡單。對於美人，我當然也是個摩登的男子，「軟玉溫香抱滿懷」，豈不是

最快活也、沒有的事情？至於政治家呢，我覺得短小精悍的拿破崙，究竟要比自己瘦長因而衛兵也只想挑長大的普國弗列特克大王好得多。若鳥喙長頸的腎水之精（子華子），大口鳶肩的東方之士（淮南子）能否與大王弗列特克比肩，當然又是另一問題。

〔註釋〕

撒開——さしおく、別けはなす。

倒毒——運が悪い。

些食者——食を嗜む者は肥體ならず。

浮思——みだり考へる、思考に溺れる。

以致——…のために…になる。

骨立——骨が立つてゐる様に瘦せる。

的——確かに。

飯類山頭——李白の詩で、飯類山頭逢杜甫、頭戴笠子日

卓午、借問別來太瘦生、總爲從前做詩苦の一部です。

他老人家——彼の老人。

弄得——…となる、まで…せり。

骨瘦如柴——柴の如く瘦せこけた、すつかり瘦せて了つた。

桓溫——晋の權臣。

孽子——庶子。

重兼常兒——重き普通の子を兼ねる、普通の子供の倍も重

い。

抱輒易人——抱くとすぐ人を易へる、抱いても重いからす

ぐに人に代る。

篡位——位を篡奪する。

鯀魚——春秋晋の貪官。

鳶肩牛腹——鳶の如き肩、牛の如き腹、肩張りの腹の肥滿

せる。

谿壑可盈——谷や壑は滿し得ても壑ことはない、貪慾に

して其底の知れない。

以賄死——賄賂のことで死ぬ。

韓休―玄宗に仕へたる賢相。

過差―あやまち。

吾貌雖瘦…―吾貌瘦せたりと雖も天下は肥えたり。玄宗

が韓休相となりしより瘦せるのを見兼ねた臣が韓休を
やめさせよと言ひたる時に、玄宗は仕方なく斯く答へ
た。

解嘲―嘲りをとく。

反過來―翻つて。

贅揚―稱揚する。

矮子―背の低い人。

伊尹―湯王を助けた殷の相。

晏子―齊國の賢相。

淳于髡―齊國の人で諸侯に使して君名を揚げし勇士。

令公喜令公怒―公を喜ばしを公怒らせる、公とは桓温を

指してゐます。

短主薄―背の低い主薄(祕書)王珣は背の低い人間で桓公

(譯文)

の主薄を勤めてゐたから「短主薄」と言はれます。

磨穿鐵硯…―鐵の硯を磨り抜いて日扶桑より出ずを賦し

たる半人、(大人の半分しかないの意)、桑維翰。

伍子胥―吳王夫差の臣。

韓王信―韓信。

專諸―春秋時代の刺客。

郭解―漢時代の人で義侠を以つて聞えてゐる。

摩登―モダン。

軟玉溫香…―女の肌のきれいなのを懷一杯に抱く。「軟

玉溫香」は女の身體の美しきを譽へる言葉。

拿破崙―ナポレオン。

挑―選ぶ。

普國―プロシヤ國。

弗列特克―フレデリック。

鳥喙長頸―鳥の喙の様に尖り長い頸。

肥瘦に關して、若し美的觀點をはなれて道義人品から立論するならば、肥えた者は不運にならねばならぬ。食を蓄^{ニク}む者 肥體ならずとは、管子の名言である。子貢が淫思七日、寢ず食はず、ために骨のみの如く瘦せたが、これは確に聖人門下生の行爲である。飯顆山頭杜甫に逢ふと李白の詩に言つてゐる如く、かの老人は忠君愛國のために柴の如く瘦せかけて了つたのである。桓溫の庶子の桓元は重さが普通の子の倍もあつて、抱くとすぐに人に代る程だつたが、終に帝位を篡奪する奸臣となり、人に殺されたのである。叔魚の母は、彼の息子の張つてゐる肩大きな腹を見て、嘆息し、貪慾其底を知らず必らず賄賂を取つて死ぬであらうと言つて、見ようとしなかつた。凡そ此の種々は、皆肥えたるものは悪く、瘦せたる者は良い史實であり、韓林は宰相となつて、唐の玄宗を少しも過あらしめず、たゞ無理して、吾貌瘦せたりと雖も天下は肥えたりと言ふ強情な言葉をはき嘲を解かせたと言ふのは、特に有名なる故事である。

翻つて長短より言ふならば、支那の歴史には、特別に背の低い者を稱賛した記録を多しとしてゐる様である。第一に有名な政治家で、背の低いのは少なからずある。周公、伊尹は皆背の低い者であり、晏子は長さ六尺に満たずして、其身は齊國に相となつて、各は諸侯に顯れた。孟嘗君は矢張り渺小たる一丈夫で、淳于髡も亦人となり甚だ小さかつた。其他、能く公を喜ばしめ能く公を怒らせた短主薄玉珣、鐵の硯を磨り抜いて日扶桑より出ずを賦した半人桑維翰の如きはいづれも背の低いので名が出たものであり、背の高い人（勿論それは非常に多い）に比較して、決して遜色がある筈がないのである。武

人伍子胥、韓信の如きは皆背の高い人で、背の低いことなどある筈がないのだが、專諸、郭解は傳へるところでは背低者であつた。

こんな下らぬ話をよむと、皆は、私は瘦せつばやチビに賛成してゐると疑はれるかも知れないが、私の考はそんなに簡單なものではない。美人に對しては、私だつて勿論モダンな男だから「きれいな女を懷中に抱く」と言ふが、これより愉快なことはないと言ふものであらう。政治家に至つては、私は短小にして精悍なナポレオンは、結局のところ、自分が瘦せて長いからとて衛兵も丈の高いのを選んだプロシヤのフレデリック大王よりも遙かによい感じてゐる。長い頸、鳥の如き口の腎水の精(子華子にあり)の如き、大口で張り肩の東方の士の如きは(淮南子にあり)、大王フレデリックと比肩し得るか否かは勿論又別の問題である。

第二十八課 孔乙己

魯

迅

(一)

魯鎮の酒店の格局，是和別處不同的：都是當街一個曲尺形的大櫃臺，櫃裏面豫備着熱水。可以隨時溫酒，做工的人，傍午傍晚散了工，每每花

四文銅錢，買一碗酒，——這是二十多年前的事，現在每碗要漲到十文，靠櫃外站着，熱熱的喝了休息；倘肯多花一文，便可以買一碟鹽煮茴香，或者茴香豆，做下酒物了，如果出到十幾文，那就能買一樣葷菜，但這些顧客，多是短衣幫，大抵沒有這樣闊綽，只有穿長衫的，纔踱進店面隔壁的房子裏，要酒要菜，慢慢地坐喝。

我從十二歲起，便在鎮口的咸亨酒店裏當夥計，掌櫃說，樣子太傻，怕侍候不了長主顧，就在外面做點事罷，外面的短衣主顧，雖然容易說話，但唠唠叨叨纏夾不清的也很多，他們往往要親眼看着黃酒從罈子裏舀出，看過壺子底裏有水沒有，又親看將壺子放在熱水裏，然後放心；在這嚴重監督之下，羸水也很爲難所以過了幾天，掌櫃又說我幹不了這事，幸虧薦頭的情面大，退不得，便改爲專管溫酒的一種無聊職務了。

〔註釋〕

格局——店のつくり、店の構。

當街——通りに面して。

櫃臺——物を賣る店などで店先に置く臺、賣臺。

傍午——正午近く。「傍」は「近く」の意です。

傍晚——夕方近く。

散了工——仕事が終つた。

漲——値が上る。「長」とも書きます。

靠——着站——によりかゝつて立つて。

熱熱的——熱つさうに。

一碟―皿。

鹽筍煮―鹽煮の筍。

茴香豆―茴香を入れて茹でた豌豆類。

下酒物―酒の肴。

葷菜―なまぐさ料理(魚や肉の料理)

短衣袴―短い衣服の組、即ち労働者階級のもの。

潤綿―豪華さ、餘裕。

長衫―足の踵まである長い着物で、「短衣」に對し立派

な服装をした人を言つたものです。

蹠―歩む。

夥計―小僧、番頭、雇人。

僕―馬鹿げてゐる。

待候不了―給仕しきれない。

主顧―お客さん。

〔譯文〕

魯鎮の酒屋のつくりは、他所とは同じでなく、皆通りに面じて一つの大きな曲尺形の賣臺があり、賣臺の内部には湯を用意しておいて、いつでも酒を温めることが出来る。労働者は、正午近くや夕暮時に

嚙嚙叨叨―かまびすく饒舌りまくる。

纏來不清―からまりはさまつてはつきりしない、舌が

らまつて言葉がはつきりせぬ。

親眼看―自分の眼で見る。

黄酒―糯米で作る酒。

咄出―くみ出す。

壺子―銚子、徳利。

鑊水―水を混ぜる。「鑊」は「攪」に同じ。

幹不了―やりきれない。

幸虧―幸なことには。

薦頭―推薦した人、口をきいた人。

情面―情實。

辭退不得―やめらせることが出来ない。

仕事が終ると、いつも四文の銅貨で一杯の酒を買つて——これは二十年前のことで、今では一杯十文に上つてゐる筈だが——寶臺の外にもたれ立つて、なめる様に飲んで休息する。若しも一文餘計に費す氣になれば、一皿の鹽煮の筍或は茴香豆を買つて、酒の肴とすることが出来る。若しも十幾文まで出せば、生臭いものが一皿貰える、だがこれらの客は多くは印絆纏連で、大抵はこんな餘裕はない。たゞ長い着物を着た身装の立派な者だけが、店に並んだ隣りの家に入つて、酒を取つたり、料理をとつたりして悠くり腰を下して飲むのである。

私は十二歳から、鎮口（町の入口）の咸亨と言ふ酒屋で小僧をしてゐた。番頭は様子が餘り馬鹿氣てゐて、上等のお客の給仕は出来さうもないから、表の方で用でもしてゐると言つた。表の短い着物のお客さんは話はしやすいが、騒々しくてへどれけになるものが非常に多い。彼等は、何等も、黄酒が甕から汲み出されるのを、自分の眼で見ようとし、銚子の底に水があるかないかを見、又銚子が熱湯の中に入つてゐるのをちやんと見とどけてから、やつと安心するのだつた。こんな嚴重な監督の下に在つては、水を混ぜるのも非常に六ツ敷しい。たから數日すぎると、番頭は又、お前はこの事は出来ないと言つた。幸にも世話をして呉れた人が、顔のきく人だつたので、追出す理にも行かず、酒の燭をする一種の退屈なる職務を専ら司ることになつた。

(二)

我從此整天的站在櫃臺裏，專管我的職務，雖然沒有什麼失職，但總覺

有些單調，有些無聊，掌櫃是一副凶臉孔，主顧也沒有好聲氣，教人活潑不得；只有孔乙己到店，纔可以笑幾聲，所以至今還記得。

孔乙己是站着喝酒而穿長衫的唯一的人，他身材很高大；青白臉色，皺紋間時常夾些傷痕；一部亂蓬蓬的花白的鬍子，穿的雖然是長衫，可是又髒又破，似乎十多年沒有補，也沒有洗，他對人說話，總是滿口之乎者也，教人半懂不懂的，因為姓孔，別人便從描紅紙上的「上大人孔乙己」這半懂不懂的話裏，替他取下一個綽號，叫作孔乙己，孔乙己一到店，所有喝酒的人便都看着他笑，有的叫道，「孔乙己，你臉上又添上新傷疤了！」他不回答，對櫃裏說，「溫兩碗酒，要一碟茴香豆。」便排出九文大錢，他們又故意的高聲嚷道，「你一定又偷了人家的東西了！」孔乙己瞪大眼睛說，「你怎麼這樣憑空污人清白……」「什麼清白，我前天親眼見你偷了何家的書，弔着打，」孔乙己便漲紅了臉，額上的青筋條條綻出，爭辯道，「竊書不能算偷……竊書！……讀書人的事，能算偷麼，」接連便是難懂的話，什麼「君子固窮」，什麼「者乎」之類，引得眾人都哄笑起來；店內外充滿了快活的空氣。

〔註釋〕

整天的——日中。

失職——職務上の失錯、落度。

一副——一つの。「副」は「臉孔」(額)の陪伴詞。

臉孔——顔。

好聲氣——良い評判。

教人活潑不得——人をして活潑たる能はざらしむ、氣が晴

れる様になれぬ。

亂蓬蓬——蓬々たる。

花白——胡麻鹽まじりの、斑白の。

鬚子——ひげ。

又辭又破——きたなくて破れてゐる。

滿口——口一杯、口から出るのは皆、口をきはめて。

之乎者也——六ツ敷しい四角はつた口調。「之乎者也」は文

語體によく使用される虚字。

〔譯文〕

私は此から一日中賣臺の内側に立つて、自分の職務を専ら司つた。何の落度もなかつたが、どうも何

半體不體——分かつた様な分からね様な、チンブンカンブン。

描紅紙——赤い字で印出した習字の手本。

添上——つけたす、増す。

上大人孔乙己——描紅紙の初めに「上大人孔乙己化三千七十

士爾……」と書いてある。

排出——ならべて出す。

喊道——大聲で言ふ。

憑空——根據なく、空しく、理由なく。

汚人清白——人の潔白を汚す。

弔着打——つるして打つ、つるし上げて打つ。

漲紅了臉——さつと顔を赤くする。

爭辯——言ひ理をする。

不能算——とは算せぬ、……は言ひない。

引得——それがために……になる。

となく單調であり手持無沙汰を覺えた。番頭は臉の有る顔をしてゐる、客にも評判はよくない、氣がはれる理はなかつた。たゞ孔乙己が店に來ると、何とか笑ふことが出來たので、今でもまだ記憶してゐる。孔乙己は立つて酒を飲む方で而かも長い着物を着てゐる唯一の者だつた。彼の身體格好は高く大きく青白い顔をして、皺の間によく傷の痕をまじゐて、そして一束の蓬々たる胡麻鬘鬘であつた。着てゐるものは、長い衣服だが、汚れたり破れたりして、十餘年も補ふたこともなければ洗つたこともない様であつた。彼は人と話をするのに、いつも口さへ開けば之乎者也式の古文口調で、人にはチンプンカンプンであつた。彼の姓は孔なので、他人が習字手本の「上大人孔乙己」と言ふ分かつた様な分らん様な言葉から、一つの綽名を取つてやつて孔乙己と呼んだのである。孔乙己が店に來ると、居合はせた飲助どもは皆彼を見て笑ひ、或るものは「孔乙己、お前の顔の上には又新しい傷痕がふえたな」と大きな聲で言ふ。彼は答へもせず、賣臺の内に向つて番頭に「二本つけてくれ、茴香豆一皿貰はう」と言つて、九文の銅貨を列べ出す。彼等は又故意に大聲で怒鳴る「お前は又きつと人の物を盗んだなあ」孔乙己はすると大きな目を剥き出して言ふ「貴様は何故故なく人の潔白を汚すのか」「何が潔白だ、俺あ一昨日お前が何家の本を盗んで吊り下げて打たれてゐるのをちゃんと見たんだぞ」孔乙己はさつと顔を赤らめ、額の上には青筋を一本々々綻び出し、言譯をして言ふ「本を盗むのは盗むと言ひるかい…本を盗む…それは學者のやることだ、盗すむと言ひるかい」續いて六ツ敷しい言葉「君子は固より窮す」とか「者ならんか」とかの類が出て來、そのため皆がどつと笑ひ出してさふ。店内外には愉快な空氣が充滿する。

(三)

聽人家背地裏談論，孔乙己原來也讀過書，但終於沒有進學，又不曾營生；於是愈過愈窮，弄到將要討飯了，幸而寫得一筆好字，便替人家鈔鈔書，換一換飯喫，可惜他又有一樣壞脾氣，便是好喝懶做，坐不到幾天，便連人和書籍紙張筆硯，一齊失蹤，如是幾次，叫他鈔書的人也沒有了，孔乙己沒有法，便免不了偶然做些偷竊的事，但他在我們店裏，品行却比別人都好，就是從不拖欠；雖然間沒有現錢暫時記在粉板上，但不出一月，定然還清；從粉板上拭去了孔乙己的名字。

孔乙己喝過半碗酒，漲紅的臉色漸漸復了原，旁人便又問道，「孔乙己，你當真認識字麼？」孔乙己看着問他的人，顯出不屑置辯的神氣，他們便接着說道，「你怎的連半個秀才也撈不到呢？」孔乙己立刻顯出頹唐不安模樣，臉上籠上了一層灰色，嘴裏說些話；這回可全是之乎者也之類，一些不懂了，在這時候，衆人都都哄笑起來；店內外充滿了快活的空氣。

〔註釋〕

背地裡——こつそりと。

讀過書——學問をしたことがある。清朝前の「讀書」とは大抵の場合科學の試験に應ずるためであつたので、此の場合「科學の準備のため學問した」の意です。終於——終に。

進學——秀才になる試験をうける。

營生——生活の道を立てる。

愈過愈窮——生活して行けば行くほど貧乏になる、生活が

益々苦しくなる。

弄到——にまで立到る。「弄」は迂餘曲折のあつたことを

意味します。

討飯——乞食をする。

一筆好字——一人前のうまい字。

好喝隨做——酒がすきで仕事嫌ひ。

〔譯文〕

人の蔭での話をきくと、孔乙己も元は學問をしたことがあつたのだが、秀才には成れずに終つて、生

坐不到幾天——幾日間と坐つてゐられない、幾日間とちつとしてゐられぬ。

免不了——を免れきれぬ、どうしても……と言ふことにな

る。

拖欠——借金を倒す。

間或——まゝ、たまには。

粉板——塗板。

定然——必らず。

還清——きれいに返還す。

當真——眞實に。

不脛置辯——辯解するのがいまいましい。

撈不到——すくひとれぬ、獲得するまでに至らない。

顏唐不安——がっかりして落つかない。

籠上——こめる、包む。

一些不體——少しも分らない。

計を立てるのも下手だつたため、益々貧乏になつて、乞食をせんとするまでに立至つた、幸に一人前の上手な字が書けたので、人のために本を寫し取つてやつて、一碗の飯に代へて生活してゐるのだ。だが惜しいことには、彼には悪い癖があつた、それは酒が好きで仕事嫌ひで、數日とちつとしてゐない中に、御本尊から書籍、紙、筆硯まで一齊に姿を消して了ふのである。こんなことが何度かあると、彼に本を寫し取らせる者もなくなつて了つた。孔乙己は仕方なくなり、偶々盗み取る事もやらざるを得なくなるのであつた。だが彼は私たちの店では、品行の方は外の者よりは良くて、これまで借を滞らせたこともなく、たまに現金がなくて、暫時塗板の上に印してあつても、一箇月とたぬ中に、きつときれいに還へし、塗板の上から孔乙己の名を拭去られるのであつた。

孔乙己は、半碗の酒を飲むと、朱を注いだ顔は段々原に復して來る、さうすると傍の者が又尋ねる「孔乙己、お前は眞實に字を知つてゐるのかね」孔乙己は自分に聲をかけた者を見て、言ひ譯するのもいまいましい様な表情をする。彼等はつゞいて「お前はどうして秀才の半分もとれなかつたのかなあ」と言ふと、孔乙己はすぐに落胆し落つかざる様な様子をし、顔は一きは灰色につゞまれ、口では何かしら言ふのだが、今度のは全く之乎者也の類で少しも分らない。この時、皆の者もどつと笑ひ出し、店の内外は愉快な空氣が充滿する。

(四)

在這些時候、我可以附和着笑、掌櫃是決不責備的、而且掌櫃見了孔乙

己，也每每這樣問他，引人發笑，孔乙己自己知道不能和他們談天，便只好向孩子說話，有一回對我說道：「你讀過書麼？」我略略點一點頭，他說：「讀過書，……我便考你一考，茴香豆茴字，怎樣寫的？」我想，討飯一樣的人，也配考我麼？便回過臉去，不再理會，孔乙己等了許久，很懇切的說道：「不能寫罷？……我教給你，記着！這些字應該記着，將來做掌櫃的時候，寫賬要用，」我暗想我和掌櫃的等級還很遠呢，而且我們掌櫃也從不將茴香豆上賬；又好笑，又不耐煩，懶懶的答他道：「誰要你教，不是草頭底下一個來回的回字麼？」孔乙己顯出極高興的樣子，將兩個指頭長指甲敲着櫃臺，點頭說：「對呀對呀！……回字有四樣寫法，你知道麼？」我愈不耐煩了，努着嘴走遠，孔乙己剛用指甲蘸了酒，想在蘸上寫字，見我毫不熱心，便又歎一口氣，顯出極惋惜的樣子。

有幾回，鄰舍孩子聽得笑聲，也趕熱鬧，圍住了孔乙己，他便給他們茴香豆喫，一人一顆，孩子喫完豆，仍然不散，眼睛都望着碟子，孔乙己着了慌，伸開五指將碟子罩住，彎腰下去說道：「不多了，我已經不多了，」直起身又看一看豆，自己搖頭說：「不多不多！多乎哉，不多也，」於是

這一羣孩子都在笑聲裏走散了。

〔註釋〕

責備——とがめる、叱責する。

引人發笑——人を笑はせる。

談天——世間話をする、閑談する

點一點頭——一寸うなづく。

考——試験する。

配——……する資格がある。

回過臉去——顔をそむける。

理會——相手にする、かまふ。

記着——覚えておけ。

寫賬——帳面をつける。

上賬——帳面につける。

〔譯文〕

こんな時、私は一緒になつて笑ふことが出来る。番頭は決して叱責しない。それのみか番頭は孔乙己を見ると、自分もいつもこんな問をして人を笑はせる。孔乙己は自分は彼等と世間話することは出来ぬのだと知つてゐるので、仕方なく子供と話しをする。或る時、私に「お前は本を讀んだことがあるか

好笑——可笑しい。

不耐煩——うるさくて堪らぬ。

懶懶的——嫌々ながら。

草頭——草冠。

指甲——爪。

努着嘴——口をとがらして。

碰了酒——酒をつけて。

趕緊開——野次馬に押しよせる。

圍住——とりまいて了ふ。

着了慌——慌てゝ了つて。

罩住——覆ふ、掩被せる。

い」と尋ねたので私は一寸黙頭いた。彼は言った「本を讀んだことがある………わしが一つお前を試験してやらう。苗香豆の苗字はどう書くかな」私は、乞食同様な人も、私を試験する資格があるのだからかと思つて、すぐに顔をそむけて、二度と相手にしなかつた。孔乙己はやゝ暫く待つてから、非常に懇切に言つた「書けないのか………わしが教へてやらう。覚えておけよ、こんな字などは覚えておかなければいかん。いまに番頭になつた時、帳面をつけるのに役に立つ」私は祕かに、私と番頭の等級はまだとても遠い。それに、家の番頭は今まで苗香豆を帳面に書いたことがないと考へた。だが可笑しいし五月蠅くて堪らないので、いや／＼乍ら彼に答へた。「誰が教へて貰うもんか、草冠の下に來回（往復する）の回ではないか」孔乙己は極めて嬉しうな様子を表はし、二本の指の長い爪で賣臺を叩き乍ら、黙頭いて言つた「さうだ、さうだ………回には四つの書き方があるが、お前知つてゐるか」私は益々五月蠅くて堪らなくなつた。口を尖らして遠くに行つて了つた。孔乙己は、丁度爪に酒をつけて、賣場の上に字を書かうとしてゐたが、私がちつとも熱心でないのを見、又一口嘆息をして、極めて残念さうな様子をした。

何回も、近所の子供も笑聲をきゝつけて野次馬に押しよせ、孔乙己をとり圍んだ。孔乙己は彼等に苗香豆を食べさせた、一人に一つずつであつた。子供は豆を食べ終つても依然として散らず、眼は皆血に向けられてゐた。孔乙己は慌てて、五本の指を伸し開いて皿をしつかりと掩つて、腰をかゞめて言つた「少くなつて了つた、わしはもう少くなつて了つた」眞直に身體を起して、豆を見て、一人首を振つて言つた「多からず多からず！ 多からんか！ 多からざる也！」そこで、一群の子供は笑聲の中に散らば

つて了つた。

(五)

孔乙己是這樣的使人快活，可是沒有他，別人也便這麼過。有一天，大約是中秋前的兩三天，掌櫃正在慢慢的結賬，取下粉板，忽然說，「孔乙己長久沒有來了，還欠十九個錢呢！」我纔也覺得他的確長久沒有來了，一個喝酒的人說道，「他怎麼會來？……他打折了腿了」掌櫃說，「哦！」「他總仍舊是偷，這一回，是自己發昏，竟舉偷到了舉人家裏去了，他家的東西，偷得的麼？」「後來怎麼樣？」「怎麼樣？先寫服辯，後來是打，打了大半夜，再打折了腿」「後來呢？」「後來打折了腿了，」「打折了怎樣呢？」「怎樣？……誰曉得，許是死了，」掌櫃也不再問，仍然慢慢的算他的賬。

中秋過後，秋風是一天涼比一天，看看將近初冬；我整天的靠着火，也須穿上棉襖了，一天的下半年，沒有一個顧客，我正合了眼坐着，忽然間聽得一個聲音，「溫一碗酒，」這聲音雖然極低，却很耳熟，看時又全沒

有人，站起来向外一望，那孔乙己便在櫃臺下將了門檻坐着。

〔註釋〕

中秋——陰曆八月十五日。

結賬——帳面をメめる。

欠——借りになつてゐる。

的確——確かに。

總仍舊——どうも依然として。

發昏——眼がくらむ、見境がつかなくなる。

舉人——秀才が鄉試に合格すると授けられる呼稱。

服辨——訛證文。

〔譯文〕

孔乙己はこの様に人を愉快にするが、彼が居らなくても、人はこの様に過して行くのである。

或る日、大體中秋節二三日前だつたらう、番頭が丁度緩くりと帳面をしめてゐたが、塗板を取り下げて、突然言つた「孔乙己は長い間來ないが、まだ十九文貸しになつてゐるんだが」私も始めて彼がたしかに長い間來なかつたと感じた。一人の酒を飲んでゐた者が言つた。「彼はどうして來る筈があるものか……彼は足を打ち折つたんだ」番頭は「ホー」と言つた。「彼はどうも前の様にぬすむんだ。今度は、

許是……多分……だらう。

一天涼比一天——一日一日と涼しい。

看看——やがて。「剛剛」とも書きます。

也須穿上……でも矢張り……をきなければならぬ。

忽然間——突然。

棉襖——綿入れの上衣。

耳熱——きき憶えのある。

門檻——閤。

自分ながらぬかりやがつて、まあ丁學人の家へ盗みに行つたのさ。あの家の物が盗めますかよ」「それでどうしたんだ」「どうしたつて、まづ詮證文を書いて、それから歐られてよ、半夜餘りも歐られてその上足を打ち折られたのさ」「其の後は」「それからは足を打ち折られたのさ」「打ち折られて、どうしたね」「どうしたつて……誰が知るもんか、多分死んだらうよ」「番頭ももう尋ねず、元通り悠くりと自分の勘定をしてゐた。

中秋すぎると、秋風は一日々々と冷えて來、やがて初冬に近づかんとしてゐた。私は毎日火の傍によつてゐても、綿入れの上衣を着なければならなかつた。或る日の午後、一人の客もなく、私は丁度眼を閉じて腰を下してゐた。ふと「酒一本つけてくれ」と言ふ聲を耳にした。この聲は極めて低かつたが、非常にきゝ憶えがあつた。見ると又誰も居ない。立ち上つて外を見た。かの孔乙己が寶臺の下に闕に向つて坐つてゐた。

(六)

他臉上黑而且瘦、已經不成樣子；穿一件破夾襖，盤着兩腿，下面墊一個蒲包，用草繩在肩掛住；見了我，又說道，「溫一碗酒，」掌櫃也伸頭去，一面說，「孔乙己麼？你還欠十九個錢呢！」孔乙己很頹唐的仰面答道，「這……」下回還清罷，這一回是現錢，酒要好，「掌櫃仍然同平

常一樣，笑着對他說，「孔乙己，你又偷了東西了！」但他這回却不十分分辯，單說了一句「不要取笑」。「取笑要是不偷，怎麼會打斷腿」孔乙己低聲說道，「跌斷，跌，跌……」他的眼色，很像懇求掌櫃，不要再提，此時已經聚集了幾個人，便和掌櫃都笑了，我溫了酒，端出去，放在門檻上，他從破衣袋裏摸出四文大錢，放在我手裏，見他滿手是呢，原來他便用這手走來的，不一會，他喝完酒，便又在旁人的說笑聲中，坐着用這手慢慢走去了。

自此以後，又長久沒看見孔乙己，到他了年關，掌櫃取下粉板說，「孔乙己還欠十九個錢呢！」到第二年的端午，又說「孔乙己還欠十九個錢呢！」到中秋可是沒有說，再到年關也沒有看見他。我到現在終於沒有見——大約孔乙己的確死了。

〔註釋〕

不成樣子——形をなしてゐない、樣子がなつてはいない、

見苦しい。

夾襖——裕。

盤着兩腿——兩脚を組んで。

塾——しく。

蒲包——葛蒲で編んだかます。

掛住——しつかひつかける。

還清——きれいだ返還する。

分辯——申譯をする、辯解する。

不要取笑！ひやかしてはいけない。

跌斷！つまづき折る。

再提！再び言ふ、更に言ふ。

端出去！捧げ持ち出す、持つて行く。

〔譯文〕

彼の顔は黒く且つ瘦せて居り、己に見られぬ様に成つてゐた。一枚の裕をき、兩方の足を組んで、下には一枚の菖蒲編の爪をしき、草の繩で肩の上にしつかりかけてゐた。私を見ると、又「酒を一本つけてくれ」と言つた。番頭も頭をのぼし乍ら「孔乙己か、あんたにまだ十九文貸があるよ」と言つた。孔乙己は非常にぐつたりとした様で顔を上げて言つた。「此れは……次にきれいにする、今度は現金だ、酒はいゝのをなあ」番頭は依然として平常と同じく、笑ひ乍ら彼に言つた「孔乙己、あんたは又物を盗んだなあ」だが彼は今度は餘り言ひ譯をせず、たゞ一言「からかつてはいけねえ」と言ふのみだつた。からかふ、盗まなければ、脚を打ち折られることがあるかい」孔乙己は聲を低くして「轉んで折つたのだ、轉んで、轉んで……」と言つたが、彼の眼は番頭に、もう言つて呉れるかと頼み込んでゐる様であつた。此の時、己に數人の人が集つてゐる番頭と笑つた。私は酒を温めて、持つて行き闕の上に置いた。彼は破れた衣服のかくしから銅貨四文をさぐり出し、私の手の中に置いた。見ると彼の手は一面に泥だらけだつた。これは彼がこの手で歩いて來たからなのである。やがて彼は酒を飲み終ると、すぐに他の者の談笑の裡に、坐つたまゝ、その手でそろ／＼と歩き去つた。

滿手是泥！手一面泥である、手は泥だらけである。

自此以後！これからは、

年關！年末。

これからは、又長い間孔乙己を見なかつた。年末になつて、番頭が塗板を取り外して「孔乙己はまだ十九文拂はない」と言つた。次の年の端午の節に又「孔乙己はまだ十九文拂はない」と言つたが、中秋には言はず、更に年末になつても彼を見なかつた。

私は今日まで終に見ず居る——多分孔乙己は確かに死んだのだらう。



民國三十五年六月一日 初版印刷
民國三十五年六月十日 初版發行

教科書式 **華語自修書** 卷四

臺北市定價臺幣貳拾圓
著者 香坂順一

臺北市文武街二段七號

發行者 榑水石軒

印刷所 臺北市中石路街二段二十一號

華文堂印書局

臺北市文武街二段七號

不許複製
發行所 榑水軒

外語學院版・香坂順一薦 華語學生辭典

クローズ表紙・二百八十餘頁
携帯至便 ポケット型美裝本

定價 貳拾八圓
書留送料 壹圓參拾錢

本辭典は現在中國に於て日常使用せられる字彙を全部収録し、懇切丁寧に注音符號、ウエード式、日本假名による發音と日譯を附すと共に、豊富に單語を排列して、國語研究學習者の便を計つたものである。本書の臺灣出版に關しては、在日本外語學院主の連絡請解を得て居る。

外國語學校教授宮越健太郎・杉武夫共著 國語基準會話

B6版百十八頁 定價五圓・書留送料壹圓參拾錢

著者二十年間の教授經驗により生み出されしものにして、絕對他の追隨を許さず、内容は初級より中級へ進む程度の各種百數實際會話を取扱ひ、更に例題、語法、類似語型を加へ、卷末に單語本位に發音を附す。香坂順一著（目下印刷中近日發賣）

國語基準會話詳解

原書により親しく教を承けし著者は、原書著者の意を體し、讀者をして恰も直接講義を聴く如く、本文發音、語法、語型等につき、初學者も自修可能なる如く、微に入り細を穿ち解説せるもの。

方賓 觀編

國音常用字一覽表

大型折本十四頁 定價參圓・送料拾錢

本表は教育部選定の常用文字約七千を、注音符號に依つて系統的に發音四聲を示したもので、國語學習者必備の表式發音辭典である。限定部數・實費出版。香坂順一著

華語自修書

第一卷 基本構文の説明と其の應用に重點を置く。

第二卷 基本構文の應用と會話文に重點を置く。

第三卷 白話文の讀解と稍々程度高き會話文の説明に重點を置く。

第四卷 文言文詩文中級高級白話文に重點を置く。

中山大學元教授趙寶如校閱・香坂順一著 國語發音辭典

クローズ表紙・三百餘頁
攜帶至便 ポケット型美裝本

定價 參拾圓
書留送料 壹圓參拾錢

中國語を學習するには發音辭典が最先に必要なつて来る。

本書は音引、訓引、更に百家姓を収めた外、國語發音概要、注音符號について説明してある。

本書の如く完備せるものは、未だ何れの國にも出版され居らず、發音辭典としての決定版である事は疑ひない。

國家圖書館



002604328

D8

